

ロキ・ファミリアに入ってダンジョンに潜るのは間違っているだろうか

戦犯

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

祖父の死を乗り越え、冒険者の街【オラリオ】に行くことを決意した少年、ベル・クラネルは祖父の形見であるロザリオを持って、ダンジョンでどんな「偉業」を成すのか・・・

ロキ・ファミアリアに入って「英雄」を目指す精霊の力を宿した少年の物語

12 / 18 ぼちぼち再開します

目次

プロローグ	1
少女との出会い	4
ロキ・ファミアリア	12
与えられた力	23
秘められし才能	31
想いの先	43
模擬戦	50
恐怖	60
豊穡の女主人	67
魔喰いの呪剣	76
衣替え	85
限界突破	89
怪物進呈	95
驕り	102
想像	111
魂の昇華	119
宴	126
パーティー	136
限界の差	146
新たな道	155
準備	164
初遠征	171
無力感と、昏き望み	179
小さな騒動	185

## プロローグ

「ベル、冒険者になりたいか？オラリオはいいぞ、ダンジョンでの冒険、旨い飯や酒。そして何より・・・女との出会いだ！そんな男の浪漫が何でも揃ってやがる。まあ・・・女は頑張り次第だがな、ベルよ」  
そう、祖父が頭に手を置きながらいつも語っていた。

オラリオという、自身がまだ見ぬ土地がいかに素晴らしいところなのか何度も聞かされた。

そんな祖父の話の中で少年ーベル・クラネルが特に興味を持ったのは所謂、「英雄」と呼ばれる者達の話だった。

ベルは今年で十四歳になる。

英雄などという存在に憧れるのはもっと小さな子供で、こんな歳になつてまでそれを夢見ているのは時には笑われることなのかもしれない。

ーそれでも止められない。憧れは日に日に大きくなるばかりだった。

祖父が暇つぶしと言って綴つてくれる英雄達の物語。

自分の部屋に積み重なっていくそれらはなん度も読み返した。

そして自分もいつかそんな存在に・・・と、幾度となく思った。

強くなつて、多くの人を救つて・・・可愛い女の子と出会つて楽しく過ごす。

そしていつか、「英雄」と呼ばれるようになりたい、と願ひ続ける。

それが、少年ーベル・クラネルの密かな「夢」であった。

そして、これはその少年が紡ぐ、新たなる英雄譚・・・

「ベル・・・ベルはいるか！」

朝早く、荒く家の扉が叩かれた。

上がりきらない瞼を擦り、あくびを手で押さえながらはーい、と返事を返しながら扉を開ける。

扉の前には、いかにも満身創痍といった風貌で片腕を押さえている初老の人物が立ち尽くしていた。

「村長さん!?大丈夫ですか!」

その人物は、ベルの住んでいる村の村長を務めている人物であった。

ちょうど数日前、ベルの祖父と一緒に離れた街まで用事で出かけていたはずである。

「儂は、なんとか大丈夫じゃ・・・」

「とりあえず上がってください!傷の手当てを!」

傷ついていない方の手を取り、あまり揺さぶらないように祖父と自身が住む家へと導く。

そこで、気付く。一緒にいたはずの祖父の姿がどこにも見えないことに。

「すまない・・・、本当にすまない・・・っ!」

導く手に抗い、その場で頭を下げ始める村長を見てぎよつとしたのも束の間、聞きたくなかった現実が告げられた。

「ベル、お前の祖父じゃが・・・恐らくは、死んだ」

「っ・・・!?そんな・・・どうして!」

「・・・帰り道、村のはずれにモンスターが出た」

「・・・!」

モンスター、それは人を脅かす驚異。

人を喰らい、村を襲い、人に厄災をもたらす存在。

祖父が書いてくれた本にも何度も英雄達を阻む者として記されていた。

「まさか、おじいちゃんは・・・」

「・・・ああ、モンスターと戦い、弱ったところで最後に残ったモンスターが道連れに・・・」

昔、モンスターが村を襲ったことがあった。

初めて見る異形の怪物に腰が抜け、殺されそうになっていたベルの前に鍬を持って祖父が助けに来てくれた。

英雄譚に出てきた英雄のように、強い武器や魔法を使って戦ってい

たわけではなかった。

それでもその時のおじいちゃんやベルの中ですつと英雄だった。勇気を持ち、こんな風に人を守れたらなと心から憧れた。

涙が溢れた。

もう祖父に会えない。

その現実がひどく心を締め付けた。

泣きながら叫ぼうとも思った。

目の前にいる村長に、なぜ見捨てたのかと行き場のない悲しみをぶつけようとした。

だが、目の前の男も悔しき、悲しきに涙をこぼしていた。

申し訳なき、自分に力があれば、彼を救えたのではないかという自責の念。

内心でなにを抱えているのかベルにはわからなかったが、ここで彼を責めることが間違っているということぐらいは理解できた。

しばらくした後、村長が口を開く。

「……ベル、お前の爺さんから預かりものと伝言じゃ」

そう言つて懐のポケットから取り出したのは祖父がいつも身につけていた白銀のロザリオだった。

「俺には無用の長物だったが、いつかお前の役に立つだろう、と言っていた。それと……」

村長は少し躊躇った後に伝言だ、と告げた。

『笑え。辛い時こそ笑え。何時までもメソメソ泣いてるんじゃないやねえぞ？俺に何があつたとしても、それを乗り越えろ。男なら強く生きろよ、ベル』

涙は、止まらない。

だが、少年の決意は固まっっていく。

「……これが、あいつの最後の言葉だ」

「……ありがとうございました、村長さん。しっかりと、聞きました」

そして、その決意を口にする。

「僕、この村を出てオラリオに行きます！」

## 少女との出会い

「ここがオラリオかあ・・・！」

眼前に広がる大きな街を見ながらベルは呟く。

「あの奥にでつかい塔が見えるだろう？あれはバベルって言ってね、この街のシンボルみたいなもんさ。なんでもあの塔の最上階には、たいそう美しい女神様がいるそうだよ。」

後ろで、ベルをここまで連れてきてくれた行商人のアイシヤがそう説明していた。

それを聞きながらベルは周りを見回す。

狼人、猫人、エルフなど、全然違ういろんな種族が楽しく談笑しながら歩いている。

商店街の方では、冒険者が店主に向かって「もう一声！」と、値切りを求める声が響いていた。

「ここが、これから僕が暮らす街か・・・。あ！ここまで連れてきてくれてほんとにありがとうございませう！アイシヤさん！」

「なあに、気にすることはないさ。私も話し相手ができて楽しかったからさ。さあ、行った行った！早く行きたくてウズウズしてますって顔してるよ！」

「あはは・・・それじゃあ、行ってきます！」

そう言って、僕は走り出した。

「スリには気をつけるんだよ」

「はい！」

ベルは、アイシヤの忠告を背に受けながら、これからのことに思いを馳せる。

どんな冒険が待っているのか、心を踊らせながら・・・。

――その三日後。

「お願いします！僕を【ファミリア】に入れてください！」

「断る。貴様のような田舎者を入れてこの【アポロン・ファミリア】の名に傷がつきでもしたらどうするつもりだ？」

・・・ベルの冒険はまだ始まってさえいなかった。

「なんでどこの【ファミリア】にも入れてもらえないんだろう・・・」  
そう言いながら店の窓に映る自分を見る。

160C少しの身長、初雪のように白い肌と髪。それなりに整っている顔立ちに映える深紅の瞳。

いささか「少年」といったイメージが拭えないベルの容姿を見て、屈強で強そうか、と聞かれると、多くの人が否と答えるだろう。

「畑耕してたりしてたから、筋肉はついてるはずなんだけどなあ・・・  
肌・・・は焼けないし、髪の毛でも染めようかな？」

と、本気で髪を染めようかと問の抜けたことをベルは考えていた。  
そこでふと思いつく。

「・・・エイナさんに相談してみよう。」

その数十分後、ギルド本部にベルはいた。

「髪の毛？どうして？」

「それが・・・この三日間でいろんな【ファミリア】に加入させて欲しいって回ってたんですけど、どの【ファミリア】も相手にしてくれなくて・・・見た目が悪いんじゃないかと思ったんです。」

「あはは・・・さすがに髪の毛を染めたくらいで反応は変わらないんじゃないかな・・・？それに、ベル君はそのままの方がカッコいいと私は思うよ？」

ベルの冒険担当アドバイザーであるエイナ・チュールは微笑みながらそう言った。

彼女は所謂、ハーフエルフと呼ばれる種族であった。

肩口あたりで綺麗に切りそろえられた茶髪、整った顔立ち、そして何より目を引くのはエルフ特有の尖った耳であった。そんな見た目



麗しい彼女に「かつこいい」と褒められた年頃の男の子であるベルは、それだけで顔を真っ赤にしていた。

「ま、まあそれはともかくっ！見た目だけで判断しない【ファミリア】もきつとあるから大丈夫だよ！本当は私も手伝ってあげたいんだけど・・・こればかりはベル君の意思が大事だからね」

「そうですね・・・。わかりました、もつとほかの【ファミリア】もあたってみることにします！」

「頑張つて！応援してるよ、ベル君」

「はい！今日はいろいろありがとうございました、エイナさん！」

「そうは言っても、やっぱり弱いままじゃ相手にしてくれる人が少ないのは変わらないよね・・・」

日も沈み、暗くなった宿への帰り道、ベルは一人考えていた。この三日間【ファミリア】に入れて欲しいと言う自分を嘲笑ったり、話すら聞いてくれなかったりと反応は様々だったが、すべてに共通するのは弱者を馬鹿にするよような視線。

「・・・悔しかった。情けなくなつた。「英雄」なんて大それたものを目指していながら、夢見ていながら、これまで何もしてこなかった自分が。」

自分は、弱い。おそらくこのオラリオの最底辺に位置しているだろう。

なら、どうする？冒険者になるのを諦めてどこかでは働く？

「・・・ふざけるな」

そんな軽い気持ちでなれるほど僕の「英雄」は甘くない。

弱いならあがけ、強くなるために。自分の弱さから目を背けてはいけない。

「・・・鍛錬でもしてみようかな？」

そう考えたベルはあたりを見渡す。そこで目に入ったのはオラリ

才をぐるりと囲むようにそびえ立つ城壁、それを登るためについている梯子だった。

「城壁の上なら・・・誰にも迷惑かからないだろうし、大丈夫かな？さすがに宿でナイフを振り回すわけにもいかないしね」

手元にあるナイフをみつめながら、ベルはつぶやく。このナイフはアイシャに「冒険者になるんだってね、得物はなんだい？・・・何だつて？武器を持っていないのかい！そんなんじゃモンスターと戦うどころの話じゃないよ、このナイフをあげるから、しばらくはそれで我慢してな！なあに、安物のナイフだから気にすることはないよ。」と言われて貰ったものだ。ベルにとってはこのナイフの値段でもかなり懐には厳しいので安物とは言い難かったが、好意は素直に受け取るもんだよ！と言われ、ありがたく頂戴したのだった。

「アイシャさんに振る練習くらいはしとけて言われたし、慣れるためにも素振りでもしてよう。ダンジョンに入って自分を切ったりしたら情けないしね・・・」

そう決めたベルの行動は早かった。高い城壁の上へ登り、誰もいないことを確認してからナイフを鞘から引き抜く。

「これが僕の初めての武器かあ・・・！扱いには気を付けなくちゃ。」  
そう言つて、ベルは素振りを始める。と言つても、技も型もなく、ただ振っているだけに等しいものだったが、それでも初めて武器を握った少年には新鮮なものであった。

そして数分ほど振り続けた頃、ベルの胸のあたりから不思議な光が漏れていることに気づく。

「・・・なんだこれ？」

胸元をまさぐりながら光源を探していく、すると光っていたのは・・・

「おじいちゃんのロザリオ？なんで光ってるんだろう・・・？」

ベルの祖父が孫に託したロザリオ、その中心部分に埋め込まれている空色の魔石が光っていた。

不思議に思ったベルが、その魔石を触った瞬間。目も開けていられないほどの光が溢れ出る。

「わっ!?!何!?!」

次の瞬間、ベルの意識は暗転した。

「うっ……(´▽`)は……?」

気がつくとベルは、真つ白な空間にいた。

何もなく、誰もいない。けれどどこか安心する場所。

……いや、誰もいないというのは間違いであった。

「起きた?おはよう!」

——そこには、少女がいた。腰まで届く長い銀髪、慎ましくも主張しすぎてもいない美しい肢体。あどけなさを残す整った顔立ちにぱつちりと開き透き通った空色の瞳。

「やっ<sup>パス</sup>と経路<sup>パス</sup>が<sup>ス</sup>つながったよ。君が『恩恵』を受けないままだから魔力をつなぐのに時間がかかっちゃった!もつと早くお話したかったんだけどね」

「へっ?」

急に知らない場所に居て、そこにいたとても可愛い少女が話すよくわからない内容。いろんなことが起こって混乱していたベルは素っ頓狂な声を上げてしまった。

「えっと、あなたは誰ですか?あと、ここは?経路<sup>パス</sup>っていうのは?」

「そんなに一気に聞かれたら困っちゃうなくあはは……」

「ごっ、ごめんなさい!」

「ううん、動揺するのもしかたないよね。でも、時間が限られてるから伝えないといけないことだけ言っちゃうね!」

そう言った少女の雰囲気が変わる。その空色の瞳でまっすぐベルをみつめながら、問う。

「君は、本当に英雄になりたいの?」

それまでの親しみやすいものとは違う、どこか厳かな声色。焦りながらも肯定しようとするベルを遮るように続ける。

「英雄っていうのは、君が思っているようなものばかりじゃないよ。

人の闇の部分に触れたり、殺しを見ることもあるかもしれない。そして人を助けるためには犯罪を見逃したり、何より君自身が人を殺めなれないといけないかもしれない。」

そこで一旦区切った後、さらに問う。

「この話を聞いても君は英雄になりたいと願い、その上でその覚悟はある？」

嘘は一切許されない。目の前にいる少女から放たれている無言の圧力が、ベルにそう伝えていた。

その問いに対してベルは少し考えたあとに答える。

「僕は……僕には、あなたが言うような覚悟はないのかもしれませんが。人を殺すなんて絶対にしたくないし、人が悪いことをしたら許せないと 생각합니다。それでも、僕を助けてくれたおじいちゃんのような……護りたいと思った人を護れるような、そんな英雄に僕はなりたいんです！」

ベルは、全力で自分の「夢」を語る。さつき会ったばかりの少女に熱弁を振るっていた。普通ならそんなものは理想に過ぎない、と一蹴されるだろう。だが、その少女は違った。

満面の笑みを浮かべて、満足そうにしていた。

「うん、うん！それでこそベルだね！その気持ちを忘れちゃダメだよ？」

「は、はい！……あれ？どうして僕の名前を？」

「ふふふ……それはずっとベルのそばにいたからだよ

！」

「そばに……？あなたとは初対面だと思うんですけど……」  
何より、こんなに可愛い少女を一度見て忘れるわけがない。

「まあ、それはそのうちわかると思うよ！あ、ちよつと顔こっちに寄せてくれない？」

「えっ……、こうですか？」

ベルは自分より少し背の低い少女に目線を合わせるように腰を落とすとしていく。

「……ちよつとだけ目、つむつてくれる？」

少し顔を赤くしながらそういう少女を不思議に思いながらも言われた通りにすると、

「……ちゅっ、と額に柔らかいものが押し付けられた。」

「?!?!?!」  
自分が少女にキスをされたとわかったベルが顔を真っ赤にしながら前を見ると、ベルに負けなくらい顔を赤くした少女の姿があった。

「え……?あの、ふえ……?」

もちろん女の子に額とはいえキスなんてされたことのないベルがなんとも情けない声を出していると少女はふふっ、と声を漏らした。「ベルは本当に初心だね〜!い、今のは私からのプレゼント!これからベルの助けになると思うよ!」

そんなベルを見て少し落ち着いたのか、自分のことを棚に上げて少女はベルを茶化す。

その時ベルは、キスされた額から何が暖かいものが自身の中に入ってくるのを感じていた。一切の曇りのない明るい光。そんなイメージが頭をよぎる。

そしてその瞬間、急にベルの意識が遠のく。

「あ、れ……?」

「時間切れかあ……もうちよつと話したいことあったんだけどなあ〜。でもベルが頑張り続けてくれればまた会えるから、がんばってね!」それはつまり、しばらくは会えないということ、と悟ったベルは、必死に意識をとどめる。聞かなければ、と

「あなたの……名前は……?」

その言葉にキョトンとし、驚いたような顔をした少女は、ニコリと笑い、言う。

「私はシエリア。ベル達が精霊って呼んでる存在だよ!」

「シエリア……さん……」

「シエリアでいいよ〜!これから長い付き合いだと思うから、よろしくね!ベル!」

その言葉を最後に、ベルの意識は再び暗転した。

「何してるんやアイズたああああん！」

「・・・こうすればいいって前にリヴェリアが言ってたから」

「あんの母親め・・・！な、なあアイズたん？うちにはやってくれへんのか？」

「嫌です」

「ん・・・？」

意識が戻ったベルは、自分の上あたりで誰かが言い争う声を聞いた。そして感じたのは、頭を撫でる優しい手のぬくもり。

「お母さん・・・？」

「あ、起きた」

「・・・ごめんね、私はきみのお母さんじゃないよ」

ぼやける視界が次第にはつきりしてくる。

初めに目に入ったのは金色の髪。

いつの間にか上がっていた太陽の光を受けて輝いている。

・・・そして、視線が交差する。

深紅の瞳と金色の瞳。

これが、少年ベル・クラネルと、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの出会いだった。

## ロキ・ファミリア

アイズ・ヴァレンシユタインはその日、いつものようにダンジョンに行く前に鍛錬をしようと城壁の上へと来ていた。ベルとは違って階段を登り、上がりきった時にいつもは誰もいないはずの場所に一人、白髪の少年が倒れているのを見つける。

「・・・大丈夫ですか？」

その言葉に反応はなかったが、息はしつかりしているので寝ているだけと分かったアイズはどうしようかと悩む。

（・・・確か、リヴェリアがこうするといいつて言ってたっけ）

と、彼女の所属している「ファミリア」の副団長であるリヴェリア・リヨス・アールヴに言われたように自分の膝を寝ている少年の頭の下に入れる。俗に言う、膝枕であった。

普段のアイズであったならばいくらリヴェリアにやれと言われてもしないと断言できるアイズだったが、不思議と抵抗はなかった。初めてあったはずの少年に、なにか暖かいものを感じているのだった。（・・・少しくらいなら、撫でてもいいかな？）

そう思ったアイズは自分の膝の上にいる少年の白い髪を撫でる。

そこには、第一級冒険者であり、圧倒的な剣技で敵を屠る【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの姿はなく、どこか幸せそうに、少し赤く染まった顔で少年の頭をなでている少女の姿があった。と、そこに「アイズたくん、ダンジョン行く前にちよいと『ステイタス』を・・・つてなにしているのやアイズたあああああん！」

短い赤い髪を後ろで束ね、薄く開かれた目。全くないと言ってもいい女性らしさというハンデを背負ってなお見る者を魅了する美しい顔立ち。彼女こそが、アイズが所属する「ロキ・ファミリア」の主神であるロキであった。

・・・しかし、その見た目も彼女のおっさん臭い言動で台無しになっていた。

「・・・リヴェリアがこうするといいつて前言ってたから」

「あんの母親め・・・な、なあアイズたん？ウチにはやってくれへんの

か？」

「嫌です」

・・・そう、ロキはいつもセクハラ紛いのことをしてはアイズに吹っ飛ばされていたのだ。

「ん・・・？」

そうやって騒いでいたからだろうか、少年がうつすらと目を開ける。

綺麗な深紅の瞳だった。

(・・・なんだか、兎みたい)

「お母さん・・・？」

その声に、ロキも起きたと気づいたのか視線を少年へ向ける。

「あ、起きた」

「・・・ごめんね、私は君のお母さんじゃないよ」

「へっ・・・？」

「・・・？」

アイズは膝元で撫でられ続けている少年を見る。するとその顔が赤く染まったかと思うと、

「う、うわあああああああ!？」と、声を上げて膝から飛び上がるのだった。

ベルは混乱していた。起きたら少女の膝の上で頭を撫でられていたのだ。

——綺麗なだった。その金色の瞳を見た瞬間、顔が熱くなって胸が高鳴る。自分が目の前の少女に一目惚れしたと気づくまでそう時間はかからなかった。

(まだダンジョンじゃないけど・・・出会いを求めるのは間違ってたな  
かったよ、おじいちゃん！)



とりあえず、現状を把握するために話しかけようとするが、上手く言葉が紡げない。

「えっと・・・あの・・・」

「・・・私がここに来たら、君がここに倒れてたんだよ」

「え・・・？」

そう言われて周りを見る。そして自分が宿ではなく、城壁の上にいることに気づく。

(そっか、昨日鍛錬しててそのまま・・・)

「その、すみませんでした・・・えっと・・・」

「・・・私はアイズ、アイズ・ヴァレンシュタイン」

「す、すみませんでした！ヴァレンシュタインさん」

「・・・アイズ」

「え？」

ベルの言葉に少しむっとした顔でアイズは言う。

「・・・アイズって呼んで欲しいな」

(か、かわいい・・・！)

既にベルの心臓は限界に近かった。

「は、はい！アイズ・・・さん」と、顔を真っ赤にしているとアイズではなく、その隣にいた朱色の髪をした女性に話しかけられる。

「なあ、自分ここで何しとったん？」

「え！あ、その、強くなりたいので鍛錬を・・・」

「ふくん・・・そんで疲れてぶっ倒れてアイズさんの膝の上で爆睡しちゃーわけか！」

かっかっか、と笑いながら女性が言ったその言葉に先ほどのふとももの感触を思い出し、顔を赤くするベルだったが慌てて立ち上がり頭を下げる。

「その、本当にすみませんでした！」

「・・・気にしないで、私がしたかったただだから」

その言葉にまた顔を赤くしていると、女性から声がかかる。

「しっかし綺麗な口ザリオやなく、ちよつと見せてくれへんか？」

「あ、はい！どうぞ・・・」

そう言われ、首からかかったロザリオを渡す。

「誰かからもらったんか？」

「祖父の・・・形見なんです」

「・・・そうか、悪いこと聞いたな。スマン」

そう言った言った女性は頭の後ろをかきながらバツの悪そうな顔をしていた。大丈夫です、と返されるロザリオを受け取ると、

「鍛錬してたつてことは冒険者なんやろ？どこの【ファミリア】や？」

「うぐっ・・・それがオラリオに三日前に来たんですけどどこの【ファミリア】にも入れてもらえなくて・・・」

「まだどこにも所属してない？」

「・・・はい、今日も回るつもりだったんです、あはは・・・」

「ふくん・・・」と、何が考えるような素振りを見せた後にこう言い放す。

「じゃあ、ウチの【ファミリア】来るか？」

一瞬言葉の意味を理解出来なかったベルであったがすぐに

「・・・!?神様だったんですか!?!」

「気づいてなかったんかいな・・・せやで、ウチは神や！ほんで、どうする？」

三日間探していた【ファミリア】に入れるのだ、驚きながらも嬉々として返事をする。

「ぜ、ぜひおねがいします!」

「よっしゃ！ほんならとりあえずうちのホーム行こか！アイズたんも一回帰ることになるけどええな？」

「・・・わかった」

そしてベルは朱髪の女神とアイズに連れられ、これから自分の入る【ファミリア】のホームへと向かう。その道中、ふと気になったことを尋ねる。

「そういうえば、神様のお名前ってなんて言うんですか？」

その言葉に先程よりも呆れたような表情をして、

「それもわかってなかったんかい・・・。結構有名やと自負しててんけどなあ・・・ウチの名前はロキ！やから自分が入ることになるのは【ロ

キ・ファミリア】っちゅーわけや。そういや自分こそなんて名前なんや?・・・おい?聞いたるか?」

ベルは固まっていた。

(・・・【ロキ・ファミリア】?)

ベルが三日、いや四日前にエイナから受けた【ファミリア】についての説明。その中で二つの【ファミリア】が現在のオラリオの二強と言われている、と聞かされていた。

一つが美の女神フレイヤ率いる【フレイヤ・ファミリア】。そしてもうひとつこそが【ロキ・ファミリア】だったのである。

「あ、あの、【ロキ・ファミリア】って、あの【ロキ・ファミリア】ですか?」

「・・・?何が言いたいんかわからんけどオラリオにロキはウチしかおらんぞ?」

「・・・ええええええええええ!?!」

高い城壁の上、朝早くに兔の叫び声が木霊した。

「さて、ようこそ!ウチらのホーム!」

落ち着いた後、軽い自己紹介を済ませながら済ませ、最北端にあるメインストリートをしばらく歩いて見えてきたのは、【ロキ・ファミリア】のホームである黄昏の館だった。

「ここが、黄昏の館・・・」

メインストリートからひとつひとつ外れた街路の脇、佇むようにそびえ立つ大きな館にベルは圧倒されていた。

「じゃあ、とりあえず入団試験でも受けてもらおか!」

「・・・えっ!?!」

その言葉にベルは焦った。オラリオ最強の【ファミリア】の試験だ、きつと厳しいのだろう。これまでの三日間、断られ続けた記憶が蘇る。

「つて言っても、面接みたいなものから安心せい、ほな行こかー！ア  
イズたん、フィンとリヴェリア呼んできてくれへんか？」

「・・・わかりました」

ここに来るまでほとんど話していなかったアイズは館の奥へと姿  
を消した。

そして連れてこられたのは館の中央あたりにある、広い中庭であつ  
た。そこでベルとロキがしばらく待っていると、アイズを含めた三人  
がこちらへ向かってきているのを見つける。そしてベルの真正面に  
来ると足を止めた。

「君がロキが連れてきた新人かな？」

「は、はいーベル・クラネルといいます！」

そう話しかけてきたのは小人族の男性だった。少年のような見た  
目でありながら実は四十をも超えていると言われている。

「僕はフィン・ディムナ。この【ロキ・ファミリア】の団長を務めてい  
る。世間では【勇者】<sup>フレイグ</sup>なんて大層な名前で呼ばれているよ。まあ、気  
軽にフィンと呼んでくれ。そしてこつちが・・・」

そう言ったフィンは自身の隣にいる女性に目を流す。その女性の  
姿を見たベルは息を呑む。

百人いれば全員が綺麗というであろう美しい顔立ち。翡翠の髪に  
ハーフエルフであるエイナよりも長く尖った耳。それは彼女がエル  
フの王族、ハイエルフであることを示していた。

「私はリヴェリア・リヨス・アールヴ。この【ロキ・ファミリア】の副  
団長で二つ名は【九魔姫】<sup>ナイン・ヘル</sup>だ。私もリヴェリアでいい。」

【勇者】に【九魔姫】。もちろんベルも知っていた。オラリオを代表す  
る第一級冒険者。数少ないレベル6。そんな二人を前にしてベルが  
緊張でガチガチになっていると

「まあ、この三人が試験官つちゅーわけや。ほんまはガレスも呼びた  
かってんけどあいつ朝から酒飲んどったな・・・。じゃあはじめよか  
！」

「さて、じゃあひとつ質問をしよう。」

と、フィンが口を開いた。

「[ファミリア]に属する以上、僕らはみんな家族だ、互いに競い合い、助け合い共に成長していく仲間となるだろう。そこまでは大丈夫かな?」

「はい」

「ならその仲間が死にそうな時、命をかけて守りに行けると誓えるかい?自分の命と仲間の命。それを同等のものとして扱い、自分の命を仲間に託し、仲間の命を自分が背負う。そんな覚悟が君にはあるかな?」

それは、重い質問だった。誰しも、自分の命が一番大事である。その命を背負い、託すとなれば普通は少しでもためらうものである。だが、その問いにベルは

「はい、あります」

と、何の迷いもなしに答えたのだった。

流石に即答されるとは思っていなかったのか、フィンはロキへと視線を向ける。ロキはただ頷くだけだったが、それはつまり、ベルの言葉が嘘偽りのない本心であることを示していた。

「・・・なぜ、そんなに迷いがいいのか聞かせてもらえるかい?」

「えつと・・・夢、だからです」

「夢?」

「はい。僕の夢は、『英雄』になることなんです」

「ぶっ・・・」

ロキが堪えきれないといったように笑いを漏らしていた。おかしなことではない、それが普通の反応なのだ。シエリアの反応が特殊だったに過ぎない。わかっている、自分の夢を笑われると顔が下を向く。

「気にしないで、続けて」

はっ、と前を見る。そこには先ほどと変わらず真面目な顔をこちらに向けてるフィンの姿があった。

「えつ・・・、英雄になるのもそんなですけど何よりみんなを護るこ

とができるような、そんな存在になりたいんです。

だからー仲間も護れないようじゃそんな事言ってられないかなって・・・そう思ったからです」

「・・・なるほどね」

「す、すいません！何も出来ないのにこんなこと・・・」

「いや、いい夢だ、大切にするといい」

いつの間にかロキも笑っていなかった。ベルの深紅の目に宿った決意の光、それを感じたロキはその薄い目を開く。

（この子は本気で英雄を目指そうとしとる。さあどうなるか・・・）と、考えていると声がかかった。

「ロキ、どうだい？僕達三人としては問題ないと思ってるんだけど」

さも当然、といった様子でにと笑いながらロキは答える。

「・・・合格！これからベルは【ロキ・ファミリア】の一員や、よろしくな！」

「団長として、僕個人としても君の入団を嬉しく思うよ。【ロキ・ファミリア】へようこそ」

三日間途方暮れながらも探した【ファミリア】、それもオラリオ最強と言われる所に入団を許可されたベルは

「よろしくお願ひします！」

と、顔を輝かせながら言うのであった。

ーこうしてベル・クラネルは【ロキ・ファミリア】の一員となったのである。

「じゃあ、『神の恩恵』刻もか！三人とも、ありがとうなく！」

『神の恩恵』とは、その名の通り神が下界の子に与える「力」。

『神血』を使い、神聖文字と呼ばれる特殊な文字で刻まれる数値は【ステイタス】と呼ばれ、その数値に応じてS～Iまでのランクがつけられる。

その【ステイタス】によってその人の身体能力が向上する、といったものである。

上昇させる方法は二つ。一つ目はダンジョンに潜り、【エクセリア経験値】を得て、己の器を鍛えるもの。

そしてもう一つは器の昇華。つまりはレベルアップである。

試練を乗り越えることで起こる器の昇華、そのレベルがひとつ上がるだけでも大きな成長になる。

そうして嬉々としてロキが指を刺す針を探していると、フィンとリヴェリアが帰った後も、一人残っていたアイズが口を開く。

「・・・ロキ、私は？」

「おっと、忘れつつたわ。すまんベル、先にアイズさんの済ましてもええか？」

「はい！大丈夫です！」

「じゃあ、部屋の外で待つといてな」

「・・・？わかりました」

何故だろうと思いつつもおとなしく部屋の外で待つベル。しばらくすると中から「ええで」と声がかかる。

失礼します、といいながらも入ったその部屋は、酒瓶が少し転がって入るものの、綺麗にされた部屋だった。

・・・後にこの部屋はリヴェリアによって毎日掃除されていると聞かされることになるのだがそれはまだまだ先の話である。

「じゃあ、次はベルの番やな。アイズたん、もうダンジョン行ってええで」

「・・・ベルの、見ててもいい？」

「お？そりゃベルがいいならいいけど・・・どうや？」

ベルとて、神の恩恵について何も勉強しなかった訳では無い。他人二見せるのはご法度。だがベルは仲間になら、そしてそれ以上に想い人アイズになら見せても構わないと思っていた。

「はい、大丈夫です！」

「そうか・・・アイズたん、ぜったい人に言いふらしたらあかんぞ？」

「・・・わかってる」

「よし！じゃあベル、とりあえず上脱いでくれるか？」

「・・・えっ？」

「神の恩恵は背中に刻むから、上腕がないとできへんのや！」  
「わ、わかりました！」

(ううう・・・恥ずかしいよ・・・)

羞恥に顔を赤くしながらも大人しく脱ぐベル。そしてその背中にまたがるロキ。

「か、神様？なんでまたがるんですか？」

「やりやすいからな。言っとくけどどの神もこうやってるで？」

その言葉を聞いて、ロキが女神でよかった、と心の中で安堵するべ  
ルであった。

「一応ロック掛けて見られないようにはするけど、無理やりロック外  
す薬とかあるから気いつけなあかんで！まあ、今回は初めての更新や  
から全部0やねんけどな！」

と、笑いながら言う。その言葉に、気づいていなかったのかはっ、と  
息を漏らすアイズであった。

(アイズさんって、天然なんだ・・・)

そして、それをわかっていながらいじるロキの笑いは、このあとす  
ぐに壊されることになる。

「よし、これで終い・・・や・・・？」

ベル・クラネル

L V . 1

力：I O      耐久：I O

器用：I O

敏捷：I O

魔力：

B 7 8 6

《魔法》

【ホーリー】

・付与魔法

・詠唱式【輝け】クラルテ

《スキル》

【憧憬一途】リアリス・フレイゼ



- ・早熟する
- ・懸想が続く限り効果持続
- ・懸想の丈により効果向上

【ライト・プレス光加護】

- ・戦闘中、魔力のアビリティ上昇

・ | | | | | | | | | |

・ | | | | | | | | | |

・ | | | | | | | | | |

これが、ベル・クラネルの初めての「ステイタス」だった。

## 与えられた力

ロキは今悩んでいた。

原因となっているのは先程自らの眷属になった少年、ベル・クラネルのことだった。

(光加護は光精霊の加護のことやんな・・・やけど)

視線を下げ、もう一度自分が跨っている背中を見る。

ベル・クラネル

LV・1

力：10 耐久：10 器用：10 敏捷：10 魔力：B786

### 《魔法》

#### 【ホーリー】

・付与魔法

・詠唱式【輝け】クラルテ

#### 《スキル》

#### 【憧憬一途】リアリス・フレイゼ

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上

#### 【光加護】ライト・ブレス

・戦闘中、魔力のアビリティ上昇

・—————

・—————

・—————

(明らかに文字が隠れとる・・・未発達のスキル？そんなん聞いたことないで)

説明欄に線が引かれ、読めなくなっているスキルを見て、ロキは頭を悩ませる。そしてチラリ、とベルの首にかかっているロザリオに目を向ける。

(原因はやっぱりアレか・・・ベルの爺さんも厄介なもん残しよって・・・それもそうやけど)

ロキはその上、一つ目のスキル欄を見る。

(リアリス・フレーゼ、間違いなくレアスキルや)

想いが強いほど成長する。

ロキが下界に降りてきてからしばらく経つが、こんなスキルは見たことも聞いたこともなかった。未知のスキルに心躍ると同時に、底知れぬ不安を抱いていた。

(こんなレアスキル持つてるなんて知られたらほかの神にちよつかいかけられるんは目に見えとる・・・ベルは間違いなく嘘つくん下手そうやし・・・神ならともかく、ほかの「ファミア」の子にも隠せなさそうやな・・・このスキルはまだ伝えんようにしよか)

と、「ステイタス」を紙へ写す時に、スキル欄からそれを消したものを伝えることにする。

(まあ、それなくても魔力とかだいぶおかしいことなつてんねんけどな・・・不安や・・・)

天界では神と神をぶつけて戦争を引き起こすなど悪名高いロキであつたが、下界に降り、自分の「ファミア」を持つうちに、眷属を心から愛する慈愛に満ちた神になっていたのである。

「・ベル、初めに言つとくけどベルの「ステイタス」はちよつと、いや、だいぶおかしい。もしかしたら精霊って単語に聞き覚えあるんちやうか?」

前半の言葉に不安そうな表情を浮かべたベルだったが、精霊という単語で昨日の事を思い出す。

何もない場所で出会った銀髪の少女。意識が途切れる直前、自らを精霊と名乗ったシエリアという少女の事を。

「その様子やとやっぱりあるみたいやな。今、そいつから何らかの加護を受けてて、その影響でスキルが発現しとるみたいなんや。わかっているとは思うけど、珍しいことやから人にはバラさんようにしいないな! アイズたんも、わかつたな?」

「わ、わかりました!」

「わかつた」

忠告された後にロキから紙を受け取ったベルは目を見開く。

「・・・魔法」

「ん？どうしてん？」

「僕にも魔法が使えるようになったんですか!？」

目をキラキラさせながらロキに詰め寄るベル。その剣幕に若干気圧されつつもロキは答える。

「お、おう。書き間違えとかちやうから安心せい。なんや、そんなに嬉しいか?」

「はい!とつても!」

間髪入れずにそう言うベルに素直やなあと苦笑を漏らしたロキだった。

「・・・どんな魔法なの?」

「えつと・・・付与魔法って書いてあります。・・・? 神様、この説明の所にある【輝・・・ムグツ!】」

「ベル、それは魔法の詠唱式や。今ウチが止めへんかったら今ここで魔法が発動してたかもしれないねん?」

ロキのその言葉にベルは顔を真っ青にしていた。

「いいか、ベル。ウチもまさか始めつから魔法発現してるなんて思ってたなかったからなんの説明もしてなかったけど魔法の扱いには気をつけなあかん。魔法ってのは力や、どんななかによるけど人だって簡単に殺せてまう。それだけはしつかり覚えとくようにしてな?」

「わ、わかりました!」

「んで、付与魔法ってことはアイズたんと同じ魔法か?」

「えつ、アイズさんも同じ魔法なんですか?」

「うん、私の魔法は風の付与魔法だよ」

(アイズさんと同じ魔法か・・・早く使ってみたいな・・・!)

と、ウキウキしているベルにロキは告げる。

「あ、少なくとも今日は使ったらあかん?」

「えっ・・・どうしてですか?」

「さつきも言ったけど、魔法ってのは力や。それもとびきり強大な。そんな力にデメリットがない訳ないやろ? マインドダウン 精神疲弊なんかは一人になつたら死んでまう・・・って、ここら辺の話はリヴェリアに任せれ

ばいいか。とりあえず今日リヴェリアのどこ行って魔法の知識つけてきー!」

「い、今から行ってきてもいいですか?」

「ダメや、先に団員への挨拶!はあ・・・興奮するんはわかるけどもうちよい落ち着きいな」

早く魔法が使いたいという一心で話をしていたベルは己の礼儀をわきまえない行動に気づき、申し訳なきような顔をしていた。

「その、すいませんでした・・・」

「そんなに急がんでも魔法は逃げへんわ。せや、ギルドにも言いに行かなあかん・・・アイズたん、ベルにここの案内も兼ねて・・・ってダンジョン行きたいよな、ほかの人に頼むか」

「やります」

「・・・へっ?」

「私がベルを案内します」

「い、いやでもアイズたん、ここ結構広いし今いるみんなに挨拶しようと思つたら一日はかかると思うで?」

「大丈夫、やらせて下さい」

そんなアイズの言葉を聞いて一瞬驚いたような顔を浮かべたロキであったが、「じゃあ、よろしく頼むわ」と、確かな主神おやの顔をして言うのであった。

「ーそうしてベルが団員全員に挨拶をし終えた頃にはロキの言う通り、すっかり日も暮れてしまっていた。

「もう遅いからギルドに行くのは明日だね」

「はい!あ、あの。わざわざ付き合ってくれてありがとうございます!ご言いました、アイズさん!」

「ううん、またわからないことがあつたら聞いてね」

「はい!じゃあ、僕神様の所に行つてきます!」

「わかった。またね、ベル」

アイズと別れたベルはロキの部屋へと向かう。挨拶が終わった後

に来るようにと朝言われたためである。そしてロキの部屋の前に立ち、扉を数回ノックする。

「神様、ベル・クラネルです」

「おー！丁度良かった、はいつてきー！」

と、中から声がしたのでそれに従って入ってみるとそこにはリヴェリアの姿があった。

「終わったか？」

「はい！でも今日は遅いのでギルドには明日行くことにします」

「そうか！ならそんな職員にこれ見せるようにしよ」

そう行つて渡されたのはロキのシンボルである道化師のエンブレムが入った金色のメダルであった。

なんだろう、と思いつながらも受け取るとリヴェリアが口を開く。

「そうだ、確かベルの担当はエイナだったか？」

「はい！」

「そうか・・・なら明日、私も一緒に行くことにしよう。その方が都合もいいだろうしな」

「おお！助かるわく、ありがとうな！」

「なに、少し話をしたいと思つていたところだ、問題ない」

「つてことでベル、明日ギルド行く時リヴェリアのとこ寄つていってな〜！」

トントントン拍子に話を進めていく二人に取り残されたベルはの頭の中に浮かんだのは疑問ばかりであった。

「えつと・・・どうしてですか？」

「なんだ、私と一緒にでは嫌か？」

「いやいや！そんなことないです！ただ、お忙しいのにどうしてかと思つて・・・」

「フフ、冗談だ。何故か、と言われるとベルのような新人が自らを【ロキ・ファミアリア】だと偽つて冒険者登録する輩が増えているからだ」  
「やから新しく入つて来た子にはメダル渡すようにしてんねんけど、リヴェリアおるならその心配もなさそうやな！」

その話を聞いてベルはなるほど、と納得する。

「リヴェエリアさん、ありがとうございます！」

「気にするな。とは言っても、私と二人きりではベルも心苦しいだろう、アイズでも誘うとするか」

ボンツとベルの顔が赤く染まる。そして少しニヤニヤしているベルを見て

(リアリス・フレーゼの憧憬はアイズか？わかり易い奴やな・・・)

と、それ以上にニヤニヤしたロキがいた事に気づく者はいなかった。

「では明日の朝、用意ができたら私の部屋へ来てくれ。部屋の場所はわかるか？」

「その前にベル、なんか言いたいことあったんちゃうか？」

「あつ、はい！リヴェエリアさん、僕に魔法のことを教えてもらえませんか？」

「魔法？ダンジョンのことではなくか？」

「ここだけの話やけどな、ベルはもう魔法が発現しとるんや」

その事実にはさすがのリヴェエリアも目を見開く

「何も知らん状態で使わせるんはまずい思てなー、みっちり教えたくて欲しいんや！」

「なるほど・・・承知した。では夕食の後、食堂に残っておいてくれるか？」

「食堂・・・ですか？」

「ウチでは館の中にいる奴はできるだけ同じ時間帯に集まって食べるようにしとるんや。もうそろそろやし、行こか！」

「ベル、私の指導は厳しいぞ？覚悟しておけ」

と、誰もが見惚れるような美しい微笑みを浮かべながらそう言うリヴェエリアにベルは

「はい！お願いしますー！」

と、顔を輝かせて言うのであった。

「さて、まず魔法とは大きく二つに分類することが出来る」

夕食を終え、部屋へ着くとリヴェリアはそう口を開く。

「一つは先天性、もう一つは後天性だ。前者は元から持っている素質であるのに対して後者は魔道書などの魔法具によるものだ」

「へー・・・」

「ベルのものは少し珍しい形だが・・・おそらくは後天的なものの部類に入るだろう。魔法が発現しやすいのはエルフだが、ヒューマンであれば誰しも一つは魔法が使えるようになる。さて、ここまですが基本的な魔法についての説明だが、何が質問はあるか？」

「あの、その魔道書？とかを使えば何個でも魔法を使えるようになるんですか？」

「いや、魔法が発現するのは多くても一人三つまでだ。だが・・・そうだな、レフィーヤは知っているか？」

「あ、はい！なんでかすごく睨まれましたけど・・・」

睨まれた理由が憧れの人が見知らぬ男と歩いていたから、というアイズ大好きっ子エルフの嫉妬によるものだったのだがベルにそれを知る由はなかったが、リヴェリアはなんとなく察したのか眉間をつまみながら「悪い子ではないんだが・・・」と声を漏らしていた。

「まあそのレフィーヤだが「エルフ・リング」という少々特殊な魔法を使う。エルフの魔法であれば仕組みを理解すれば何でも使えるといった強力なものだ。そういった場合に限っては三つ以上の魔法を使うことが出来る。レフィーヤの魔法については他「ファミリア」には言っってはならんぞ？」

「なるほど・・・ありがとうございます！」

「なに、知識を求めるとはいいことだ。では次に、魔法のデメリットについてだ。危険性、と言い換えてもいい」

「精神疲弊・・・ですか？」

「うむ、これは何も知らない冒険者が陥りやすいものなのだが、魔法とて無限に使える訳では無い。普通、魔法とは己の精神力を消費して発動するものなのだが、それが空になることを精神疲弊と言う。激しい眩暈や疲労感に襲われ、この状態になったら全く動けないと考えても



いい。それ故に、一人でダンジョンに潜ってこの状態に陥ればほぼ確実に死ぬ」

そういったリヴェリアの目はどこか遠い所を見ているかのようだった。

「まあ、魔法特化の魔術師でもない限りは魔法無しで戦えるようにしておいた方がいいだろう。つまり、体を鍛えろということだな。さて、魔法に関することはこんなところだが、ダンジョンについても学んでいくか？」

「え、いいんですか？」

そう言ったベルが壁にかかった時計を見ると、既に十一時を回っていた。流石にこんな時間からは悪いのではない心配している

と  
「なに、知識は将来的に自分の力となる。それを求めるといふならいくらでも手を貸そう」

「じゃ、じゃあ・・・お願いします！」

「うむ、ではまず1階層についてだが・・・」

「あちやく・・・始まってもうたか・・・」

丁度その時リヴェリアの部屋の前を通ったロキはそう声を漏らす。「流石にリヴェリアでも手加減くらい・・・いや、ないか。頑張るんや、ベル。無力なウチを許してくれ・・・」

そんなロキの言葉の通り、翌日の朝早く、リヴェリアの部屋からふらふらと出てくるベルが見られたのだった。

## 秘められし才能

「エイナきーっーん!」

ある日の朝、いつものように受付業をしていたエイナは、自分を呼ぶ声にそちらを向くと、四日前に担当になった少年、ベル・クラネルを見つける。

「ベル君?」

入口から全速力で走ってきてゼゼエと肩で息をしているベルに初めは若干困惑していたがすぐ気を取り直して話しかける。

「どうしたの?」

「僕、【ファミリア】に所属できました!」

まだ息も整っていないのにそう言うベルにどこか微笑ましいものを感じながらもおめでどう、と祝福の言葉を告げる。

「それで、どこか【ファミリア】に所属したの?」

「はい、【ロキ・ファミリア】です!」

「・・・えつと、ベル君?もう一回言ってくれるかな?」

「?【ロキ・ファミリア】です!」

エイナは自分の耳を疑った。そしてもしかするとベルが嘘をついているのではないかという結論にたどり着く。

(でも・・・ベル君に限ってそんなことするなんて到底思えないし・・・うーん)

と、頭を悩ませていたからだろうか、入口の方が騒がしくなって、人だかりができているのにエイナは気づけなかった。

「全く・・・そんなに焦っても何も変わらないだろう・・・。久しいな、エイナよ」

「リ、リヴェエリア様!」

人ゴミの中から出てきたのは今まさに話題となっている【ロキ・ファミリア】の副団長であり、エルフならば誰もが知っているリヴェエリア・リヨス・アールヴだった。

「いきなり押しかけて済まないな、と言っても大した用事がある訳では無い。今日はただのベルの付き添いだ」

「付き添い・・・?」

よくよく見ると、リヴェリアだけでなくアイズまでいることに気がついたエイナは、ようやく状況を理解したのか、ベル、アイズ、リヴェリアの顔を順に見た後に

「・・・えええええええ!?!」

と、声を荒げるのであった。

「えっと、じゃあここに必要事項を書いてくれるかな?」

「はい、わかりました!」

そう言つて書き始めるベルを横目にエイナは少し離れたところで先程の非礼を詫びるべくリヴェリアへと向き直る。

「その、いきなり大声を上げたりして申し訳ありません」

「いきなり押しかけたこちらにも非はある、気にするな」

「でも・・・驚きました、【ロキ・ファミリア】は今は団員を募集していなかったのでは?」

「主神<sup>ロキ</sup>自ら連れてきたのだ。なにか光るものがあつたのだろうとは思っていたが・・・まさにそういうことだったという事だ」

【ロキ・ファミリア】の副団長でありオラリオ屈指の実力者であるリヴェリアがそう言つてるのを聞いて驚いたような、少し寂しそうな顔を浮かべたエイナだったが真面目な顔になったかと思うと

「その・・・私が言うことではないのかもしれないのですが、ベル君の事、どうかよろしく願います」

と、そんなエイナの様子に苦笑を浮かべながらリヴェリアは、

「お前の心配性も相変わらさずだな・・・家族になつたからにはしっかりと面倒を見ていくつもりさ、安心しろ」

「エイナさん、書けました!」

「書けたみたいです。では・・・失礼します、リヴェリア様」

「ああ、母親によろしくと伝えておいてくれ。また今度食事でも、とも言つておいてくれるか?」

「わかりました、しつかりと伝えておきます」

「エーイーナーさん！」

「はい！今行くー！」

こうして、ベル・クラネルは【ロキ・ファミリア】所属、L V. 1 冒険者となったのであった……

「……そういえばベルは戦い方、知ってる？」

ギルドからの帰り道、アイズがそうベルに言う。

もちろん今まで田舎で育ち農業ばかりしてきたベルに戦闘経験など皆無であり、何らかの武術の心得があるわけでも無かった。

「いえ……全く知りません……」と、気落ちするように言うベル。

(こんな有様で『英雄』だなんて……ダメだな、僕は)

そんなベルにアイズは提案する

「じゃあ、私が教えてあげようか？」とーー

場所は移り、黄昏の館の中庭。

昼下がりにさしかかろうとするくらいの時刻に、ベルとアイズの姿があった。

「ベルの武器は、ナイフでよかった？」

「は、はいー！」

「……体術とかは使うの？」

「い、いえ……その、ナイフの方も全くの初心者で……」

その言葉にしばし考えるそぶりを見せるアイズ。やっぱり自分なんかじゃ、とベルが思ったところでアイズが再び口を開く。

「じゃあ、闘おう」

「えっ？」

突拍子もない言葉にベルが腑抜けた声を上げるがそれに構わず自らの腰に刺さった剣を引き抜くアイズ。それを見たベルが慌ててナイフを引き抜き、バックステップで距離を取る。アイズはその引き抜いた剣を壁に立てかけ、鞘を構えながら言う

「それでいいよ」

「・・・？」

「ベルが今感じたみたいに、これから闘う中でいろいろなことを感じて。そうすれば闘い方は嫌でも身につくから。・・・じゃあ、行くよ」

その言葉が開始の合図であったかのように、その構えた鞘を上段から振り抜くアイズ。慌ててナイフで防ごうとするベルだが、ベルとアイズの差なのか、軽く吹き飛ばされてしまう。なんとか踏みとどまったベルがナイフを逆手に構え、それで反撃に出ようと水平に薙ぐがその斬撃は空を切り、目に入ったのは再び振り下ろされる鞘。

(まともに受けたらさつきみたいに吹き飛ばされる・・・だったら！)

身体を右へずらしアイズの振り下ろしを避けることに成功する。よし！と内心でガッツポーズをとりながら反撃に移ろうとするが、次の瞬間には右側から迫る蹴りによって吹き飛ばされていた。

「あっ」

遠のく意識の中でベルは、アイズの焦ったような声を聞いた気がした。

「うつ・・・」

「・・・ごめんね」

「アイズ・・・さん？」

上からかかった声にベルが目を開けると、目の前にアイズの顔があった。

「うわああああ!? すいません！ 僕、気絶して・・・」

「私こそ・・・少し力を入れすぎたかも」

「いやいや！ アイズさんは悪くなくて！ 悪いのは避けきれなかった僕

で！あの、その」

そんなベルの様子がおかしかったのか少し笑みを浮かべたアイスだったが、すぐに真面目な顔になってベルに告げる。

「ベルには、戦闘のセンスがあると思う」

「えっ？」

そう言われて先程の戦闘のことを思い返すベル。

空振りして、蹴られて、気絶した。散々たる結果である。想い人にボコボコにされていることに軽く鬱になっているベルだったがアイズは続ける。

「二回目の振り下ろし。私は普通に当てるつもりで振ったけどベルの姿がぶれて当てられなかった。それはすごい事だと思う」

実際、二人のレベル差では打ち合うことはおろか、剣閃を見ることがさえかなわないと言っても過言ではないだろう。無論アイズとて本気で振るったわけでは無かった。それでも力を抑えることがはつきり言って下手くそなアイズの斬撃はLV・4冒険者並の力で振るわれていた。続けようか、と言われ剣を交わしながら話す。

「ベルの回避技術はすごいと思う。でも、今のベルには他の技とか駆け引きとかそういうものが足りない、だから」

レベル差をもろともせず、次々とアイズの斬撃を躲していたベルだったが、回し蹴りを放ったアイズがその勢いそのまま鞘を振り下ろすと

「いだっー」

「・・・こうやってすぐに捉えられる」

振り下ろした鞘はそのままベルの頭に落ちるのだった。

頭を押さえながら唸るベルにアイズはただ一言、これから何度もいうことになる言葉を告げる。

「立てるか？」とーーー

その後みつちりと日が暮れるまで特訓を続け、終わる頃にはベルは

ボロボロになっていた。

ロキの部屋に向かっている途中、一方的にボコボコにされているだけに見えるアイズとの特訓を見ていた団員たちに頑張れ、と応援されたのだが、ベルにとってアイズとの特訓は得られるものが多く、苦とは思っていなかったため、わけがわからないと言った顔をしていた。

ロキの部屋にたどり着き、部屋に入る許可をもらったベルが中に入るとすごいものを見た、と言った感じの目を向けてくるロキだった。「べ、ベル？それどうしたん？」

「ちよつと鍛錬を・・・あはは・・・」

「ちよつと・・・？ま、まあええわ。昨日そのままリヴェリアのところ行ってもうたからな、ベルの部屋案内しよ思ってたな！」

「あ、ありがとうございます！」

「じゃあ・・・つてその前に、ステイタス更新しとくか？すごい経験してきたみたいやし・・・」

「えっ、いいんですか？」

「おう、むしろ言われるんちゃうかと思ってたで！」

「えつと、じゃあ・・・お願いします！」

「・・・」 「んで、それ誰にやられたんや？」

ベルの背に跨りながらロキはベルに問いかける。

流石にないとは思っているがほか「ファミリア」と問題を起こしていたとなると無視出来なくなってしまうからだだった。

「えつと・・・アイズさんに中庭で稽古つけてもらってました！」

「アイズたくん・・・」

もうちよい手加減くらいしたってえな、と内心で思いながらステイタス更新を終えたロキの動きがピタリと止まる。

そこに記されていたのはまたしても予想の上に行くものであった――

ベル・クラネル

LV. 1

力：I 0 ↓E 4 8 9

耐久：I 0 ↓D 5 3 2

器用：I 0 ↓D 5 1 1

敏捷：I 0 ↓C 6 8 9

魔力：B 7 8 6 ↓A 8 1 4

### 《魔法》

【ホーリー】

・付与魔法

・詠唱式【輝け】

### 《スキル》

リアリス・フレージ

【情景一途】

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上

ライト・プレス

【光加護】

・戦闘中、魔力のアビリティ上昇

・ | | | | | | | | | |

・ | | | | | | | | | |

・ | | | | | | | | | |

「ぶっ!？」

「うわっ!か、神様?」

「す、すまんすまん・・・え、え、えつと、ベル?アイズたんとどんな鍛錬してたんや?」



「えっと、普通に相手をしてもらっただけですけど・・・」

嘘は言っていないベルに驚愕しながらもこの結果について考えを巡らす。

(トータル上昇値2200オーバー・・・!?そんなだけでこんなに上がるか・・・?いや、これがリアリス・フレイゼの効果か・・・とんでもないな)

もちろんスキルの効果で補正がかかっていることに間違いはないのだが、ベルが普通と言い切った鍛錬の中で何度も吹っ飛ばされ、ゆうに十を超える回数気絶をしていたということをロキはまだ知らなかった。

「ベル、良かったな!今ベルは成長期みたいなんや。普通はこんなに伸びへんねんで?」

苦しいか、とおもいながらとつきに出た嘘だったがそんな嘘にもベルは目を輝かせて

「へえ・・・!じゃあ今のうちに頑張っておきます!あ、明日ダンジョンに行つてきます!」

「おう了解や!指導係は・・・アイズたんか?」

「はい!・・・あ、神様。ダンジョンの中なら魔法使ってもいいですか?」

「そうやな・・・どんな魔法かもはつきりさせとかなあかんし、どんなもんか試してき!アイズたんと一緒になら学べることも多いと思うしな」

「ありがとうございます!」

「よし、じゃあベルの部屋やねんけどな・・・っと、ここや、憶えたか?」

館内の地図を見せながらそう言うロキに少し不安を感じさせる態度で頷くベル。そんなベルに苦笑しながらもロキは

「まあ、わからなかったら誰かに聞いたらええわ。まだ聞いときたいこととかあるか?」

「いえ、大丈夫です!ありがとうございます、神様!」

「明日は気をつけるんやで〜!」

「はーいー」

そう言つて駆け出すベルの背中が見えなくなつたところでロキはハツと何かに気付いき、手元の羊毛紙に目を落とす。

「・・・なんで魔法使つてないのに魔力上がつてるんや?」

そんなロキの問いに答える者は誰もいなかったー

ー

翌日、バベルの前にベルとアイズは来ていた。しかし、これまでのような服装ではなくベルは「ファミリア」の倉庫から自由に使つていと言われた装備の中から軽めのレザーアーマーと一振りのショートソード。そしてアイシャから貰つたナイフという装備で。対してアイズはベルと同じく軽装の戦闘服に加えて腰から下げるのは彼女の愛剣である・デスペレートスベリオルズ。オラリオでも珍しい不壊属性デユランダを有する特殊武装であつた。

「近くで見ると大きいですね・・・」

ベルが目の前にそびえ立つ白亜の塔を見上げながらそう言葉を漏らす。

「うん、私もはじめて見た時はすごく驚いたよ」

周りを流れる冒険者の中を二人が歩いていると、周りの視線が自分たちに向けられていることに気付く。よく耳をすませばチラホラと聞こえてくるのは

「おい、【剣姫】が男と歩いてるぜ」「出来てるのか?」「ないだろ、あんなひよろつちい野郎。俺様の方がはるかにカッコいいぜー」「じゃあアタックしてこいよ」「まだ死にたくねえ」

(アイズさんって、有名なんだな・・・それに比べて・・・)

ギリツ、とベルが歯噛みしていると、いきなり悪寒が体中を駆け巡る。

「ッ!?!」

誰かに見られているような、そんな感覚。急に周りを見回し始めたベルを不審に思ったのかアイズが「どうしたの？」と声をかけてくるが、その頃にはその不快な視線も消え去っていた。

(気のせい・・・だったのかな?)

そう結論づけたベルはアイズに何でもありません、と伝えてダンジョンへと足を進めるのだった。

### ー第一階層 『始まりの道』

ゴブリン、コボルトなどの弱いモンスターしか生み出されない最上層とも呼ばれる階層に二人の姿はあった。

「じゃあ、まずあれと闘ってみようか」

そう言ってアイズが指で指した先にいたのは群れからはぐれたのか一匹だけにいるゴブリンだった。

こちらを視認したからか鳴き声を上げながら突撃してくるが対するベルは冷静だった。

(アイズさんに比べたらこんなの・・・!)

軽く身を躲し返す一撃でゴブリンを屠る。グエエツ!?と不快な断末魔を上げながら灰になるゴブリンを尻目に、ベルは自身の変化に驚いていた。

(体が・・・軽い? さっきのゴブリンの動きもちゃんと見えてた。これが、『恩恵』・・・)

そんなことを考えているとアイズから声がかかる。

「おめでどう、どうだった?」

「あ、はい! 思ってたよりもうまくいきました! アイズさんのおかげです、ありがとうございます!」

「・・・役に立てたなら良かった。・・・前、また来たよ」

そんなアイズの言葉のとおり、前に再び現れたのは五匹のゴブリンだった。次は気づかれる前に、と自ら群れの中に突撃するベル。そのおかげか、二匹のゴブリンを早々に仕留めることに成功する。

「ギヤツ!」

仲間の死に苛立ったような声を上げながら囲んで攻撃を仕掛ける残りの三匹にベルは少し対処できなかったのかナイフで受け止める。交互に繰り出される攻撃をナイフで流したり回避したりしながらも確実に反撃を加え、残りの三匹を倒すのにそう時間はかからなかった。

「余裕だね」

「は、はい！まだなんとか・・・」

「・・・じゃあ魔法、使ってみる？」

「・・・！はい！」

「あんまり魔力を使いすぎるとすぐに倒れちゃうから気を付けてね」

「わかりました！じゃ、じゃあ・・・【輝け<sup>クラルテ</sup>】」

そして、ベルの初めての魔法が発動する。

「ホーリー」

瞬間、ベルの体に光が宿る。

(・・・暖かい。それに・・・懐かしい?)

そんなベルの光を見たアイズはそんな感想を抱く。

「あ・・・」

目の前に再びモンスターが現れる。ゴブリンとコボルトが入り混じった群れ。その数はおよそ二十。気づいたアイズはその数に驚きながらもこれは少し厳しいと判断したのか

「・・・少し多いかも、私が倒してくるね」

と、ベルに告げる。しかし

「大丈夫です」

「え・・・？」

何が、と言うよりも早く目の前を光が通り過ぎる。

それは、英雄になりたいと願った少年に与えられた初めての『力』皆を護りたいと願い、その願いを聞き入れた精霊との『絆』

通り過ぎたその光の先、モンスターの群れの方角に向けたアイズの目に写ったのは

斬撃の軌道に残る仄かな残光、灰になっていくモンスター。

そしてその中央でナイフを振り抜いた体勢で立っているベルの姿

だ  
っ  
た  
ー  
ー  
ー

## 想いの先

「ホーリー」

そう唱えた瞬間、体の内から力が溢れる。見れば、それに伴って身体の周りに白い光が渦巻いていた。確かめるかのように少し腕を振ってみれば、その動きの後に残像のように光が追いかけてくる。

(これが、僕の魔法・・・)

念願の魔法を初めて使ったのにも関わらずベルの心はどこか落ちて着いていた。

使ったのはいいもののどうしようかと思ひ振り返ると、そこには難しい顔をしながらダンジョンの奥の方を見ているアイズがいた。

その視線をたどってみるとそこにいたのはゴブリンやコボルトが入り混じった二十四程度の群れだった。ベルのようにダンジョンに入って数時間の新人にとつて絶望的な数字と言えるだろう。

そう思ったのか愛剣を引き抜きながらアイズが口を開く。

「・・・少し多かったかも。私が倒してくるね」

そんなアイズにただ一言「大丈夫です」と告げ、ナイフを引き抜いて走り出す。見えない力に後押しされ、凄まじい速度で群れの中へ突っ込み次々と敵を切り捨てる。

剣技などではなく、ただがむしやらに見えたものを切るだけ。それでもほんの数秒で敵を全滅させたベルは魔法を解き、ナイフを腰へとしまし。今までなら考えられない動きを軽々とこなした自分の身体に困惑していると後ろから声をかけられる。

「・・・すごいね。私の魔法よりも強力だよ」

「あ、ありがとうございます！えへへ・・・ひっ!？」

褒められたことにベルが頬を緩めていると顔のすぐ横をアイズの剣が通り過ぎる。放たれたその強烈な突きは仕留め損ねたのか残っていた最後の一匹の息の根を止めることとなった。

「す、すいません・・・ありがとうございます！」

「ダンジョンでは何が起こるか分からない、絶対に油断したらダメだよ」

今、アイズが助けに来てくれなければ命を落とすまでとは行かずとも確実に大きなダメージを喰らっていただろう事に気づいたのかベルは自身の中に生まれていた僅かな慢心を諫める。

「でも・・・ベルの強さならもう少し下の階層に行っても大丈夫そうだね、降りてみようか」

「・・・！お願いします！」

そうして二人は次の階層へ降りるために足を進めるのだった。

そしてしばらく時間がたち、二人が今いるのは七階層。

五階層からモンスターの湧く速度が早くなり、ウォーシャドウ、キラアントなどの厄介なモンスターが出現するようになった。しかし特に苦戦することもなく、アイズからの助言はあったがそれ以外は基本的にベル一人の力で進んできた2人だったが、七階層の最奥である八階層へと続く階段の前へ来たところでふとアイズが足を止める。「ここから先はこれまでよりも強いモンスターが出てくるから、気を付けてね」

「確か・・・ゴブリンやコボルトが強くなるんですけどっけ？」

リヴェリアとの一対一のダンジョン講座のお陰で十七階層までは地形、出てくるモンスター、抜け道などを完璧とは言わないまでも覚えさせられたベルはそうアイズに訊ねると、少し驚いたような顔で「どうして知ってるの？」

と聞いてくる。

それに対してリヴェリアに教えてもらったという事を話すとアイズは慈しむように無言でベルの頭を撫でるのだった。

そして八階層に足を踏み入れ、今までのモンスターと同じ姿でも強さが違う、という事態に分かつていても困惑したのか前後左右、時には上下からも襲い来るモンスターに対し、だんだんベルの対処が間に合わなくなってくる。しかしそこはすかさずアイズがフォローに入り、多少のダメージは受けつつも順調に迫り来るモンスター達を倒していったのであった。

そんな八階層の中盤に差し掛かったあたりでアイズがふと口を開く。

「そうだ、明日から二日間少し用事があるから一緒に来れないの。ごめんね・・・」

「そんな！謝らないでください！」

本当に申し訳なきように頭を下げるアイズにギョツとして顔を上げさせる。

その後聞いた話によると、もうすぐ十七階層のフロアボス、ゴライアスのインターヴアルの時期らしく、何人かの団員が討伐に派遣されたということらしかった。

二日間というのは泊まりがけで行うのではなく、「ゴブニユ・ファミリア」に武器の調整に行くのだそうだ。

そんな話を聞いてベルが思ったのは

(良かった・・・恋人とかじゃなかったんだ・・・。そういえばアイズさん、恋人いるのかな？・・・帰ったら神様に聞いてみよう)

・・・本人が目の前にいるのにも関わらず、他人に聞くというヘタレ発想を頭の中で展開しているベルだったが、そんな事を知るよしもなくアイズは話を続ける。

「ベルの実力ならある程度はソロでも大丈夫だと思うから・・・私からロキにそう言っておくね。じゃあ、そろそろ帰ろっか」

そうして、ベルの記念すべきダンジョンへの初挑戦は八階層という、アイズがいたとはいえ異例の到達度で終わりを迎えるのだった。

「神様！戻りました！」

「おーお帰りー！どうやった？」

ギルドへの報告を済ませ黄昏の館に帰ってきた二人はひとまずロキの所へと足を運んだ。相変わらず酒瓶は転がっているものの綺麗にされた部屋に足を踏み入れるとロキにそう聞かれる。

「アイズさんがいてくれたお陰で順調にいきました！」

「そうかそうか！ありがとうなーアイズたん」

「・・・いえ」



「そういや、今日はいくらくらい稼げたんや?」

ベルの横に並ぶように立っているアイズの肩がビクツと跳ね上がった気がした。

「・・・?何をですか?」

「何って、お金以外ないやろ。魔石換金してきたやろ?」

「魔石・・・?」

「・・・」

「・・・アイズたん?」

「・・・ごめん、忘れてた。これ、換金してきたやつ・・・」

冒険者はどうやって生計を立てているのか。それは主にモンスターへの核とも言える魔石を回収してそれをギルドで換金する、というものだ。他にもギルドのクエストや、ドロップアイテムを売るといった方法もあるのだが魔石を回収した方が効率がいいと言えるだろう。だがしかし、ベルの魔法に圧倒されていたせいもあってか、アイズがそのことを伝えるのを忘れてしまったのである。

しかし、長い冒険者生活の賜物とも言えるのか、目に入った魔石はしっかりとアイズが回収しており、魔石を喰らうことで変異を起こし周りよりも強くなる個体、強化種が生まれるという危険はなくなっていた。

「25000ヴァリス・・・!?これ、僕がもらって良いんですか?」

「自分で稼いだお金やねんから自分ももらつとき!まあ・・・明日からはちゃんと自分で回収してくるんやで?」

「はい!わかりました!」

その後、他愛のない会話をしていたのだが、ベルがすつとロキへ近づきアイズに聞こえないくらいの声量で話しかける。

「・・・あの、神様。少し聞きたいことがあるんですけど」

「ん?どうしてん?」

「その・・・アイズさんって・・・こ、恋人とかがついたりするんですか?」

そう聞いた瞬間、ロキの目がキラッと光ったように見えたのはベルの勘違いではないだろう。

「ほう・・・なんでそんなこと聞くんや？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながらベルへ詰め寄っていくロキに対して顔を真っ赤にしながらも

「え、えっと・・・気になるから、です」

今ベルを見れば誰がどう見てもアイズに恋心を抱いているのは丸わかりなのだが頑なに明言をさけるベルを面白いなあと思いつつも事実を告げる。

「アイズさんはな・・・強くなることにしか興味ないみたいなんや」

「え・・・？」

それは、ロキにもどうにもできなかった問題であった。

「ベルが入って来てからは笑ったりすることも増えたみたいやけど、ちよつと前までは放つといたら一週間ダンジョンに潜りっぱなしの時とかもあつたんやで？」

ロキの言う通り、これまでアイズはすべてを投げ捨てて強さを追い求めてきた。無感情とも取れるほどの執念。いくら「ファミリア」のメンバーが止めようとも無茶し、時には大怪我をして帰ってくることもあつた。

その姿勢はさながら『鬼』

彼女の二つ名である【剣姫】

そんな美しい名を誰かがこう呼んだ。

【剣鬼】 アイズ・ヴァレンシユタイン、と

それがどうだろうか、ベル・クラネルという少年が入ってきた途端に以前は見せなかつた笑みも時たまにはあるが浮かべるようになりダンジョンに行くことよりもベルの面倒を優先したりと、ロキを含め、リヴェリアなどを大いに驚かせたのだった。

「まあ、今はアイズさんに恋人作る気なんてないんかもしれへんけど・・・」

だからこそロキは、自分の子供たちのためにこう言うのだった。

「ベルが強くなったら、振り向いてくれるかもしれないで？」

ボフンツ、とつベルの顔がさらに真っ赤になる。やっと気づかれていることに気づいたのか顔をうつむかせたまま「はい・・・」とつぶ

やいていた。すると

「・・・何の話をしてるの？」

と、本人が登場したことにより純粋なベルは耐えられなくなったのか口をぱくぱくと開閉した後に

「ぼ、僕！疲れたのでお先に失礼しますー！」

と言って部屋から飛び出してしまふのだった。

アイズと違ってなんでそんな行動をとったのかがわかるロキはお腹を抱えて大爆笑していた。

「・・・ベル、どうしたの？」

「さあな？ほんで、アイズたんから見てもベルはどうやった？」

「ベルは・・・強かったよ、ウオーシヤドウとかも普通に倒せてたから」

「ウオーシヤドウ？どこまで潜ったんや？」

五階層以降からしか出てこないそのモンスターの名前を聞いた途端にロキは真面目な表情になってアイズを問い詰める。

「八階層」

「はあ・・・アイズたん？ベルの面倒見てくれてんのは嬉しいねんけど始めのうちからあんま楽しせたらあかん。それはベルのためにもならないで？」

新人のうちから上位冒険者を頼りすぎていると自分が育たなくなる。どんな世界でもそれは定理だ。自分で動かずに甘い蜜を吸っているだけではいざ自分が、となった時に対処できない。特に、冒険者業は一つの失敗がそのまま死に直結する。故に、初めから手を借りて自分の適性を超えた所で無茶をしてはいけない。

（まあ確かにベルの「ステイタス」なら行けんこともないやろうけど・・・。それでも冒険者になって二日目や、立ち回りとかも分かってないやろ）

そんなことを踏まえてのロキの言葉だったのだが、アイズは首を横にフルフルと振ると、

「私が倒したのは三匹だけ、あとは全部ベルが倒した」

「・・・マジで？」

「マジです」

信じられないような内容だが、下界の子の嘘がわかる神であるが故にその言葉が本当であるとわかってしまう。それに、とアイズは続ける

「ベルの魔法、私の「エアリアル」よりも強力だと思う」

一階層で見せたベルの魔法について見たことをそのまま話す。見とれていた、その綺麗な光に。初めてダンジョンに潜ったばかりの少年が二十匹もいた群れを一瞬で屠ったその圧倒的な力を。あの少年を追っていけば、いつか自分の望む力が見れるのではないか。そんな気がアイズはしていた。

その話を聞いたロキはひどく驚いたような顔をしていたがすぐに悪い顔になったかと思うと

「これは見せてもらわなあかんあ．．．むふふ．．．」

そんなロキを見たアイズは失敗したことに気付き、

（ごめんね、ベル．．．）

と、心の中で謝るのだった。

## 模擬戦

(どうしてこんなことに・・・!?)

黄昏の館の中庭にて、ベルは多くの視線にさらされていた。

好奇であったり哀れみであったり、その視線の持つ意味は様々だったが【ロキ・ファミリア】に所属しているほぼすべての団員が自分を見ている。そんな状況にベルはかなり焦っていた。

より正確に言うならば、ベルと、ベルの正面で訓練用の木槍を構えたフィンにであったが。

「双方、準備はええか？じゃあベル対フィンの模擬戦、開始や！」

(・・・本当に、どうしてこうなった!?)

そうして時は今日の朝へと遡る・・・

ロキの部屋から逃げ出した翌日、ベルは一人でダンジョンへと赴いていた。

前日と違う点といえば、腰のポーチに入った数本の回復剤ポーションとマジックポーションマジックポーションの精神回復剤だった。一人で潜るなら必須とアイズに有無を言わずポーチの中へと突っ込まれ、少しいたたまれない気持ちになりつつもまだ今度違う形で返そうとベルは思っていた。

そんなベルが今いるのは十階層。作りは八く九階層と変わらないが明かりは朝霧を連想させるような仄かな光しかあらず、霧も発生しているため見通しはあまりいいとは言えない。

しかし、昨日の経験のおかげなのか特に苦戦することもなかった。時には魔法も使いながら順調にモンスター達を倒し、目の前に広がる

のは十一階層へと続く階段。

いざ、と前に踏み出そうとするベルだったが、今朝ホームを出る時にロキに今日は少し早めに帰って来て欲しい、と言われていたの思ひ出す。

体感的にもだいぶ時間が経っていると思ったベルは進むのをやめ、踵を返す。

すると、振り返ったベルの目の前でビキビキツと壁が割れる。

割れ目はどんどん広がっていき中から出てきたのは三Mをも超える身長、茶色い肌に豚のような頭をした大型のモンスターであるオークだった。

(壁からモンスター・・・!?しかも、オークか！)

その数、なんと八匹。

幸か不幸か、今までそんな異様な光景に出会ったことがなかったベルは息を呑む。

十階層から出現するオーク。

ベルが今いるのも十階層であり、もちろんこれまでも遭遇する事はあった。それでも今、目の前で起こった異様な光景がベルの反応を遅らせていた。

そうして生まれ落ちた豚たちは、本能とでも言うのか目の前で固まっている冒険者へと攻撃を始める。

「オオオオオ・・・！」

「くっ!？」

体格差より生まれるリーチの差に加え、多勢による攻撃にベルはたじろぐ。

圧倒的に経験が足りていなかった。一体一ならば苦戦することもなかったであろう相手にこんな手こずるのは立ち回りがわかっていないからだろう。

連携を取るように周りをぐるりと取り囲むオーク達に、チラリと死の文字が頭をよぎる。

(冗談じゃない、こんなところで死んでたまるか・・・！)

仕掛けてきた一匹の攻撃をきつと躲し、胸の部分を一突き。

ガキンツと何が硬いものに当たったかと思うと倒れ、そのまま起きあがってくることはなく、その身を灰に変えていった。

(今のは・・・魔石?)

偶然にも現状の打開策を発見したベルは同じように他のオークを屠り、上へ上へと足を進めていくのであった――

しばらくしてベルが地上にたどり着く頃にはもう昼も回り、夕方にさしかかろうという時間帯だった。

「あいよ、32000ヴアリスだ」

「・・・!?あ、ありがとうございます!」

換金所で渡された金額にギョツとしながらもベルは自分の稼ぎに非常に満足していた。

「これだけあれば新しい武器とかも買えるかな?あ、そうだ!アイズさんにプレゼントとか・・・」

『アイズさん!これ、いつもお世話になっているお礼にプレゼントです!』

『・・・!ありがとうベル、嬉しい。・・・お礼にキスしてあげるね』  
勿論、アイズはそんなことは言わない。

そんな果てしない想像を膨らませているベルだったが思わぬ乱入者により現実へと引き戻される。

「あの・・・これ、落としましたよ!」

「えへへ・・・え?」

そんな声に振り向いてみればそこには薄鈍色の髪の少女がいた。

その少女の手に握られていたのは小さな魔石。

「あれ?全部換金したと思ったんだけどな・・・すみません、ありがとうございます!」

渡された魔石を腰から下げられた魔石用のポーチに入れてみると続けて声をかけられる。

「冒険者の方ですよね?今からダンジョンへ?」

「いえ、今日は用事があったので今帰ってきたところなんです」

そう言った所でベルのお腹がグルルと音を立てる。あはは・・・と乾いた声を出していると少女が目の前の店へと入っていった。

戻ってきた少女がベルに渡したのは可愛らしい布に包まれたお弁当だった。

「手作りなんです、よければ召し上がってください！」

「いやいや、悪いですよ！それにこれ、あなたのお昼ご飯じゃ・・・」

「お恥ずかしい話ですが、先ほど店の賄いをいただいたばかりで・・・このまま捨ててしまおうかと思っていたんです。だからお気になさらないでください」

「で、でも・・・」

「なら代わりと言っては何ですが、今夜の夕食は是非当店で！ダメ・・・ですか？」

上目遣いにそう言われてしまえばベルも断れず、首を縦に振るのだった。

そんな出会いがあった帰り道、もらったお弁当を食べながらしばらく歩いたベルはホームへとたどり着く。

(なんか・・・騒がしい？何があったのかな。あ、神様だ)

「神様！何かあったんですか？」

「お！帰ったか！今日はどうやった？」

「はい！いっぱいお金も稼げましたし、魔法の練習もできました！」

「そうかそうか！じゃあ、今からその魔法見せてくれへんか？」

「大丈夫ですけど・・・どこですか？」

「それはな・・・グフフ・・・」

「？」

そして話は冒頭へと戻る――

「ルールは、そうやな・・・あくまでベルの魔法見るためやから、それを考慮して自分で判断してくれ、フィン。ベルは全力でフィンを倒し



に行つてオーケーや！」

「わかつたよ」

「え?え?」

未だにうろたえるベルに歩み寄る影がひとつ。

「ベル、ここでええとこ見せたらアイズたんも振り向いてくれるかもしれんで? そうやな・・・フィンに一撃入れたらアイズたんの一日デート権を・・・」

「・・・!」

ベルにだけ聞こえる声でそう言ったロキは返事を待たずに観客席へと戻つていく。

「双方、準備はええか?じゃあベル対フィンの模擬戦開始や!」

その言葉を皮切りに、フィンが槍を構えて一気にベルへと突つ込んできくる。

Lv. 6の肩書きにふさわしいその突進は、今まさに詠唱を行おうとしていたベルの不意をつくこととなる。とつさに詠唱を中断してナイフで受けるベルだったが大きく後ろへと吹き飛ばされてしまう。

(ツ!なんて威力なんだ・・・!)

手加減されているとわかっていてもその力の差にベルは齒噛みする。

「輝・・・ツ!」

再び詠唱を行おうとするとそれを妨げるかのように突きや薙ぎ払いなど多彩な槍の嵐撃がベルを襲う。

(詠唱してる暇がない!?とりあえず避けないと!)

一旦詠唱を諦め、全力でフィンの攻撃の対処を始める。

変幻自在に振るわれる槍の攻撃を回避し、時には避けきれずにナイフで防ぐ。

その度に後ろへと吹き飛ばされる、そんな交錯が何度か続いた後に、ピタリと攻撃が止んだ。

少しバツの悪そうな、意地悪が成功したような顔でフィンはベルへと言葉をかける。

「悪いね、こんな大人気ない真似をして。今よくわかつたと思うけど

魔法の詠唱中はどうしても無防備になる。そこを突かれればどんなに強力な魔法でも意味はないんだ」

その言葉の通り、実際魔法を全く発動できなかったベルは身をもつて教えられていた。

【輝け<sup>クラルテ</sup>】

そして、攻撃が止んだ今こそチャンスだということもちゃんと理解していた。

【ホーリー！】

白銀の光をまとい、自分から攻めに行くベル。

持ち前の回避技術とステイタスの中でも魔力に継いで最も秀でた敏捷を生かしてフィンへと攻めいる。それに加えてベルの周りに渦巻く光が後押しするかのように力を加える。

(フィンさんは槍・・・なら近づけば動きにくいはず！)

爆発的な加速でフィンの懐へと潜り込み、怒濤のラッシュを叩き込む。

その攻め方はダンジョンに入るうちに少しずつ身についてきた戦闘スタイル。

高速機動からの手数を重視した攻め方、それはベルの読み通り槍を使うフィンにとって間合いを詰めるのは最も効率的な戦法ではあった。が

(なんで当たらない!?)

そんなベルの攻撃はすべて、その槍によって防がれていた。

ただ防がれるだけではなく受け流され、ペースを崩されたり、カウンターを食らったりと逆に攻撃を受けてしまう。

疲れがたまったりと逆に胸当てへの鋭い突きが刺さり、たまらずベルは距離を取る。

「はあ・・・はあ・・・っ！」

荒いだ息を整えるように肩で息をする。

(やっぱり、強い・・・いや、勝てるだなんて思ってなかった。けど・・・)

チラリと周りを見てみれば、幹部が集まっているあたりにこちらを

心配そうに見ているアイズが。想い人が見ているのだ、男ならば考える事は一つ

(かっこつけたい!!!)

・・・白銀の少女がどこかで苦笑しながらため息をついた気がした。前を見れば親指を舐めるフィンがいる。が、それが何を指しているのかわからないベルにとっては些細な問題でしかない。

魔力を集める。自分に今撃てる最大の一撃を打つために。ナイフを前へ向け、腰だめに構え全力で地を蹴る。

その突撃はフィンとの間にあった距離を一気に詰めて槍へと吸い込まれていき---

バキツ、と大きな音を鳴らした。

ベルの狙い通り、木槍は半ば途中で折られてフィンが無手となる状況を作り出すことに成功する。

ほう・・・と声を漏らすフィンに追い打ちをかけるべく立ち上がった所でガクツと膝が落ちる。

(あ・・・れ・・・?)

急に襲ってきた疲労感に抗うこともできぬまま、ベルは意識を失った---

「やりすぎじゃない?まだぜんぜん大人気ないよ!」

闘いの半ばを周りで見ているうちの一人、L.V. 5冒険者である【<sup>アマゾン</sup>大切断】ティオナ・ヒュリテはそう声を漏らす。

新人に対する対応ではない。それは誰の目から見ても明らかだった。

その言葉を受けたティオネの双子の姉である【<sup>ヨルムンガンド</sup>怒蛇】ティオネ・ヒュリテは妹に同調するように頷き

「そうね、団長のことだから何か理由があると思うけど・・・魔法を見るだけならわざわざ反撃する必要も無いはずよね」

「だよねー？フィン、あの子のこと嫌いなのかな？」

そんな姉妹の容姿はそっくりであつたがただ一つ、天と地ほどの違いが存在した。

「ンなわけねえだろうが、テメエの頭はその胸みたいに貧相なのか？」

「む、胸は関係ないでしょ!?このツンデレ狼！」

「んだとゴラア！」

同じくLv. 5冒険者である【凶<sup>ヴァナルガンド</sup>狼】ベート・ローガ。彼が今言つた通り二人の違いとは胸の大きさのことであり、ベルが以前二人の見分けがつかないと団員に聞いたところこんな答えが返ってきた。

「姉がEで妹がAだ」と。

無論、本人に聞かれれば死を見ることになる。

「でも、本当にどうしたのかしら・・・アイズはなにかわかる？」

「わからない。けど、あれ」

【ロキ・ファミリア】の中でも高Lv帯、フィンと一緒にダンジョンに入ったことのある団員が集まっているあたりから小さなよめきが起ころのとはぼ同時にアイズが指さしたその先では親指をペロリと舐めているフィンの姿が。

それに疑問の声を上げる間もなくフィンの反対でナイフを構えているベルの周りに渦巻く光が収束し、まばゆく光る。

輝きが最高潮に達したかと思うと凄まじい速度で飛び出し、突きを放つ。

その突きは見事にフィンの槍を破壊することに成功していた。

「あの子、本当にLv. 1!?今の速さ絶対にLv. 3・・・いや、Lv. 4くらいは出てたわよ？」

そう言ったティオネの視線の先でベルがナイフを構え直したかと思ふと急に膝から崩れ落ちていくのが見えた。

「あれ?どうしたのか「ベル!」な・・・って、え?アイズ?」

倒れた途端にそう声を上げて飛び出していったアイズにまたもや驚かされる団員たちだったがベルの所にたどり着いたアイズがベルになんとも自然に膝枕をしたことでさらにざわめく。

色めき立つ者、嫉妬の目を向ける者。いろんな団員がいたがその中

でただ一人・・・人ではなかったが騒がしく走り寄る神がいた。

「アイズたああああああん！だからそーゆーのはウチにグエツ！」

「やかましい、少し落ち着け」

女性が出してはいけない類の声を上げるロキの首根っこを掴みながらベルの元へと歩み寄るリヴェリア。

アイズの膝の上で心なしか嬉しそうに寝ているベルを見て、

「精神疲弊マインドダウンだな。納得のいかない者もいるかと思うが、これで模擬戦を終了とさせてもらう。ではこれにて解散してくれ」

副団長のその言葉にぞろぞろと自分の持ち場へと戻っていく団員たち。そんな中でアイズに頭を撫でられているベルを見て一人の狼人は不満げに

「チツ・・・気に入らねえ」

と、悪態をつきながら他の団員と同じように部屋へと戻って行くのだった。

ローベルの意識が覚めたのはそれから数時間後。日も傾き、夕日  
が中庭に差し込んでいた。

頭の後ろの心地よい感触に再び眠気が襲ってくるのに抗いながら  
ゆっくりと目を開け、息を飲んだ。

夕日を反射し、綺麗に輝く金髪。髪と同じ色の瞳は閉じられ、小さな  
な寝息を立てていた。

その姿はさながら妖精のようで、ベルの心を再び奪っていった。  
腕を上げ、顔にかかっている髪を横へとそらして頬に触れる。

風に揺られ、サラサラと流れる髪は金色の川のように夕方というこ  
とも相まってかさらに映えて写った。

「・・・綺麗だな」

ボソツとつぶやいたベルの言葉は風に乗ってどこかへと飛んでい  
く。

「……んっ」

「!？」

頬を撫でるベルの手に意識が戻ったのかそう小さく声を漏らすアイズに若干まだ夢の中に居たベルはサツ、バツと頬から手をどけ、膝から飛び上がってダラダラと冷や汗を流す。

(何してるんだ僕!?!ど、どうしよう……)

幸いと言えるのかはわからないが、完全に眠り込んでいたアイズはベルの行動、言葉に気付いた様子もなく一つ大きくあくびをした後に「……お疲れ様、ベル」

その言葉に自らが倒れる前に模擬戦をしていたことをはつきりと思いつく。

「模擬戦は、僕が倒れちゃったんですね……」

「精神疲弊だって。フィンが相手だもん、仕方ないよ」

それでも、もう少しで手が届いたのだ。

何より目の前の少女にいいところを見せることができなかつたことが何よりも悔しかった。だが

「それに……闘ってるベル、かつこよかったよ？」

微笑みながらそういうアイズにベルは、その言葉だけで頑張ったかいたがあつたなと思うのであつた。

## 恐怖

「あの子、すごかったねー!」

「ええ、なかなか楽しめる試合だったわね」

ティオネとティオナは部屋へと戻りながら先程の模擬戦についての感想を漏らす。

「まだここに来て三日しかたってないんでしよう? 目を見張る才能ね・・・」

「えっ! そうなの?」

「昨日挨拶回りに来たじゃない。その時にアイズが言ってたのよ」

「へえーすごいなあ。あ、ロキだ! すごいね、あの子! って、どうしたの? そんな難しい顔して」

そう言ったティオナの視線の先ではアイズに膝枕をされているベルを見ながら顔をこわばらせているロキの姿が。

「ん? ああ、何でもないで!」

「どうせ膝枕して欲しいって思ってるだけでしょ?」

「あはは! じゃあお先く!」

呆れたように笑いながら二人がどこかに行った後も何かを考えるように腕を組んでいるロキは誰にも聞こえない程度の声でボソリ、と呟いた。

「あの光・・・いや、まさかな」

そしてベルはというと、アイズの膝の上で目覚めた後に、自室に戻って泥のように眠った。

数時間眠ったくらいでは疲れが取れなかったのか、夕食も取らずにすぐ、だ。

そしてその翌日の朝早く、アイズを含め二十人程の団員がゴライア

ス討伐のために門前に集まっており、驚いたことにそこにはほとんどの幹部が揃っていた。

フィン、リヴェリア、ガレスを筆頭に、アイズ、ティオナ、ティオネ、ベートというなんとも豪華な顔ぶれであった。

今回の討伐対象であるゴライアスの推定Lvは4。それに対する【ロキ・ファミリア】が派遣する端から見れば過剰とも言える戦力にはちゃんとした理由があった。

「んー……。一言で言うなら舐められないため、かな？」

「舐められない……。ですか？」

「うん。知ってのとおり、【ロキ・ファミリア】は最大派閥とも呼ばれるほどに有名だ。そんな【ファミリア】が大したことないなんて思われてしまうといういろいろ不都合があるんだ。僕等自身にとっても、この街にとってもね」

「へえ〜……」

フィンにそう説明されながらも一度メンバーを見回すベル。

「まあ、要するに見世物だよ。ゴライアス自体僕らにとつてそれほど脅威ではないしね。そんなに時間もかからないだろうから、少し深くまで潜るつもりさ」

「……すごいなあ」

階層主を脅威にはならないと言い切るフィンに、自分の入った【ファミリア】がいかに強大であるかを思い知らされる。

思わずポツリとそう漏らしたベルにフィンは笑いかける。

「ベルもLv. 3にもなれば少しずつ参加できるようになるよ。大変だろうけどベルならすぐに来れると思うから、頑張って」

ポン、とすれ違いざまに肩を叩きながらフィンにそう言われたベルは、メンバーの元へと戻っていくその背中に向けて

「はいー」

と大きな声で返事をするのだった。

「さて皆、準備はいいかい？ 標的はゴライアスだけど、くれぐれも油断はしないように。じゃあ、行こうか！」



そう言ったフィンの号令と共に出発していく討伐団だったが、その中からアイズがベルの元へと歩み寄る。

「私は行くけど、ダンジョンに潜る時は気をつけてね。・・・回復剤忘れたりとかしちやダメだよ」

「はい！その・・・」

「？」

言い淀むベルを見て不思議に思ったのか小首をかしげるアイズにベルはこう言い放つ。

「お、お気をつけて！」

ゴライアスがアイズたちにとってあまり脅威ではないことは分かっている。

それでも、心配なのである。たとえそれが身の丈に合わない心配だったとしても。

Lv. 1とLv. 5、一緒について行っても守られるのは自分の方だ。そんな当たり前とも言える情けなさを抱きながらもベルは激励の意を込めてこう言うしか無いのだった。

そんなベルの言葉を受けたアイズは少し驚いたような顔を浮かべたかと思うと

「・・・ありがとう、いってきます」

と、可憐な笑みを浮かべてそう言った後に小走りでメンバーの元へと戻っていく。

そうして残されたベルは一人、その笑みに見惚れて顔を真っ赤にしているのだった。



「さて・・・と、僕も行かないとな」

メンバーが出発してしばらくたったあと、ベルは自身の用意を済ませてダンジョンに向かうべく門へと歩いていった。するとちようど外に出ようとしたときに後ろから声がかかる。

「ベールー！」

「ん？」

その声の主はロキであり、手を振りながらこちらへ近づいてきているのが見えた。

「ダンジョン行く前に更新しといてええか？昨日も一昨日もできてなかったことやしな！」

「あ、はい！お願いします！」

「じゃあ、ちよつとウチの部屋まで来てくれるか？そんなに時間は取らんからなー！」

・・・そうして訪れたロキの自室はリヴェリアがいなくなったのはつい先程のことなのに心なしか既に汚くなっているような気がした。

「そういえば、神様」

ロキに背中にもたがられている状態でベルはロキに尋ねる。

「ん？どうした？」

「レベルアップってどうやったら出来るんですか？」

「レベルアップか・・・んゝそうやな、一言で説明するのは難しいんやけど、偉業を成し遂げること、やな」

「偉業・・・ですか？」

「まあ、内容は人によっていろいろやけどな。そいつにとって何か大きいことを乗り越えたりしたときに冒険者つちゅーのはレベルアップするんや」

「なるほど・・・」

「まあ、ベルにはまだ早い話やと思うで？世の中にはレベルアップせんと生涯を終えるやつだっておるくらいやし、まあ焦らんとやってき！それに、世界最速記録持ちはアイズたんやけど、それでも一年はかかってるからな。まあそれでもとんでもなく早いんやけど・・・つと、できたで、おつかれさん！」

羊毛紙にベルの「ステイタス」を写し終えたロキがベルの背中から降り、それをベルに手渡す。

「ありがとうございます！じゃあ、行ってきますね！」

「忘れもんとかないか？」

「大丈夫ですー！」

そう言っただけ飛び出て行くベルを呆れたように見送った後、残された羊毛紙を眺めながらため息をつくロキの姿があつた事は誰も知らない。



「よいしょ……つと」

「ガアアア……」

その日の夕方、第八階層にて周りのモンスター達を一掃したベルはドロップした魔石を回収するべく手を伸ばす。そこでふと、今朝から何かを忘れていると思っていたものの正体に気づく。

「魔石……魔石？あ……つ……シルさん……」

昨日の夜、すぐ眠ってしまったために守れなかった約束を思い出したベル。しんどかった、と言えばそれまでだがそれはこちらの都合であり、向こうからしてみれば約束をほっぽかされたと捉えられてもおかしくはないだろう。

しかし、そんな懸念も今となってはもう手遅れだった。

「……今日帰りに寄って謝ろう」

憂鬱になりながらも足を進めようとして……やめる。

「……？こんなに静かだったっけ、第八階層」

辺りを支配する不気味すぎるほどの静寂。

それに疑問を抱きつつもベルは一度止めた足を再び前進させる。少し歩いて曲がり角を曲がろうとしたところで全身が総毛立った。本能に従うままに頭を下げる。

ブンツ、と暴力的に風を薙ぐ音が頭上から聞こえた。

続いて何かが破壊される音。パラパラと砕かれた石が髪にかかる。

恐る恐る顔を上げた時、初めに目に入ったのは筋肉の『壁』

「ヴウオオオオ・・・」

人型の身体に牛のような角を備えたモンスター。

「ミノタウロス・・・!?」

見れば、先程までベルの頭があった所の壁は粉々に砕かれていた。もう少し気づくのが遅れていたら潰れていたのは・・・とベルは青ざめる。

「ヴウオオオオオ!!!」

「うわああああ!」

再び頭上から振り下ろされる拳を危うくも避け、逃走を開始する。

(なんでこんなところにミノタウロスが!?)

後ろから聞こえてくる足音に寿命が縮むような思いをしながらもベルは走り続ける。

本来、ミノタウロスが出現するのは十三階層以下の所謂中層域と呼ばれるエリア。それも十五階層からのはずである。ベルが今いる八階層にはどれだけ厳しく見積もったとしてもとてもではないが出現するはずはない。

が、追いかけてられている事は事実なのだ、それがどんなに異常事態であっても自身に最大級の脅威が迫っていることには違いはない。

ミノタウロスの推定Lvは2。それもLv. 2のモンスターの頂点に座するとも言われている。

敵うはずがない。そう思ったベルは必死に逃げ続ける。

「はあっ・・・はあっ・・・!」

曲がり角を駆使し、ひたすらに視界から逃れるように上へ上へと進んでいこうとするが、そうやって一心不乱に逃げているうちに、ベルは致命的なミスに気がついてしまった。

(やばい・・・たしかこの先って・・・!)

次の曲がり角を曲がった時に、自身ののリヴェリアに叩き込まれた知識、記憶が正しく、また詰んでしまったことを悟る。

曲がった先、正面は行き止まりになっていてもうどこにも逃げられなかった。振り向けば迫る豪拳をすんでのところで回避するが、それまでだ。壁に背をついてへたりこんでしまう。

「ひっ……！」

情けなく声を上げるベルを殺そうと、ミノタウロスが腕を上げたのを見てとつさに目を瞑る……が、予想した衝撃はいつになっても来ない。

「ヴモオ!? ヴアアオオオオオ……」

そんな断末魔とともにびちゃ、と鉄臭くて生暖かい液体が身体にかかり、代わりに聞こえてきたのは誰よりも好きな声。しかし、今に限って言えば一番聞きたくない声だった。

「ベル！ 大丈夫……？」

「アイズ……さん……」

目の前で二つに裂けた胴体のあいだから覗いたのはなびく金髪。

愛剣・デスペレート・を腰に携え、遠征の帰りであろう事が少し汚れた装備から伺えた。

「怪我はない？」

「……はい、大丈夫です。ありがとうございます」

差し出された手を掴みながら起き上がり、本当に小さな。目の前にいるアイズですら聞こえない程度の歯ぎしりをする。

(やっぱり僕は、『守られる』側なのか)

こんな姿、見られなくなかった。

仕方ないと言えばそれまでだろう。もともと、敵うはずのない相手なのだから。むしろ、命を救われた事に感謝するべきだ。

だけど、そうだとでも……情けなかった。

「……すみません、僕、先に帰ってます。本当にありがとうございますましたっ」

後ろからなにか声をかけられたような気がしたが、ベルは逃げるようにそこから立ち去った。

## 豊穰の女主人

「はあ・・・なにやってるんだろ、僕」

逃げ出した日の夜、シルが働いていた店へと足を進めているベルはそう声を漏らした。

あそこで逃げたのは流石に非常識すぎる。少し前の自分を殴りたくなつた。

(気にしてても仕方ない・・・か。とりあえずいっぱい食べて元気だそう！お金には困ってないしね)

そう思いながらたどり着いた店は、豊穰の女主人というらしい。昼とは比べ物にならないくらいに客で賑わっており、冒険者たちの笑い声が響いていた。

そんな店の様子にあっけにと取られて立ち尽くしていると、聞いたことのある声が聞こえてきた。

「ベルさん！来てくださつたんですね！」

その声の聞こえてきた方を見ると、二日前に会った鉛色の髪の少女がいた。

「シルさん、すいません！昨日は少し忙しくなつてしまつて・・・」

「お気になさらないください！さあ、どうぞ中へ！」

「あ、シルさん！お弁当ありがとうございます！」

中へと足を進めようとしたシルに「昨日に貰つた弁当の箱を渡す。

勿論、中は綺麗に洗つてある。」

「いいいえ、喜んでいただけただけのなら幸いです！では、ここでちよつと待っていて下さいね」

案内されたカウンター席で座っていると、カウンターの中にいた恰幅の良い女性がシルと少し話した後はこちらへと向かつてきた。

「あんたがシルの言つてた冒険者かい？アタシはミア、この店の主人だよ！何でもえらい大食漢らしいじゃないか、どんどん食べておくれ！注文は何にするんだい？」

「へっ!」

告げられた身に覚えのない情報にハツとしてシルの方を見ると、頭

の後に手を当て、てへつと言わんばかりに小さく舌を出していた。  
やられたな、と苦笑しながらメニユーを見ればそこには様々な料理  
が並んでいた。

どちらかという山の方に住んでいるベルにとってあまり馴染み  
のない魚介類であったり、見たこともないようなものも多く、どれに  
しようかな?と悩んでいるとシルが横から

「悩んでらっしゃるのなら今日のオススメはいかがですか?少し割高  
ですが、味は保証しますよ!」

そうメニユーを指さして言うシルの言う通り、850ヴァリスと他  
のものに比べて少し高めではあったが、そのアドバイスに従ってそれ  
を注文することにする。

「あいよ!飲み物はどうする?酒にするかい?」

にやりと笑いながらそう言われてベルは再び悩む。

オラリオには特に飲酒に年齢の制限がある訳では無いが、今までベ  
ルは酒に手をつけた事はない。

(何事も挑戦・・・かな?)

そう結論付けたベル半ばややくそ気味に答える。

「お願いします!その、初めて飲むのであんまり強くないやつを・・・」

「あいよ!ちよつと待ってな」

厨房へと戻っていくミアから目を外して周りを見渡せば、様々な装  
備に身を包んだ冒険者たちが種族を問わずに入り交じって騒いでい  
る。

(ファミアアの食堂も落ち着いた感じでいいけど・・・こっちの方が楽  
しいな)

また来よう、と思っているとドンツ!と目の前に大皿とジョッキが  
置かれた。

お酒はともかくその料理は・・・非常に多かった。

「おお・・・」

「お待ち!蜂蜜酒に今日のおすすめの魚介パスタだよ!たらふく食っ  
ていっておくれ!」

そのあまりのポリュームに圧倒されながらもベルはまず酒に手を

つける。

カツと喉を通る熱さに、ほのかな甘さが鼻についた。

続けて手をつけたパスタもまた美味で、ベルはしばらく無言になって料理を貪り続けた。

「どうです、楽しまれていますか?」

エプロンを外しながら隣の席に座ったシルが訪ねてくる。

「ええ、とつても。料理もですけど、この店の雰囲気というか、騒がしさというか……」

「まあ……奇遇ですね!私もなんです!知らない人とお話しするのが趣味というか……心が疼くというか……」

「あはは……結構すごい事言うんですね」

流石にそこまで大それた感想を言うつもりは無いが、心のどこかでベルは同意していた。

その後も、しばらく談笑していると再び店のドアが開かれた。

「ご予約のお客様、ご来店にや!」

(お酒って美味しいんだな……)

「……!おい見ろ!」

「ん?おお、えれえ上玉だな……」

「バカ、ちげえよ!エンブレムを見ろ!」

「……げつ、【ロキ・ファミリア】かよ」

ゴンツ!

「べ、ベルさん?どうかしましたか?」

「……いえ、気にしないでください……」

チビチビと酒を飲んでいたベルが急に机に顔面をぶつける勢いで机に突っ伏したことに戸惑いの声を上げるシルだったが、入ってくる【ロキ・ファミリア】のメンバーを見て、ああ、と納得したかのように頷いた。

「うちのお得意さんなんです。なんでも主神のロキ様がいたくここを気に入られたみたいで」

「な、なるほど……」

おでこの傷と引き換えにどうにか顔を見られずに済んだベルは



ほっとして食事を再開する。

「よっしゃあ、ダンジョン遠征ご苦労さん！今日は宴や！飲めえ!!」  
そう言って食事を始めるロキたちを見て周りの客たちも止まっていた食事を再開していく。

その中に先程逃げ出してしまったアイズも混ざっているのを見て、謝罪をしにいくべきか悩むベルだったが、やめた。

今行っても雰囲気壊すだけだし、なにより・・・気まずかった。見られていないことを確認して少し残っていた食事を再開すると、狼人の青年、ベートが口を開いた。

「なあ、アイズ！そろそろあの話みんなに聞かせてやれよ！」

「あの話・・・？」

アイズの名前が出てきたことに反応してしまい、軽く聞き耳を立てようとしていると隣のシルから話しかけられる。

「そう言えば、ベルさんはどこの『ファミリア』に所属しているのですか？」

「へっ？あ、ああ・・・実は僕も「あれだつて、俺らが帰る途中で逃がしたミノタウロス!」・・・っ！」

「ミノタウロスつて、十七階層で襲いかかってきたら集団で逃げていったやつ？」

「それぞれ！奇跡みたいに上に上がっていつてよお、俺達が必死で追いかけてたやつ！最後の一匹、お前が八階層で始末したろ？」

八階層、ミノタウロス、聞き覚えのある単語ばかりだ。それを決定づけるかのように最後のピースが放たれた。

「そこにいたんだよ、こないだ入ってきたヒョロくせえガキが！」

——間違いない、僕だ。そう気づくのにそう時間はかからなかった。あの中にいる人にも誰のことかは見当がつくだろう。

震える拳に力が入る。爪が指に食い込むほどに。

そんなベルの様子に横で困惑させられっぱなしのシルすらも目に入っていないかった。

「ひいひい言いながら壁にへばりついっちゃってよ、情ねえつたらありやしねえ！フィンに期待されてようがあんな腰抜けじや話になら

ねえな！」

「いい加減にしろ、ベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ。巻き込んだベルを笑い、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

「おーおー流石エルフ様、誇り高いこった。けどな、そんな救えねえやつを擁護してどうする？雑魚を雑魚と言って何が悪い」

雑魚、それが今の僕の評価。

解つてはいても、いざ言われると心が壊れそうになる。

「アイズはどう思うよ？あんな情けねえ野郎。あれが俺達と同じ冒険者だつて言うんだぜ」

「……」

「あんなのが仲間なんて認めたくねえよなあ？雑魚にかまつてる時間があるなら自分を鍛えたいだろ、目付け役なんて嫌々やることは無いんだぜ？」

その言葉が、一番胸に刺さった。

「……シルさん、すいません。今日はもう帰りますね。あと、お願いしたいことがあるんですけど」

「だからあのガキと俺、ツガイにするならどっちがいいって聞いてんだ、ああん!？」

「ベート……君、酔ってるね？」

苦笑しながら言うフィンに、目線で五月蠅いと言いながらベートはアイズに答えを促すような素振りを見せる。

やれやれと思いつつ同じようにアイズを見ると、

「……私はベルの方が好き、です」

そう答えたアイズに酒場内が騒然とする。

「ロキ・ファミリア」のメンバーもまた、その言葉にギョツとしていた。

「おつ、アイズたん大胆やなく！」

「ベート……ぶっ……」

「おい、今笑ったやつ出てこい！」

「それでアイズ、あの子のどんなどころが良いの？」

ティオネがアイズにぶつけた質問に、周りの人達は少なからず耳を傾けていた。

先程その発言を引き出したベートも、その獣耳をぴくりと震わせて制裁を与えていた手を止めていた。

注目を浴びたアイズは戸惑うような素振りを見せた後にこう答えた

「・・・えつと、なんか可愛いから・・・？」

あつ、これ違うやつや・・・とそこにいた全員の意見が一致したのは、言うまでもなかった。

ある者はつまらなさそうに食事へと戻り、またある者は安堵の息を漏らしていた。

「ぐあああああつ！放しやがれ！くそ！」

「お前はお前で酔いすぎだ、馬鹿者」

「あつはつは！狼の丸焼き一丁ってか？」

先程暴れ回っていた仕置きとでも言うのか、料理の上に縄で縛られているベートを見ながら笑い転げているロキだったが、おずおすと後ろから声をかけられた。

「ロキ様、少しよろしいですか？」

「ああ？お、シルたんか！どうした？」

「これをロキ様に渡して欲しい、とお願いされました・・・」

そう言っただけで差し出されたのは四つ折りにされた一枚の手紙だった。

何や？と思いつつその紙を開いたロキは途端に苦虫を潰したような表情になる。

「シルたん、これっていつ渡されたん？」

「つい先程ですが・・・」

「そうか・・・ありがとうな！」

「いえいえ！では、失礼します」

そうしてシルが去っていった後もロキの渋面は崩れることは無かった。

そんなロキを見たリヴェリアが「どうかしたか？」とロキに近づいていくと、ロキは無言で手元の紙をリヴェリアへと渡した。

疑問に思いながらも受け取ったリヴェリアも同じように表情を暗いものへと変えた。

『少しダンジョンに潜ってきます。明日には帰ると思います。』

ベル・クラネル』



「はああつー」

「……許せない。」

アイズに憧れを抱いていながら、差を知りながら、それをどこかで仕方ないと受け入れていた自分が！

強くなるには、自ら手を伸ばすしかないというのに……

笑われ、侮辱され、あまつさえ擁護された自分が嫌になる！

どれほど時間が経っただろうか、着ていたアーマーはボロボロに、持ってきていたポーションも使い切ってしまった。

揺らぐ銀光をその身に宿しながらひたすらに進んでいたベルだったが、あたりのモンスターを一掃したところまでついに限界を迎える。

ガクリと膝が落ち、目の前が暗くなっていく。

続いて襲ってきたのは激しい倦怠感。

(やばい……これって……)

つい昨日なったばかりの感覚だ、忘れるはずもない。

二度目となるその感覚に、必死に抗おうとする。

(精神……疲……弊……)

だが、そんな抵抗を嘲笑うかのように体から力は抜け、第九階層の小さなルームにて、ベルは意識を失った。



そうしてうつ伏せに倒れた白髪の少年。

それを待つていたと言わんばかりに壁は裂け、モンスターが産み落とされる。

「グルルルル・・・」

ソロで潜ることにおいて最も危険なこと。守ってくれる人がいない故に自分が動けなくなれば待つているのは死。

これまでもこうして多くの冒険者たちが命を落としてきた。

増長し、独りで潜った者。

仲間とはぐれ、あるいは見捨てられた者。

そして・・・少年のように自棄になって進んでいった者。

例外などない、それは当然の結果である。

口元を歪め、じわりじわりと少年へと足を進めるモンスター達。

その爪が、牙が、少年の首元へ触れそうになった時――少女の聲が響いた

「ホーリー」

詠唱式こそないものの、それは少年と同じ魔法。

鈴を転がすような綺麗な声で紡がれた言葉に反応し、魔力が膨らんでいく。

その詠唱と共に眩い光がそのルーム内を照らし尽くしていく。  
何もかもを、照らす――

——その光が晴れた時、ルームには二つの人影と、床に落ちた魔石しか残されていなかった。

少年に背を向けるように立っていた少女は振り返ると、長い銀髪を揺らしながら少年へと近づいて腰を下ろすと、窘めるかのように両手で頬をペチツと叩いた後に、慈しむように頭を撫でるのだった。

こうして残された二つの影。

独りでは決して救われなかった命。

偶然か、それとも必然か。運命の歯車は噛み合いながら、そのルームには再び、静寂が訪れた——

## 魔喰いの呪剣

「……ル……べ……」

微睡む意識の中、誰かの声が聞こえた気がした。

抑揚のない平坦な声音、それでも人間味の残る綺麗で澄んだものだ。

「……ル……ベルー」

「ん……」

その声自分が自分を呼んでいると気付き、ゆつくりと目を開けていく。

そこにはそろそろ見慣れてきた自室の天井……ではなく、ゴツゴツと角張った岩の表面が見えた。

そしてかすかに鼻についた鉄の匂いにここがダンジョン内であるということベルに思い出させるには十分すぎるほどだった。

「無事でよかった……」

ずつと聞こえてきた声が自分のすぐ上からしたのでその方向を向いてみれば、鮮やかな金色の髪が見えた。

「アイズ、さん。それにリヴェリアさんも……」

ベルの側でしゃがみこんでいるアイズ。そしてその横に立っているリヴェリアの存在を確認したベルはよろよろとしながらも身体を起こし、アイズに気遣われながら立ち上がった身体は次の瞬間、乾いた音とともに強く吹き飛ばされていた。

元々身体になにかあったという訳では無かったために深刻なダメージに発展するようなことは無かったが、それでもその一撃はかなり重たかったと言えるだろう。

「……何故こんなことをした、とは聞かない。私もあの手紙は見させてもらった。ある程度は納得もするし、否定はしない。だがな」

振り抜かれた右手に戸惑うアイズを放っておきながらリヴェリアは続ける。

その美しい顔に怒りを宿し、幾人もの団員を恐怖に突き落としたその表情にベルもまた、ガクガクと足が震えていた。

「命を無駄にするな。今回はモンスターが湧かなかったおかげなのか

助かっているがそんな幸運が続くとは限らない。・・・お前はもう私たちの家族なんだ、あまり心配はかけないでくれ」

しかし、はじめこそ怒りを含んでいたその口調も次第に落ち着いたものとなり、最後には諭すような声音へと変わっていた。鬼と言われ恐れられている表情も消え、純粋な安心感と慈愛に満ちるそれは美貌と相まってダンジョンの中でさえ映えていた。

「はい、すみませんでした・・・」

そんなリヴェリアの態度にまさかこんなにも思われていたとは、とベル自身驚かされていた。

しかし、この思いこそが仲間を、家族を思うものなのだと気付いた。

これこそが「ロキ・ファミア」が最大派閥と呼ばれる所以の一つなのかな、と感じたベルであった。

「さて、説教はこれくらいにしてとりあえず地上に戻るとしようか」

「わかった。・・・立てそう？背負ってあげよっか？」

「い、いえ、大丈夫です！」

そうして、ビンタの衝撃でフラフラしながらもなんとか立ち上がり、恐ろしい提案をしてくるアイズの後に続いて上へ上へと足を進めるのだった。

※ ※ ※ ※ ※

「失礼します、神様」

「おお、帰ったか。んで、なんか言うことは？」

部屋に入るなり、ロキがそう問いてきた。

いつものようなヘラヘラとした調子は鳴りを潜め、その細い目に鋭い眼光を宿しながら話すロキには、神として当たり前ではあるのだが貫禄があった。

「その・・・危ない真似してすみませんでした！」

「はあ・・・あのな、ベル。冒険者っちゅーのはほんまに簡単に逝く。無茶するのも自分の人生やからウチは何も言わん、けど・・・もうベルは一人やない。まだ入って日は浅くても、ベルが死んだら悲しい奴



らだっている。残された人の気持ちも考えるようにせなあかんで」  
そう言い切った後にロキの張り詰めたような雰囲気は霧散し、いつものような人懐っこい笑みを浮かべていた。

「まあ、リヴェリアにも言われたやろうしこれくらいにしとこか！でも、そうやな・・・罰として三日間、ダンジョンに行く時はアイズたんをお目付け役として連れていくこと！アイズたんが用事あるつて時はまあ、仕方ないとして・・・あ、ベルには御褒美やったか？」  
カツカツカツ、と声を上げながらそうベルにそうベルに言うロキだったが対するベルは眉を顰めるほか無かった。

でも・・・と口ごもり何かを避けるような素振りを見せるベル。その原因となる出来事をロキはすぐ思い出すことが出来た。

「ベル、大丈夫や。アイズたんは嫌々目付け役なんてやるような子じゃない。なにより自分からやりますって言ってきたからな！ベートの言っただことは十割嘘やから気にしたらあかんで！・・・あいつも不器用すぎるんや」

その間にもステイタスの更新を終わらせたロキは羊毛紙をベルに手渡すとボロボロになったアーマーを見てふむ・・・と少し考えを巡らせた後に

「ベル、今どれ位お金持ってる？」

「へっ？えつと、74000ヴァリスくらいです！」

「ならな、今日一日休んで装備買ってきたらどうや？」

と、ベルにとって初となる装備更新を提案するのだった。

※ ※ ※ ※ ※

「【ヘファイストス・ファミリア】!?でも僕そんな大金持っていないですよ！」

「・・・心配しなくても大丈夫、着けばわかるよ」

「で、でも・・・」

昼下がり、多くの人々が行き交うオラリオの中心街に二人で並んで歩くベルとアイズの姿があった。どちらも普段着で、これからダン

ジョンに行く訳では無いということが会話からも察せられる。

ロキの提案に従って館を出発した二人。

しばらく進んだ後にベルがどこに行っているのかを訪ね返ってきた答えが「ヘファイストス・ファミリア」だった、という状況である。

ー「ヘファイストス・ファミリア」、鍛冶の神ヘファイストスが治め、鍛冶を中心としたファミリアでありそのどれもが一級品。

時にその価格は何億ヴァリスにもなると言われている。

二人がたどり着いたのはバベルの中にある「ヘファイストス・ファミリア」のブースだった。

「ゼロが1、2、3・・・7・・・？」

そこに並ぶいかにも一級品といった武器や防具に掲げられた値札を見てギョツとする。

煌びやかなその商品を見てベルが思ったことはただ一つ。

(これ、絶対来るところ間違えてる・・・)

そんなベルの様子を見て取れたのか、横にいたアイズが申し訳なきような顔を向けてくる。

「・・・私が出してあげようとしたんだけど、それはダメだって。・・・だから、行くのはこの上」

またもや恐ろしいことを言うアイズに顔を青くしながら連れられ、魔石の力で浮いた昇降版に驚かさねながら上の階へと上がる。

上がった先は少し暗く、それでも少なくとも人が装備を眺めていた。

下の階のようなきらびやかさはないが、少し粗雑に置かれていてもそれがなまぐらのようには思えなかった。見れば、何人も店主と思われる人がいていかに自分の作品が優れているかを客に説明している。近くにあったものをひとつ持ってみればそこには武器の銘、作者の名前、ヘファイストスのロゴ。だが

「あれ？安い・・・」

その後ろには7000ヴァリスと手頃な価格が記されていた。ますます訳がわからなくなっているベルを見かねてアイズが説明

を入れる。

「ここは「ヘファイストス・ファミリア」のお店、なんだけど、まだ実力を認められてない人たちが自分のものをアピールするところなの。一級品はないけど・・・掘り出し物もあるし、充分使えると思う」

見えていいよ、と言われ店の中を歩き回る。

木箱に入れられたレザーアーマーや立てかけられた斧。

鉄や木の匂いが充満したフロアの中を奥へ奥へと進んでいく。置かれていた色々な武器を眺めながら歩き続け、その先で見つけたのは一つの木箱だった。

「ん・・・、どうやって開けるのかな・・・？あ、こうか」

ガチャリ、と音を立てて止められていた金具が外れ、中に収められていたのは一振りの剣だった。鞘には幾何学的な文様が刻まれていて、その長さはアイズの・デスペレート・よりも少し長い程度。

主だった特徴があったわけではなかったが、ひどくそれが目についた。値札を探してみたものの、どこにもついていなかった。

「あの、これっていくらなんですか？何も書かれてなくて・・・」

「ん？・・・これは僕が作ったやつじゃないね、ちよつと待っててもらえるかな？」

丁度近くにいた青年。つまりは「ヘファイストス・ファミリア」の団員なのだが、に尋ねてみるとそう言うって下の階へと降りて行った。その間手持ち無沙汰になったベルは興味本位で鞘から少し剣を引き抜いてみると中から覗いたのは濁ったような灰色の剣身。

その剣身の一番根元に近い部分には、剣の銘と思われる文字が刻まれている。

「共通語じゃ、ない？読めないな・・・」

人間種ではない種族の文字なのかな、とうんうん唸っているベルは焦りを隠さずに近づいてきている足音に近くに来るまで気付かなかった。

「大丈夫か!？」

「・・・へっ?」

「精神力は？意識はしっかりしてるか!？」

「え、あの、」

そう勢いよく詰め寄ってきたのは灰色の髪を持った壮年の男性だった。

祖父くらいの年齢であるように見えるのにも関わらずその身体は隆々とした筋肉に包まれており、ベルよりもすごいその身体で迫られる言葉を失っていた。

何より急にそんなに心配されても何も危ないことはやっていない、と困惑する一方である。

そんなベルの様子を見て男性は驚愕し、恐る恐ると言った風体で声をかけてきた。

「坊主・・・その剣持ってもなんともないのか？」

「え？はい、特になんともないですけど・・・」

「そうか・・・ふむ」

考え込んだ男性は少しして、口を開いた

——曰く、この剣は数年前に遠方から来た商人によって運びこまれたものらしい。

その商人によるとこの剣は握った者の魔力を奪い、精神疲弊直前の状態へと追い込む。幸いと言うべきか直接接触しないことには被害はないため、なんとかかして木箱に入れて保管してきたものだそうだ。

オラリオに持ち込まれてからというものの何人もの冒険者を拒み続け、魔力を奪われてなお手を離そうとしない者には忠告はしたぞ、と言わんばかりにその最後のラインをくぐって精神疲弊へと追い込んだのだった。恐れた人々はその剣を畏怖の意を込めてこう呼んだ、

・魔喰いの呪剣・と。

普段はベルが剣を見つけたところは封鎖されており、関係者以外は入れないようになっているのだが先程声をかけた青年が誤って解放してしまっていたらしい。その証拠、とでもいうかのように男性の後ろで頬を真っ赤に晴らして涙目になっている青年が見えたのだった。

「良かったらなんだが・・・その剣、坊主がもらってやってくれねえか？どうせここに置いてても邪魔になるだけだし、なにより坊主は振れるみたいだからな。そいつの剣としての性能はなかなかだぞ。呪い

さえなきや、第一線で使われててもおかしくない程度には、な。無理にとは言わねえが、どうだ？」

その言葉を受け、しばし思考を巡らす。

呪いの剣、と聞いて恐怖がないといえれば嘘になる。しかし、そんな話を聞いてもなおこの剣に惹かれてる自分がいて、

「ありがとうございます、じゃあ・・・頂いてもいいですか？」

と、即座に答えた自分に驚きはしても後悔はしなかった。

おまけと言いながら背負うタイプの剣帯を渡された時には流石に遠慮してお金を払おうとしたベルだったが違う形でお金は使ってくれたら構わないと言われてしまった。

「それに・・・剣つてのは振られてこそ生まれた意味を成す。ずっと振られない剣を見てると鍛冶士として辛いものがあるってもんなんだ。何年も眠ってたそいつと、見つけてくれた坊主への手向けだと思ってくれ」

そうして背負った剣はずしりと重く、ナイフを使っていた今までとは比べ物にならないほどの重圧が身を襲った。

「そうだ、名前を言ってなかったな。俺はオルガ。下の階で・・・まあ、まとめ役の補佐みたいなんをやってる。その剣のことも含めてなにか用事があつたら言ってくれ、できる限りだが顔を出せるようにはする」

「僕はベル・クラネルと言います。オルガさん！この剣、本当にありがとうございます！」

気にするな、と言って笑うオルガに再び礼を言いながらその場を後にしようとして一番大事なことを聞いていなかったのを思い出した。「そういえば、この剣ってなんていう名前なんですか？」

「ああ・・・多分根元に掘ってあるのがそうじゃねえかと思ってるんだ。悪いな、俺含め何人かが解説しようとしたが誰も読めなかったんだ。神聖文字ヒエログリフでもないとなるともうお手上げだな」

「そうですか・・・」

少し残念だが、仕方ないと諦めるしかない。そう結論づけて今度こそ移動しようとするのとそれより先にアイズがベルの後ろへ歩み寄っ

ていた。

背に背負う剣を見て一瞬不思議そうな視線を向けたがすぐに元の用事を伝え始めた。

「ベル、あっちの方に良さそうな装備があったよ、ナイフと防具」

「本当ですか！すぐ行きます！」

思わず頬が緩むとはこのことなのだろう。

本人が気づいているかは微妙だが明らかに気分が高揚している、と言った様子を醸し出している。オルガの後ろに控えていた青年に至っては、目の前に現れた「ロキ・ファミリア」誇る第一級冒険者の登場に目を白黒とさせていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

そんな青年の反応に気づくわけもなく歩き去っていく二人。その少年の方のあきらかに好意を持つている態度にすぐ気付いたオルガは先ほどのアイスに対するベルの敬称などから二人の関係性を大方推測していた。

（剣姫に憧れてる新人ってどこか？あの様子じゃ気付いてねえんだろ  
うな、今まで剣姫がプライベートで男といることなんざ・・・）

そこまで考えたところでふっ、と歩く二人を見て苦笑が漏れる。

やはり気になってはいたのか剣について尋ねながら触ろうとする  
アイズを必死にに止めるベル。身振り手振りも交えて焦りながら説  
明している姿はせわしない、という表現が似合うだろう。

「あれじゃただの姉弟だな。頑張れよ、坊主」

「オルガ、オルガ！どこにおるのだ！」

「ん？椿か、ここにいるぞ。どうかしたか？」

「どうしたもこうしたもない、手前はですくわーくは苦手なのだ。オ  
ルガがいないと進まぬではないか、早く手伝って欲しい」

「ヘファイストス・ファミリア」団長、椿・コルブランド直々の指名を  
受けて、はあ・・・とため息をひとつ。

「こんな年下の小娘に顎で使われるようになるたあ俺もそろそろ引退かね……わかった、わかったから刀をしまえ。前もそうやって打ち合って店半壊させたのを忘れたか」

「ならば引退などとぬかすでない。……まだ、教えてほしいことがたくさんあるのだ」

後半は小声でそう言い、下へ戻る昇降版へと歩いて行く椿。

残されたオルガは再びため息を吐くとその灰色の髪をガリガリと右手で搔く。

「全く……半老体に容赦つてもんがありやしねえ。これじゃ一線退いたつもりだつてのに逆戻りだな」

「今でも充分第一線ですよ……。とりあえず、すいませんでした。オルガ副団長」

「これからはちゃんとしろよ？アルガス。じゃあ、またなんかあったら……まあ起こさないでくれ、面倒だ」

頭を下げるアルガスと呼ばれた青年に笑いながらそう言い、周りの利用者を完全に無視して昇降版を止めて待つ椿のところへと歩いて行く男の名はオルガ・セリアス。

【ハファイストス・ファミリア】先代団長にして、オラリオで現在七人しか確認されていないLv.6。

そんな彼のことをベルが詳しく知ることになるのはまだ先の話だったー

## 衣替え

「おお・・・」

目の前の鏡に映る自分の姿を見て思わずそんな声が出た。体を包むのは黒いレザーコート。腰まで伸びる裾に銀色の胸当てがついたその防具に加えて腰には二本のナイフ。何より一番の変化は肩から覗く呪剣の柄。

「へフアイストス・ファミリア」の店に入る前と比べると大きく変わった装備は自分とは思えないほど冒険者らしい出で立ちになっていた。(でも、神様には欲張りすぎて言われちゃったけどね・・・)

苦笑しながら腰にささる二本のナイフに触れる。

ベルにダブルナイフの適性を見出したのはアイズだった。呪剣騒動の後、アイズに連れられた先にあつたのがこの二振りのナイフだった。

端の方の棚の上に置かれていて、42000ヴァリスとベルの所持金からすると少し価格は高めであつたが性能はベルのレベルと合わせて見ると丁度いい性能だ、というのが他ならぬアイズの見解だった。

「どうしたらそんなことがわかるのか、とアイズに聞いてみたところ「・・・？見ればわかるよ？」

・・・と、何の参考にならない意見が返ってきた。

そうした経緯で今の装備を揃えるに至ったベルが鏡の前で立ち尽くすこと数十分、ベルを現実へと引き戻したのはドアのノック音だった。

「ベル、ちょっといい？」

「え、アイズさん？」

鏡をしまい、ドアを開けた先にいたのは先程別れたばかりのアイズだった。着替えたのか少し動きやすそうな服装に「デスペレート」をしっかりと腰にさしている。

「今日はもう遅いから・・・明日のために少しでも戦い方に慣れたらって思つて。少しなら訓練場で教えてあげれるよ」



こてん、と可愛らしく首を傾げるアイズはとても可愛・・・ではなく、ありがたい提案だったので頼むことにして剣を置いて部屋から出ようとする。

「あ、剣も背負いながらの方が良い・・・早く慣れておいた方がいいと思うから」

なるほど、と再び剣を背負って立ち上がるベルは訓練所へ行こうとするも、部屋の入口の前。若干控えめに部屋の中を興味深々に覗き込むアイズを見つけて足を止める。

その視線の先にあった物は――

「・・・本、好きなんだね。こんないっぱいあるんだ」

「あ、はい！小さい頃からおじいちゃんを書いてくれたのかが好きで。家から何冊か持ってきてたのと、ダンジョン帰りに買ってたらこんなことに・・・」

ベルの部屋の一辺。入口から一番離れた壁に床から天井まで伸びるベルお手製の木の棚。

板を組み、壁に打ち付けた――隣の団員に許可はもらっている――だけの簡単なものだがとにかく大きい。

まだまだ本の入る余裕はあったが、それでも大量に納められていて十分にアイズの目を惹いた。

「どんな本が好きなの？」

「ええと、子供っぽいんですけど・・・英雄譚とかです」

笑われるかと思いつつもそう言ったベル。

ファミリアに入った時の事を考えると今更ではあったのだが、その返事聞いたアイズはむしろ目を輝かせてベルに詰め寄ってきた。

「・・・私も読んでもいい？」

「(ち、近い・・・)はい！えっと、訓練の後ですか？」

「・・・やっぱり、今日は訓練はやめとこつか。ベルも疲れてると思うし」

そう言ったアイズだったが、元々今日は休めとロキに言われて装備の新調に出かけただけ。

もちろん増えた剣やらナイフやらを持ったまま歩き回ったりした

が、L.v. 1とはいえベルも神の恩恵を授かったうちの一人。

普通の人ならともかく、一日買物で歩き回った程度で訓練を休むほど疲れることはない。

「いや、僕今日は全然疲れてないで「休憩は大切だよ。昨日無茶してたし」……もしかして本、好きなんですか？」

「……うん、昔はね。少し読んでた」

流石に少し食いつきすぎたと思ったのか顔を赤らめているアイズは、とても可愛かったと後にベルは語る。

無論、そんな様子を見てなお訓練をしたいと言い出せるはずがなかった。

「じゃあ、どれでも好きなのをどうぞー！」

「お邪魔します……多いね。どれが面白い？」

「そうですね……これなんてどうですか？それか、これとかも」

近くに寄ると思っている以上に圧倒される量である。

その中からいくつか自分が特に好きな本を選び出してそれを手渡ししていく。

この時、落ち着いているように見えたベルだがやはり浮かれていたのである。

周りから今の状況をどう見られるか……実際他意はなかったとしてもこう言われる。

「アイズさんが連れ込まれた……！」

もう少し注意して部屋の外を見渡せばピコピコと動く長い耳が見えたのかもしれないが……想い人を前にいっぱいいだいた少年には酷であった。

こういった誤解が積み重なってとある事件が起こるのだがそれはまた別の話。

そんな外の状況とは関係なく中では会話は進む。

「もうすぐ夕食だし、ここで読んでいってもいい？」

そう言われ窓を見ると確かに空は茜色に染まりつつあった。

好きな場所へどうぞ、と伝えて自分はベッドへと腰掛けて読んでいた本の続きを開く。

そしてその判断が間違いだつたと気づくのに十秒もかからなかつた。

ーギシツ・・・ー

ベルの隣、つまりベッドの上に腰掛けて本を読み始めるアイズ。

ピンと背筋を伸ばし、壁にももたれずに読んでいる。

窓から差す夕日が金髪に反射してまた絵になって・・・

(じゃない！)

ベルとて男である。

悶々としてその横顔をのぞきこんでみれば浮かぶのは僅かな好奇心のみ。

(意識されてないのかな・・・もっと強くなれば、きつと)

そんな集中出来ない状況での読書はベルのお腹がなるまで続くだつた。

## 限界突破

笑い声が聞こえる。

それは笑うと言うよりもむしろ嗤う、に近いものだったが、すぐに見つかる、逃げないと。

だが、足は動かない。長い杭が深く突き刺さり、血が流れ出ている。近付いてくる声、もうすぐそばまで来ている。

血が不足し、意識が遠のいていく。そんな中、最後に朱い髪が見えた気がした。

—————

「遅くなってごめんね。じゃあ、始めよっか」

その言葉に応えるように二本のナイフを逆手に構え、強く足を踏み出す。

——【ロキ・ファミリア】所属の冒険者になってから今日で六日、目に映る世界は大きく変わった。

それまででは考えられなかったようなスピードや跳躍力。動体視力も上がり、驚くほど周りが良く見えるようになった。

そしてその変化に驚いているのはベル本人だけではない。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインと共に冒険者登録をするためギルドに現れた新人。

その目立ちすぎると言えるデビューに少くない人が注目し、街の中、あるいはダンジョンの中でその特徴的な容姿も相まって興味を持たれていた。

そして、人だけではなく神々からも興味は向けられていた。

日に日に目に見えて強くなるその少年に抱く感情は賞賛か、嫉妬か、それとも・・・疑念か。

なににせよ、本人が満足しているかと聞かれると、否である。届かない。

元からあつた壁が高すぎて。

数字としても、経験としても目標との距離を遠ざけるのだった。どれだけ知恵を振り絞って立ち回っても、隙について攻撃してみても、軽くないなされてしまう。

何度も吹き飛ばされ、倒れた。絶望的なまでの力量差である。それでも、諦める理由にはならない。

「立てる？」

訓練中、何度もかけられたその言葉に立ち上がることで応える。初めの頃。と言ってもほんの数日前の話だが、その時のように気絶する回数が確実に減ってきている。

本人の自覚はともかく、相対する憧憬にはそれがよく分かった。

ナイフを握る手に力を込め、その深紅ルベライトの瞳に憧憬を写し、再び少年は駆ける――

それからの一週間は驚くほど早く過ぎていった。

朝早く起き、ダンジョンに潜る。

何度か豊穡の女主人で食事をして、シルにからかわれたり。

そしてベルの生活には少し変化があった。

暇な時や就寝前、アイズが本を読みに来るようになったという点だ。

慣れというのは恐ろしいもので初めは動揺して文字が頭に入ってこなかったが、今となつては割と落ち着いて読むことが出来る。

ちよくちよく出入りしていることについてリヴェリアやロキから問い詰められたこともあるが、喜ぶべきかはわからないが特に問題ないとは判断された。

ロキから言い渡されたペナルティの期限は三日。

四日目からはアイズも本人の成長のため、あるいは未開の深層への挑戦へと向かい、一緒に潜ることはほとんど無くなったが、朝の訓練は毎日続けていた。

本来、アイズ一人で行っていた訓練。

城壁の上の影は二つになり、キン、キン、と剣を打ち合わせる音が響くようになった。

もちろん、剣だけを練習しているわけではない。

お互い付与魔法の使い手としての魔力制御のコツであったりを教えてもらったりもしていた。

そこで初めてアイズの「エアリアル」を見ることになったのだが：（前、僕の魔法の方がすごいなんて言ってたけど・・・全然そんなことない・・・！）

膨大な魔力量を完璧にまとめあげ、望んだ所へと集める。

フィンとの模擬戦でベルが使った技術と同じではある。が、練度が違いすぎる。

付け焼き刃とは違う、洗練された魔法にまた憧れは増していく。

そうした日々がすぎる中、ダンジョンに潜り終わった後ベルが今いるのは冒険者ギルド本部。

いつも通り騒がしい室内に、ハーフエルフの受付嬢の怒声が響き渡った。

「じゅっかいそう!?あのねえ、いつも言ってるでしょ!冒険者は冒険しちやいけないって!」

・・・事の発端は先ほどの会話。と言うよりもベルが持ち込んだドロップアイテムが問題であった。

エイナはギルド員として、ダンジョンの知識をある程度持っている。

そのおかげかウキウキと換金をしようとするベルの手元の違和感に気づいたのである。

「ねえ、ベル君。それなあに?」

「あ、エイナさん!見てくださいこれ!オークが落としましたんです!」

「・・・ベル君?君は一体どこまで降りてるのかな?」

「えっと、今日は十階層です!」

そして、上のように叫ぶに至った。

「で、でも!神様が中層までなら潜ってもいいって・・・」

「神ロキが?・・・うーん。ベル君、ちよっと来て!ミーシャよろしく!」

「いちやつくのもほどほどにね」

「もう！そんなんじゃないってば！」

顔を赤くして同僚にそう叫んだエイナに手を引かれてギルドの裏へと連れこまれる。

「服！」

「は、はい？」

「ギルド員として絶対に口外しないから！【ステイタス】見せてくれないかな？」

「え、でも隠蔽が・・・」

「あれ、隠蔽をはがす薬があるって言われたことない？」

そう言っ取り出したのは小さな瓶。

・・・ここでさらっと取り出したが、この薬は割と高い。

もちろんこんな物騒なものをエイナが個人で所有しているわけはなく、ギルド本部からくすねて来たものである。

もちろんこれを持っていても神聖文字が読めなければ意味は無いが、エイナはある程度なら読むことが出来た。

蛇足だが、ここでギルド員として発言しているが完全に独断であり、個人的感情がちらちらと見えていたのは言うまでもない。

(気をつけろって言われてるけど・・・エイナさんならいつか)

ベルはそう結論づけて背面の上着をたくしあげていく。

見た目よりも引き締まっている身体に赤面するエイナが見えなかったのは残念だったと言える。

特殊な薬品をベルの背中に垂らせば、ロキによって隠されていた【ステイタス】が浮かび上がってくる。

その数値を見て、思わず息を飲んだ。

同時刻、ベルの部屋。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さも当然といった様子でベッドに寝転びながら本を読むアイズの

姿があつた。

開けた窓から入ってきた風に心地よさげに目を細める。

パサリ

と、机の上にあつた紙が床へと落ちた。

(・・・ステイタスの、紙?)

マナー違反とは分かっているながらも寝転んでいたベッドから起き上がり、裏返しになっているそれを手に取る。

取って、しまった。

(・・・!)

ベル・クラネル

L V . 1

力 : E 4 8 9 ↓ A 8 9 2

耐久 : D 5 3 2 ↓ S 9 5 3

器用 : D 5 1 1 ↓ S 9 6 3

敏捷 : C 6 8 9 ↓ S S 1 0 6 5

魔力 : A 8 1 4 ↓ S S S 1 1 0 3

## 《魔法》

【ホーリー】

・ 付与魔法

・ 詠唱式【輝け】

## 《スキル》

リアリス・フレイゼ

【情景一途】

・ 早熟する

・ 懸想が続く限り効果持続

・ 懸想の丈により効果向上

ライト・ブレス

【光加護】

・ 戦闘中、魔力のアビリティ上昇

・ | | | | | | | | | |

・ | | | | | | | | | |



•  
|  
|  
|  
|  
|  
|  
|

## 怪物進呈

（限界突破……？確か、飛び抜けた『ステイタス』を持った人がスキル発動中の補正がかかることで稀に起こる現象……だっけ？でもそんなの過去に数人いたくらいじゃ無かったかな……。自己申告だからそれすら本当なのか分からないけど）

目の前の新人の背中<sup>オバーリミット</sup>に記されている数値を見ながらギルド員であるエイナ・チュールは自分の記憶を掘り起こす。

しかし、いくら考えてみても先程出した結論は覆ることは無いとわかった。

（確かベル君が恩恵受けるようになってから……二週間弱くらいだったかな？そんな短期間で『ステイタス』が伸びるとは考えにくいし……スキルのおかげなんだろうけど、読めないなあ……。）

エイナが読めたのはアビリティの数字のみであって、スキルに関しては読めなかったのだった。何度かステイタスの強制開示の機会に立ち会ったことのあるエイナであったが、これまでもすべて読めていたわけではなかったのでそういうものであると諦めていた。

これは、公開されている神聖文字があまり多くないことが影響している。

「エイナさん？」

「……これなら確かに十階層に潜るだけの力量はあります。けど、無茶はしないこと！特にベル君はソロなんだから対処できないことも多いんだからね？……そういえば、パーティーは組まないの？」

「えっと……この間【ファミア】の人に聞いてみたら数日待つて欲しいって言われて、明日か明後日くらいにLv. 2の人がリーダーのパーティーに少し入れてもらおう予定です！」

「うん、それがいいんじゃないかな。そうなると今日は一人になるけど、ぜったいに無茶しちゃダメだからね？何回もいうけど冒険者は冒険しちや……って、逃げるなー！」

「また聞きまーすー！」

そう言っつてベルはいつも長くなるお説教から逃走するのだった。

「全く……強制開示、許可貰ったけどまずかったかな……神ロキになにか言われるかな……」

この懸念通り、ベルの次の更新の時にロキが気付いて問い詰めることになるのだが、エイナの今までの担当した冒険者に対する手厚い補佐のことは知っていたこと、リヴェリアが説得したことにより注意を受けるだけで済んだのは少し先の話。

そして、翌日の早朝。

「あ、おはようございます。アイズさん」

食堂で朝食を摂ろうとした時、既に食べているアイズを見てそう挨拶をするベル。

朝の食堂  
「ここで出会うことは珍しいので朝から少し喜んでいたのだが」

「おはよう。ベルは……強いね」

「はい？」

急にアイズにそう言われ、つい素で聞き返してしまう。

考えてみてほしい、毎日ボコボコにされ、吹き飛ばされている相手からのこの言葉である。

しかも、明らかに本気を出していないのである。

ベルがその俊敏を生かして動き回るのに対してアイズは必要以上に動くことは無い。

「いやいや、そんな事ないですよ！まだアイズさんに攻撃が届いたことすらないし……」

「それでも、すごいよ。……どうして、そんなに頑張れるの？」

「えっと……、どうしても追いつきたい目標と、叶えたい夢英雄があるから……です」

「そっか・・・私と。一緒なんだね」

その言葉に引っかかりを覚えたベルだったが、食器を持って立ち上がってしまったアイズの格好を見たことで驚き、質問をかけ損ねてしまった。

「あれ、こんな朝早くからダンジョンに行くんですか？」

「・・・うん。少し、深くまで潜るから」

そう。今のアイズは完全な戦闘用の服であり、腰にはしっかりと・デスペレート・が刺さっていたのだった。

ちなみに、ベルの朝は異常に早い。

つい最近までは普通に他の団員たちが起きる時間帯に起きてきていたのだが、朝食はしっかりと食べるようにというロキの理念があるため、食堂で食事を摂ることになる。

そして、他の団員たちと時間が合うとどうしても混む。すると毎日続けているトレーニングの開始時間が遅くなってしまう。

なら、早く起きて誰もいない時に行けばいいんじゃないかと考えた結果、料理人が食堂に来るギリギリの時間帯に来るようになったのだった。

余談ではあるが、ベルは食事をとても美味しそうに食べる。

食堂のレベルが高いのもあるが、朝から笑顔で「美味しい！」と言ってくれるベルに対して料理人達の印象はとても良かった。

「そうなんですか・・・頑張ってください！」

「ベルも、今からダンジョン？頑張ってくださいね」

「アイズ」

そういったやり取りをしていると入口からスツトリヴェリアが現れた。

アイズと同じくベルが前に見た遠征の時と同じ格好であり、しっかりと武装していた。

「ごめん、すぐ行く」

それでアイズとリヴェリアが二人でダンジョンに行くことが察せられた。

食器を片付けているアイズを横目にベルのそばに近付いてきたり

ヴェリアはベルにしか聞こえない声で囁いた。

「・・・しばらく、アイスがいる時は『ステイタス』の紙を見えないところにしておいてくれるか？」

「へっ？は、はい！・・・僕の『ステイタス』がどうかしたんですか？」  
「いいや、何も問題は無い。これからもその調子で頑張るんだぞ」

そう言つてベルの頭を少し撫でた後にアイスと一緒に食堂から出て行つた。

「・・・？」

その後、ベルはいきなりのリヴェリアの行動に動揺を隠せないまま食堂に取り残されたのだった。

「ふっ！」

「ギギヤアアア・・・」

ダンジョン第十一階層。

今しがた倒したモンスターから落ちた魔石を拾いながら頭を巡らす。

(もう少しで十二階層：ポーションよし、武器の損傷なし、サラマンダーウール火精霊の護符が必要になるのは十三階層だから問題なくて・・・時間もまだ大丈夫！もう少し進んでみよう)

ナイフを鞘に収めて再び歩き出す。

次の曲がり角を曲がれば階段が見えるはず・・・と、考えたところで冒険者になり上がった聴力が離れたところからの音を捉えた。

「・・・、・・・、・・・っ！」

「・・・っ、い・・・！」

(なんだろう？すごい急いでるみたいだけど・・・)

曲がり角からひよこつと顔を出すと凄まじい形相でこちらへ走ってくる数人のパーティーと思われる集団が見えた。うち一人は負傷しており、先頭を走る一番大柄な男の冒険者が抱えている形であつ

た。

ダンジョン内ではほかの冒険者には関わらない、そんな言葉がベルの頭をよぎるが反射的に声をかけてしまった。

「どうかしましたか!？」

しきりに後ろを気にしていた冒険者たちは声をかけた瞬間こちらに顔を向け、男の冒険者は一瞬迷ったような素振りを見せたがすぐに仲間に向かって叫んだ。

「同業者だ！なすり付けるぞ！」

「し、しかし、桜花殿！」

「知らない奴とお前らなら俺はお前らの命を選ぶ！責任は俺がとる、急げ！」

大急ぎで目の前を通り抜けた時、男の冒険者以外が目伏せていたのが印象的だった。

何が起こっているかわからず冒険者達の背中を呆然と見送っていたが、後ろから新たな音が聞こえ、振り返ることでその冒険者達のやり取りの意味を理解することになる。

暗闇の奥に光る赤い目。重量感のある足音と共に階段から上がって来たのは……

「ヴガアアアアアアアアアア!!」

「く、黒い……ミノタウロス……!？」

その巨体に見合わぬ驚異的な速度で突撃してくるミノタウロスに急に反応することは叶わず、咄嗟に腕を胸の前で交差させて後ろに飛ぶことしか出来なかった。

「がはっ……!」

元々ベルのアビリティの中でも二番目に低い（一般的には決して低い訳では無い）耐久である。振るわれた拳の衝撃をすべて受け流し、耐えられるわけもなく吹き飛ばされ、壁に打ち付けられて息が詰まる。それでもすぐさま起き上がり、すぐ後ろにあったルームへと退避する。

そこで新たな嬉しくない発見があった。

（前見たやつよりだいぶ大きい……）

加えてその丸太のように太い右腕に握られているのは無骨な大剣。明らかに元は冒険者のものとわかるそれは下の階層での犠牲者なのかと奪われたかもしれない命に思いを巡らせている暇もなく、目の前のミノタウロスが息を大きく吸い込み胸を膨らませる。

『ヴオオオオオオオオア！』

『咆哮』<sup>ハウル</sup>

モンスター固有のスキルであり、格上相手には効果のないそれも今の状況では非常に効果的なスキルである。

その声を聞いたベルの身体は硬直し、再び無防備な姿を晒すことになる。

そんな中、震えるベルを見ながら嘲笑うように眺めているだけのミノタウロスは、待ってやっている。と言わんばかりに肩に担いだ大剣を叩くようにして佇んでいた。

情けない。

そう感じた瞬間、『咆哮』の効果は薄まった気がした。

それでも、この絶望的な状況は変わらない。

先日出会ったミノタウロス。脳裏に圧倒的な力の差がよぎる。

しかも今回のミノタウロスに関して言えば、大きく黒い身体、通常個体とは違うその特徴から導かれる答えは……

「強化種……っ！【輝け】<sup>クラルテ</sup>、【ホーリー】！」

再びニヤリと笑ったミノタウロスに背を向け、逃走を開始するべし。

勝てるわけがない、そう思った。

全力でかけ上がればもしかしたら間に合うかもしれない、

そう考えての行動だったが、上へと戻る道を見た時に思い出した先程の冒険者達。どこの【ファミア】の団員かは分からないが彼らでは勝てないから逃げ出したのだろう。

それだけではない、これより上の階にこのミノタウロスと闘える人はどれくらいいるのだろうか？

自分のように助けが入るとも限らない冒険者がいるところへこいつをつれていってしまったては……

そう考えると寒気がした、間違いなく死者が出る。

今回は自分にも助けが入るとも限らない、むしろ前回は幸運すぎたのだ。

「な、なんだあれ!」

「ミノタウロス!?なんでこんな所に!」

「さっきの奴らが言ってた怪物進呈パス・パレイドってあれのことか!こつちに来るぞ!」

逃げ始めて少しした時、前からそんな声が聞こえた。

見てみれば、自分とそう変わらない、もしくは自分よりも下に見える先ほどとはまた違う三人の冒険者パーティーがいた。

このまま引つ張っていけば危険が及ぶ。

決意し、振り返る。

二本のナイフを引き抜き、後ろから追ってくる存在に立ち向かう。

「おい、あいつ戦う気か!」

「見るな!早く逃げるぞ!」

「でも、あいつだつてなすりつけられた側だよ…。俺らも加勢すれば…。どうにかならないか?」

「馬鹿!何言ってるんだ!無理に決まってるだろ!」

後ろでそんな口論が聞こえる。

他人を救おうと思う馬鹿が自分だけではないと知り、少し嬉しくなる。

幸い、まだミノタウロスはベルしか見ていない。

息を吸い、大声で叫ぶ。

「早く逃げてください!僕が時間を稼ぎます!」

その言葉に全員驚いた顔をしていたが、一人、二人と逃げ出していく、最後まで残っていた一人が悔しそうな顔をして叫んだ

「すぐ、絶対助けを呼んでくるからな!」

そう言って去っていった三人。

深く息を吸い直し、魔法で強化された身体能力を使って駆け出した。



驕り

「はあああっー！」

先手必勝、という言葉に従い懐へと踏み込む。

アビリティをフルに活用しを脇腹を切りつけつつミノタウロスの後ろへと回る。

その際に腕から伝わってくる鈍い感覚。切りつけたところを振り返りながら見てみれば僅かな切り傷がついているだけだった。

その傷もすぐさま煙をあげて塞がっていく。

オートヒーリング  
(自動回復……！)

魔力と引き換えに自らの傷を癒すモンスターの特殊スキルとされているそれは、一撃がそこまで重くないベルにとっては一番相性の悪いものであった。

内心で辟易しながらも足を止めることなく再び後ろから二本のナイフを地面と水平に構え、身体ごと回転するように背中を切り裂く。

先程よりは深く入ったその傷も同じように回復していくのを見る間もなく、振り向きざまに振るわれた大剣の一撃を後ろに転がりながら躲す。

頭上を通り過ぎる一撃に肝を冷やしながら一旦体制を立て直そうとするが、起き上がった先で向かってくる拳に不安定な体制から不格好に横へと飛ぶことでなんとか直撃を免れる。

そこでやつと一息つけることになったのだが、完全に無傷のミノタウロスを見て焦りが募る。

(一瞬でも視線をそらしちゃダメだ、一撃喰らうだけで致命傷になっちゃう……！)

拳で抉られたダンジョンの床を見てそう判断する。

この状況、ベルが取れる選択肢は主に二つ。

一つはミノタウロスの魔力が尽きるまでダメージを蓄積し続けること。

いくら強化種とはいえミノタウロスは本来魔法には向いていない種族であり、そこまで魔力量は多くない。

問題は、そこに至るまでにベルの魔力が持つかどうかである。

Lv. 1としては破格の魔力を持つベルだが、闘っている間常に【ホーリー】を使い続けている今、相手の底が見えていない以上はそれでも足りるかどうかは分からない。

二つ目の選択肢は、ミノタウロスの自動回復が追いつかない程の強撃を与えること。

こちらは今見ている限りナイフでの攻撃ではそんなことは出来ない。出来ない。

背の呪剣を見ずに意識するベル。

最前線でも通用すると太鼓判を押されている剣ならあるは．．．  
と思考していると結論を出すまでもなくミノタウロスが上段から剣を両手で振り下ろしてくる。

叩きつけられた地面から亀裂が走り、闘っているルームが軽く振動する。

バックステップで下がりながら次の行動へと移る準備をし、着地した瞬間に全力で前に飛び、反動で動けないミノタウロスの股下を潜りながら足首を切りつける。

『ヴオオオオオオオオ！』

自分の攻撃が当たらないことに苛立ったように再び『咆哮』するミノタウロス。

通常、『咆哮』は個人差はあるが連続で打つと効果は薄くなっている。

一回目で慣れ、もう効かない人も居れば何度聞いてもかかるといえるが、ベルは前者に限り無く近いがそれでもやはり恐怖は克服しきれない。いや、克服しきれなかった。

「く．．．っ！」

限りなく一瞬に近い隙を晒したベル。

すぐさま自分に奮い立たせて行動に移ろうとするが、もう先ほどのように奢り、ベルの事を格下と侮ることの無かったミノタウロスはその一瞬の硬直を見逃さずにしっかりと距離を詰めてきた。

剣の背で横殴りにされ、ルームの反対側まで10Mほど吹き飛ばさ

れる。

なんとか受け身をとって体制を立て直すのが、被弾した箇所が悪かった。

顔の左前の額のあたりから血が流れて目に垂れてくることで左の視界が阻害される。

しかも、それを見てからミノタウロスが左へ左へと回り込むように素早く動くように行動を変えてきたことで

更なる苦戦を強いられることになる。

極限の戦いは、続く。

(急げ、急げっ！早く助けを呼ばないと！)

第八階層、逃げ出した三人の冒険者のうちの一人は全速力で上へと駆け上がっていた。

そう、最後まで残っていた彼である。

息も切れ、他の二人は途中で体力が無くなって休憩をするのを無視してひたすらに上級冒険者の姿を求めて走り続けている。

この男、L.V. 2でもそこそこの名知れた冒険者であり、いわゆる斥候担当。つまり、俊敏のアビリティが高いのであった。

(あのミノタウロス、間違いなく強化種だ！あの白髪の冒険者もいつまで持つかわからねえ・・・)

隠す気も無く舌打ちする。

少しいい装備をしていたが、恐らく自分たちとそう変わらない実力だろう。

そんな状況で一人で残してきてしまった

しかし、その場に自分がいても犠牲が増えるだけということも理解

していた。だからこそこうして必死で走っていたのだが・・・

その努力は、実った。

「・・・っ【剛剣】！」

「ん？」

「頼む！いや、お願いします！人を助けてやってほしいんです！」

ただっ広いルームの中、数人の冒険者の中から一方的に知っている上級冒険者の姿を見つける。

【ファミリア】単位の行動なのか急に現れた第三者に周りの人の空気が悪くなつていくのをその男が手で制した。

「おいおい坊主、ダンジョンじゃあ他の冒険者と関わるのは御法度だぜ？」

「そんなことは分かってる！けど、俺らじゃどうしてもダメだったんです！」

「そんなのは俺らの知ったことじゃねえ、聞いてくれるかは知らんが他を当たりな」

床に頭をつけ、いわゆる土下座の体制で頼み込んでもその男の意思は変えることはできなかった。涙が滲んだが、こんなことをしている間にも時間は過ぎていく。

立ち上がって軽く頭を下げた再び走り始める。

「クソツ、早くしないとあの白髪がやばいつてのに・・・」

「ん？おい、ちよっと待て坊主」

しばらく進んで愚痴っているとそう声をかけられる。走り始めて少しした後だったので距離はだいぶ離れているのに声を拾った男に軽く戦慄する。

こちらに歩きながら男は質問してくる。

「助けが必要な奴の目の色はなんだ？」

「・・・赤だった。もう行っても良いですか？」

「いや待て、俺が行こう」

その言葉に呆気にとられる。

先程まで何を言ってもここで動かなかったのに急に意見を翻した理由が分からなかった。

「どこら辺で何に襲われてるんだ？」

「あ、十一階層の後ろの方……です。多分、強化種のミノタウロスか、と」

「十一階層にミノタウロス、それも強化種だど？それを先に言え！助ける云々以前にそれはほっておけない事態だな……。よし、ミレディは先行して【ロキ・ファミリア】へ走って新人が襲われてるって伝えてこい、俺の名前を出せばある程度は信じてくれるはずだ」

「はいっ！」

そう言っ駆け出していく一人の少女。

「また今度時間を作ってやるから今日はここまでだ。ギル、パーティーは任せる」

「了解です、お気を付けて！」

「じゃあ行ってくる。アルガス、この坊主を上まで連れてってやれ」

「はい、副団長」

助けに行ってくれる、そう理解した瞬間に足の力が抜けてへたりこんでしまっていた男は仲間には先行すると伝えてあるから大丈夫か、とその言葉に甘えることにして、ただただ名も知らぬ少年の無事を祈るのだった。

どれほど戦い続けたのだろうか。

数時間かもしれないし、数分のことかもしれない。それほどに消耗していた。

切って、避けてを繰り返す。

頭にもらった一撃のせいでもうしても慎重にならざるを得なかったがそれでも神経を研ぎ澄まし、それ以降は大きな被弾もなくこの戦闘中に成長しながら戦ってきたベルだったが、それは相手も同じだった。

「ぐっ・・・」

今もまた、はじめの方では考えられなかったフェイントを繰り出してタイミングをずらしてくる。

大きな被弾が無いだけであって、かすり傷は数え切れない。圧倒的な力を持って振るわれる拳と剣が砕く壁や地面から飛んでくる石が着々とベルの体力を削っていく。

もちろんミノタウロスとて無事な訳では無い。

ベルの間をついた攻撃が積み重なり、自動回復は限界を迎えて身体にはごく僅かではあるが傷がついている。

それでも、慎重になった攻撃では致命的な傷を負わせられずにいた。

ベルは息も切れ切れに、肩で息をしながら走り回っているのに対してミノタウロスはまだまだ体力には余裕のある様子である。

ベルは先程から腰のポーチに入ったポーションを飲もうと隙を探っているのだが、死角へと回りながら執拗に攻めてくるミノタウロスの対処に手一杯になっていた。

(何とかならないか・・・、っ！そうだ、これなら！)

魔力を手元のナイフに集め、ミノタウロスの目元で一気に解放する。

凄まじい光が起こり、ミノタウロスは一時的に視力を失ってやみくもに剣を振り回し始める。

それでも危険極まりないので即座に退避してすこぶる不味いポーションを無理やり飲み込むと、身体が少し楽になった。

マジックポーションも続いて飲み込み、瓶を捨てたところでミノタウロスも視力を取り戻したようで先程よりも苛立った様子で距離を詰めてくる。

ここで、思わぬ事故が起こる。

先程からの攻撃で地面に空いていた亀裂に足を取られて体制を崩してしまうベル。

慌てて攻撃を逸らすためにナイフを少し斜めに構えるが……ギンツと鈍い音が鳴り響き、ベルの目に入ったのは二本のナイフの剣先だった。

度重なる打ち合いで痛み、先程の魔力解放で限界がきたナイフが半分ほどで折れてルームの端へと転がっていく。

慌てて鞘へとナイフを収め、背の呪剣を引き抜く。

しかし、その剣が光を纏うことはない。

これにはちやんとした理由があった、思い出すのは少し前のアイズとの会話。

『……いつもナイフでしかやってないけど、剣でやらないの?』

こう声をかけられたのが付与魔法での鍛錬の時だった。

その言葉の通りベルはその時点で既にナイフでしか使っていないかったのである。

『えっと……なんでか分からないんですけど、剣に付与すると一瞬で魔力が持つていかれちゃうんです……』

『……? 何でだろう……。絶対量が足りてないのかもしれないね』  
『一応寝る前に思いっきり流して見るのを毎日してはいるんですけど、今でももって数秒しか無理なんです……』

『ランクアップすれば何か変わるかもしれないね。……頑張る?』

『は、はい!』

といった理由がある。

そのため身体にしか魔法はかかっている状態ではあるが両手で呪剣を持って切りかかる。

先程までなら浅く切り傷を付けるだけだった自分の攻撃、ナイフより不慣れな剣ならどうなるのか不安だったがそれは杞憂に終わった。

「ヴォツ!？」

ここに来て初めてミノタウロスが驚いたような声を上げる。

ベルが切りつけた左腕は決して小さくない傷がついていて、赤い血が垂れ流れていた。

(すごい・・・！武器でこんなに違うんだ！)

「浅く切っただけでもするつと切れる呪剣に歓喜するベルだったが、一撃入ってからミノタウロスの警戒心が高まり、追撃を与えられないでいた。

ここでベルは試すような切りつけではなく、即座に強撃を狙うべきであった。

自分を害するとわかった剣に対するミノタウロスの対処は凄まじかった。

剣が届かないような立ち回り、剣回し。

どんなに強力な武器でも技術が伴わなければ意味は無い。

その状態が今のベルであった。

(くっ・・・なんで、なんで！)

焦りが募り、一撃一撃が荒くなってくる。

教えて貰っている時とは天と地ほどの差があるその剣戟は、ミノタウロスにとって格好の狙い目となった。

ベルが上から振り下ろした剣に自身の大剣を合わせてすくい上げるように剣をはね上げる。ベルが見せた訳では無いベルにとっては初めて見るその技術に対応しきれず、手放してしまった呪剣は少し離れた所の地面に刺さる。

慌てて戦闘から離脱し引き抜きに行こうとするが、運悪く先ほどの亀裂に丁度刺さったようですぐには抜けなくなってしまうていた。

右往左往していると、ミノタウロスが攻撃を仕掛けてくる。

手元にあるのは折れたナイフ二本のみ。

すぐさま手を離して逃げるが、今までで一番最悪の状況になってしまった。

(もう一度・・・っ！)

今度は手に魔力を集め、再びミノタウロスの前で解放しようとする



が・・・

「ガフツ・・・！」

目の前に手を持っていった瞬間に横から拳が飛んできてベルの身体は軽々と吹き飛ばされた。

ベルの放った閃光は確かにミノタウロスの視力を奪ったが、目の前にいるならただ前面を薙ぐだけでも当たる。奇襲は初めて見せるからこそ成り立つのだ。

左腕が折れただろうか、力が入らない。

再び視力を取り戻したミノタウロスがベルを探している。体制を整えなければいけないが、身体が思ったように動いてくれない。

それどころか、どんどん意識が朦朧としてくる。

完全にベルの意識が落ちる直前に見えたのは、ベルを見つけて笑うミノタウロス姿だった。

## 想像

「どなたかいらっしゃいませんか！」

八階層での出来事から数刻後、そう大きく通る声が黄昏の館に響き渡った。

上へ戻って報告するように言われたミレディという少女は副団長の言葉に従って「ロキ・ファミリア」へと報告に来ていたのだった。

「何か用かな？」

「ブ、【勇者】<sup>フレイバー</sup>さん！」

「ん？君は……」

「へファミストス・ファミリア」のミレディと言います！副団長、オルガ・トレアスから伝言です。『新人が襲われている』との事です」

誰もが名を知る第一級冒険者の登場に動揺しながらもなんとか伝言を伝えるが、あまりの動揺にいろんな情報がすっぽ抜けてしまっていた。

「んー、新人っていうのはうちの【ファミリア】のってことかな？もう少し詳しく教えてもらえるとありがたいんだけど……」

「す、すみません！私もそこまで詳しくは分からないんですけど、『第十一階層で赤目の冒険者が強化種のミノタウロスに襲われている』と下から上がってきた冒険者の方が言っていました」

「ベルか……。それで、オルガは今どこに？」

「えっと、それを聞いた後にすぐに下に向かわれました！」

（……オルガが他の【ファミリア】の冒険者を？ああ、強化種の討伐かな）

「わかった、報告ありがとう。助かったよ」

「い、いえ！では、私はこれで失礼します」

ペこりと頭を下げて去っていく少女を見送り、一度館の中へと戻るフィン。

「リヴェリア……は留守か、ガレスはいるかい？」

「呼んだかのう？」

「ベルが強化種のミノタウロスに襲われているらしい。オルガが先行

してくれてはいるらしいし過剰かもしれないけど着いてきてくれるかな？」

「ぬう・・・ミノタウロス、それも強化種か・・・。分かったわい、ついて行こうとしようかのう」

「周りには迷惑だらうけど飛ばすよ、急ごう」

そんなことを言いながら領き合って出発する二人だったが、すぐにその意味が分かることとなる。

お互いに俊敏のアビリティが突出している訳では無く、がレスに關しては盾職タンクでむしろ低いぐらいではあるがLv. 6の名は飾りなどではなかった。速すぎて目が追いつかない程のスピードで走り抜ける二人を辛うじて視界に捉えた人がギョツとしたような表情になるのも構わずにひたすら進んでいく。

今も戦っているか、それとも既に終わっているか分からない家ベル族の元へ、オラリオを代表する第一級冒険者達は駆ける。

「……」

目を開けると広がるのは何も無い白い空間。

どこを見ても真っ白で、果ての無い場所にベルはいた。先程まで動かなかった左腕も何も無いかのように動き、血で見えていなかった左目の視界も戻っている。

（僕は・・・ミノタウロスに、負けたのか。死んじやったの、かな）

思い出すのは目を閉じる前に見たミノタウロスの笑み。

弱者を嘲るような嫌な顔だった。

悔しい。

違うもので視界が滲む、こんな所で夢英雄が絶たれてしまうのかと思う

と涙が留めなく溢れてくる。

「泣いちゃダメだよ」

その空間に声が響いた。

その声を聞いてベルははっとする。ついこないだの話だったではないか。

(ここ・・・前も来たこと、ある)

声が出た方を向いてみれば、やはりいた。随分と久しぶりに会ったような気がする。それほどオラリオでの生活は濃いものであった。

「シェリア・・・さん」

白銀の髪を持つ少女とベルは、再び顔を合わせる事となった。

近付いて涙を拭い、頭を撫で始めるシェリア。

「泣いちゃダメ、まだ出来ることはあるよ」

聖女のような微笑みをベルに向けて再びそう言った。

それを見て、ひどく安心した。

体も痛まない、自分を害するものは何も無い。

居るのは自分を慰めてくれていたかわいい女の子だけ。

その事実緊張が抜け、再び涙腺が決壊した。

「で、でもっ！武器もどられちゃっで・・・どうすればいいかわからなくで・・・」

情けなく、みつともなく、鼻声になりながらそう声を絞り出す。

そんなベルを見てもバカにする素振りもなく、頷きながら頭を撫でてくれる。

「諦めないで、まだベルは戦えるから。想像して。今を乗り越えられる力を」

(想像・・・今を、乗り越えられる力を)

心の中でその言葉を反芻する。

今、自分の身体がどうなっているかは分からない。

武器もなく、あるのは直前に回復した魔力と己の身体のみ。

「大丈夫、自分を信じて！ベルなら絶対に勝てるよ！」

今度は元気な笑顔を向けてそう言われて、つられて笑みが溢れる。絶望的な状況は変わらない。

それでも、戦えない訳では無い。  
涙を拭い、気を引き締めて心を入れ直す。  
また始まる戦いが怖くない訳では無い。でも、今誰かを守るためには自分がなんとかしないとイケない事だから。  
そう決意した途端に撫でられる手の感覚が薄くなっていく。  
名残惜しく感じていると、遠くなる声がシエリアの言葉を拾った。  
思わず苦笑いし、その時はと心に誓う。

『次会うときは、呼び捨てで呼んでね!』

(そろそろか?・・・って、あれは)

少し時間は遡る。

フィンたちと同じくLv. 6のアビリティを生かして下へと降りていたオルガは、そこで思わぬ人物と出くわすことになる。

「ベートじゃねえか、どうした?」

「あ?・・・オルガか。別に、大したことじゃねえ」

そうして視線を前に戻したベートの先にいたのは、今まさに自分が探していた少年だった。

報告されてから急いだとはいえだいぶ時間が経っている。

それなのに強化種のミノタウロスを相手に逃げることもせず、焦りが顕著に現れ、剣の扱い方も拙いながら必死に戦っていた。

有効打を決められずにいるが、相手のことを考えると素晴らしい結果と言えるだろう。

「助けてやらねえのか?」

「あの程度で死んだらそれだけの奴だってことだろ」

そんな言葉に思わずニヤニヤしてしまう。

今も戦闘をしつかりと見て、いつでも飛び出せるように身体に力を入れているのが見る人が見ればよく分かった。

「お前も素直じゃねえなあ」

「・・・」

その瞬間、ベルの剣が弾き飛ばされて地面に刺さる。

抜けないのか右往左往しているベルを見て、そろそろ不味いかと思いは始める。

その瞬間、こちらまで届く程の閃光がオルガの目に入った。

(うおっ!?)

咄嗟に顔を腕で庇って目を守る。

再び前を見ると壁に叩きつけられ、纏っていた光が弾けるように霧散してしまう。

それを見てもベートもオルガも動かなかった。

立ち上がらないベル。

視界を取り戻したミノタウロスはその小さな身体を叩き潰そうとジリジリと近づいていく。目の前まで歩き、剣を振り上げた所で変化が起きた。

「・・・【ホーリー】」

笑みを浮かべながらベルはそう言った。

その言葉を聞いてベートだけが何かに驚いた顔をしたがオルガには分からなかった。

自分に向かって振り下ろされる剣を見切り、ミノタウロスの後ろへと回る。

「ヴオツ!?!」

土煙が上がり、視界が塞がれたミノタウロスは手応えがないことに  
気付きながらもその場を動くことが出来ずにいた。

未だに左目は塞がれたではあったが、先程よりも周りが良く見え  
た。

深く息を吸い、目を閉じて集中する。

(想像・・・想像・・・)

無手では勝てない。

硬い筋肉の壁相手には逆に自分が傷を負ってしまうだろう。

想像する、目の前の脅威を切れるだけの鋭い剣を。

光が、魔力が、ベルの右手の中に収束していく。

それは次第に剣の形を作り上げていき、やがて一度大きく瞬くと完  
全にベルの手に収まった。

背中が熱い。

どんどん身体の奥から力が湧き上がってくる気がした。

そして土煙が晴れ、お互いの姿を認識する。

ボロボロの身体で光の剣を握り、その深紅ルベライトの瞳に闘志を漲らせて  
自分を睨みつけてくる弱者ベルに僅かにうろたえるミノタウロス。

今のベルは、その好機を見逃すことは無かった。

身体を前傾させ、全力で駆ける。

そのスピードは今までの比ではない。

一瞬で間合いを詰め、懐へ入ると見せかけて全力で上に飛ぶ。

今戦っているルームの高さは4、5Mくらいであろうか、11階層  
にしては小規模なルームの天井に驚異的な跳躍力で張り付くように  
膝を曲げた足を合わせた後、思い切りミノタウロスの方へと天井を蹴  
り突き進む。

勝負は一瞬だった。

「はああああああああ!!!」

落下していることも加わり、ミノタウロスですら視認するのがやつ  
との速度で光の剣を振り下ろす。

慌ててミノタウロスが大剣でいなそうとするものの間に合わず、未  
知の力をその身に受けることとなる。

「ヴオオオオオオオオ．．．」

そしてその斬撃は見事、ミノタウロスの肩から股にかけてを両断した。

黒い煙となつてミノタウロスは消え、ゴトリと大きな魔石と元々冒険者のものであつただろう大剣だけが地面には残された。

「勝つ．．．た．．．？」

その事を認識した瞬間に光の剣は弾けるように消え、バタリと後ろに仰向けに倒れる。

戦い始めてどれくらい時間が経つたのかは分からない。

Lv. 2の頂点であるミノタウロスの強化種、少しでも不運が起きていれば倒れているのは自分だつただろう。

乱れていた息も落ち着いてき、はあ．．．と、安堵の息を吐く。

争う者がいなくなり、静かなルームに響き渡つた。

上体だけ起き上がらせ、ポーチからポーションを取り出して飲み干す。

戦闘の間を感じていた背中の中熱も今は何も無かつたかのように、急に疲れが押し寄せてきた。

ミノタウロスがいなくなつたとはいえ、十一階層はベルにとって決して余裕のある場所ではない。

モンスターが来ないか警戒しながら少し休憩して立ち上がり、地上へ戻るために歩き出す。

そこで、ルームの外から二つの影が現れた。

思わず身構えるが、それは見知つた人物だつた。

「フィンさん、ガレスさん！」

歩いて来た二人はベルの元までたどり着くと、笑みを浮かべた。

「．．．お疲れ様、無事でよかつたよ」

「がっはっはっ！よく頑張つたの！」

肩をポンと叩くフィン。頭を乱暴にガシガシと掻き回すガレス。

心が、暖かくなった。

思わず泣きそうになるが、自分も笑みを浮かべて上へと三人で歩き出す。



(全く、素直じゃないなあ)

そんな中、ちらりと道の先を見て先程まで一緒にいた青年の姿がないことに苦笑するフィンだった。

オラリオにベルの名前が広く知られる日は、近い。

## 魂の昇華

ミノタウロスとの激戦の帰り道、ベルとフィン、ガレスは会話混じりに上へと歩みを進めていた。

「そういえば、どうしてここが？つて、もしかして……」

「うん、思っている通りだと思うよ。ベルが逃がした冒険者……名前は聞いてないけど、彼が助けを必死に探してくれたおかげで僕達のところへ報告が届いたんだ」

「ベルも大概じゃが、その男もなかなかの阿呆よの！低階層とはいえ、一人でダンジョンを駆け抜けていたんじゃないからな」

そんな二人の説明にその時のことを思い出す。

まだそう時間はたっていないのに、とても前のように感じた。

『すぐ、助けを呼んでくるからな！』

結果的に自力でミノタウロスを打ち破ったとはいえ、その言葉を違えずに口約束でしかないそれを誠実に守ってくれたという事実が温かくなる。

「……帰ったら、お礼言わないと」

二人がいることで圧倒的に安全になった帰り道。安心してか小さい声でそうボソツとこぼしたベルだったが、周りの大人二人はただ苦笑するだけだった。

「ベル……どちらかと言うと君はお礼を言う側じゃなくて言われる側だと思うよ？」

「がっはっはっ、やはりベルも阿呆じゃの！それでこそ未来の英雄殿じゃー！」

ガレスが笑い声と共にベルの背中をバシバシと叩くが、叩かれている本人は痛くて若干涙目だった。

「・・・という事がありました」

「ふーん・・・そいつら、ええ度胸やな。潰すか」

「ちよっ!? 僕は大丈夫ですからやめてください!」

そしてその日の夜、ロキの部屋にてそんな物騒な会話が繰り広げられていた。

バス・パレード  
怪物進呈とは言うまでもなくマナーの無い行為である。

過去にはそのことが原因で戦争遊戯ウォーゲームが起こり、片方のファミリアが潰れたこともある。

「・・・まあ、ベルが無事で良かったわ! じゃあ、早速やけど更新しよか!」

「神様? 今、誤魔化しませんでしたか?」

「さ、はよ寝て脱げ!」

明らかに話を逸らすロキに言われるがまま服を脱いでステイタスの更新が始まる。

ロキが指に針を刺し、垂れた血がベルの背に付いた瞬間に背中のロックが外され、更新が始まる。

いつものように文字が動くような音が鳴っていると思ったその時、ガコンツと今まで聞いたことのない音が聞こえた。

「ふう・・・やっぱりやな」

「神様?」

「ベル。背中乗ったままで悪いけど言うで、ランクアップや!」

ロキがやっぱりと言ったのも、強化種のミノタウロスと戦い、勝ち残ってきたこと。常識的に考えて乗り越えられるはずのない壁を自らの力で打ち破って来たベルならばと思いつながらの更新だったからである。

「ランクアップ・・・じゃあ僕は」

「今日から晴れてLv. 2や! 最速記録も更新やで、おめでとうな!」

「・・・! ありがとう! ございます!」

これで少し目標アイズに迫いつく。

一年はかかると言われていたランクアップがこんなにも早く訪れ

たことに驚きながらもこみ上げる嬉しさに笑顔になっているベルを見ながらロキは続ける。

「それで、ランクアップしたから決めなあかんことがあるんやけど…やっぱりここでもベルやったか…」

「えっと、発展アビリティですよ？あとそれはどういう…」

発展アビリティ。ランクアップした際に1つ、基本アビリティである力、俊敏などの他に特殊な恩恵を受けられることができるアビリティが追加されるものである。

候補が多数あがることもあり、発現するものは人によって様々ではあるが、それぞれの得意な技能を伸ばすものであったり専門職へとたどり着きやすくするような物が多い。

そんな中、ベルの発展アビリティ候補は三つ挙がった。

「【狩人】と【耐異常】、これはええねん。【狩人】は短期間に大量のモンスターを撃退が条件やからベルは取れてもおかしくないし、【耐異常】は割とメジャーなアビリティや。でも…【聖癒】ってなんなんや！こんな聞いたことあらへんぞ！」

「ひつ！ごめんなさい分からないです！」

髪をわしゃわしゃとかき回し、ヒステリックにそう喚くロキの姿に若干引きながらそう返事をする。

「字面的に見たら【精癒】と似たもんか？」

「【精癒】？って、何ですか？」

「精神力の自動回復やな。うちの団員にも何人か持つてる子はおるで。しかし、うーむ…」

ここでロキは言わなかったが、アイスやリヴェリアなどが【精癒】を持っている。

暫しそこで考えこむロキ。

背中の上にいるのでベルからは見えないが、悩んでいるだろうことが雰囲気から分かった。

「…ほんまなら、【狩人】も割かしレアな発展アビリティやし、【耐異常】ももはや必須やとウチは思ってる。でも、【聖癒】は多分ベルのユニークアビリティや。どれを取るもベル次第、ウチは何も言わん

！」

「・・・じゃあ、【聖癒】でお願いします！」

「ええんやな？わかってると思うけど一つしか取れへんし、【狩人】はLv. 2の時以外に発現したことは無いで？」

「はい、大丈夫です！もし【精癒】と同じような感じならすごい助かりますし・・・もし違ってても、取らないといけないような気がして」

これまでも精神疲弊マインドダウンで倒れること数回。後遺症がある訳ではないが、ダンジョン内で倒れたことが一度ある以上その可能性が減るならそれに越した事はない。

その時、模擬戦の後にダンジョン外でアイズに膝枕してもらえたことを思い出して若干考えがぶれたが必死に押し殺すベルだった。

「じゃあ、【聖癒】に決めるで・・・っと、よし！これで更新完了やな。そうや、前言つてた精霊の加護のスキルやけど、効果増えとるから確認しといてな！」

暫くしてロキそんな言葉とともにが背中から降り、『ステイタス』を写した紙を手渡される。

(・・・効果が增える?)

そんな疑問と共に紙を覗きこめば、確かに欄が前よりも埋まっていることが確認できた。

ベル・クラネル

L V . 2

力 : I O

耐久 : I O

器用 : I O

敏捷 : I O

魔力 : I O

聖癒 : I

《魔法》

【ホーリー】

・付与魔法

・詠唱式【輝け】

### 《スキル》

リアリス・フレレゼ

（【情景一途】）

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上）

### 【光加護】

ライト・プレス

・戦闘中、魔力のアビリティ上昇

・精神力の消費減少

・—————

一瞬全ての『ステイタス』が0になっていて軽く焦ったベルだが、Lvが更新される度に全ての『ステイタス』がリセットされることを思い出してほっとする。

Lv・1時点でのアビリティは見えない数値となって加算され、その数字が大きいほど例えるなら貯金として後の『ステイタス』に影響してくる。

一般的に言えばAに行ければ上々、Sはごく稀にしかないと考え、計算すればベルはLv・3成り立ての冒険者と同じ『ステイタス』をしている訳ではあるが、それでもやはりLv・3の冒険者と戦い、勝つのは難しいだろう。

戦闘経験の量というのも理由にあがってくるが、やはり一番はLvの差である。

たった1の差であっても、受けられる『恩恵』は明確に違ってくる。そう考えるとLv・3になる直前くらいの冒険者とならない勝負ができるだろう。

基本アビリティの下に現れた聖癒の文字。

発展アビリティの表記を見るのが初めてなベルは何度も嬉しそうにその文字を眺めていたが、暫くするとロキのドアがノックされた。

「おー？誰や？」

「私です。更新をして欲しくて来ました」

「アイズたんか！了解や、とりあえず入って入って！」

「失礼します」

そうして入ってきたアイズの服装は、ダンジョン帰りなのか装備を付けたままだった。

それだけなら問題はなかったのだが、ベルが部屋の中にいたことと、アイズの装備の胸当てで守られていない布部分が際どい所まで破れてしまっていることが小さな事件の原因だった。

「あ、アイズさん!？」

「ベル。どうしたの？あっ・・・み、見ないで」

初めこそベルが何に驚いているか理解出来ておらず首を傾げるだけだったが視線に気づいたのか自分の服装を認識したアイズは羞恥で顔を赤くし、腕を組んで胸元を隠すようにしていた。

「す、すみません！すぐ出ていきます！神様、ありがとうございます  
たああ・・・」

この場合、特に誰が悪いというわけでは無いのだが視線を向けていたのは事実なので負い目があるのかそう叫びながら部屋を飛び出していた。

それを見てロキは笑っているのかと思いきや、アイズを驚いたような目で見ていた。

「あ、行っちゃった・・・？どうしたの？」

「・・・は」

「？」

「恥ずかしがるアイズたん萌えー！」

そう言っただけでアイズの胸元めがけて飛び込んでくるロキを軽く受け流して後ろの壁へと叩きつける。

いくら神とはいえ下界にいる間は身体能力は人とそう変わらない、げふつと声がしてロキの身体から力が抜ける。

やってしまった、と今度は顔を気まずそうに顰めてアイズは回収へと向かう。

そして、壁に叩き付けられたロキはまた別のことを考えていた。

(あの装備、割とあんな感じに破けてるけど皆の前じゃ恥ずかしくなかったことなんてあらへんのかな．．．にひひ、ベルもやるやん！)

うつ伏せに倒れてアイズには見えていないが、地面と密着しているロキの顔には、眷属子の変化を喜ぶ主神親の優しい笑顔が浮かんでいたのだった。

そして起き上がった後、ロキは口を開いた。

「んで、アイズたん。どうやったんや？」

「はい。ウダイオス、撃破完了してきました」

ウダイオスとは、三十七階層モンスター・レックスに迷宮の孤王として君臨しているモンスターであり、その強さは計り知れない。

準ベテラン級の冒険者がパーティーを組んで討伐するレベルのモンスターであるが、それを撃破してきたとアイズは言ったのだった。それも、単独での撃破である。

実際、「ロキ・ファミリア」の精鋭でパーティーを組めばよほどのことがない限り装備が破れるほど苦戦することは無いだろう。

アイズの服を捲りながらロキはふと思う。

(そーいや、アイズたんがベルの『ステイタス』見たってリヴェリアが言っとったな．．．、今回のこれもそれが原因か．．．つと！)

「Lv. 6 来たあああ！」

そんなロキの叫び声が黄昏の館内に響き渡り、真下にいたアイズは予期していたとはいえ、身体をビクツと震わせるのだった。



## 宴

『レコードホルダー最速記録保持者、大きく記録を塗り替え更新！名は「ロキ・ファミリア」所属、ベル・クラネル！』

そんな張り紙がギルド本部内の掲示板に張り出された。

一緒に載っている似顔絵には白い髪、赤い瞳が特徴の少年の顔が描かれている。

ランクアップまでにかかった期間はおよそ二週間。

今までの最速記録がアイズの一年であったことを考えると劇的な更新と言えるだろう。

事実、オラリオの街中は新しい最速記録保持者の話題で持ちきりであり街中で彼の姿を見つけるとざわめく人が見られたりもする。

しかしそんな中、もう一つの話題がオラリオでは広がっていた。

少年の張り紙の横、掲示板に張り出されたもう一枚の張り紙にはこう記されていた。

『「ロキ・ファミリア」所属、アイズ・ヴァレンシユタイン。Lv. 6  
へ！』

「本当に申し訳なかった！」

黄昏の館の前、二柱の神が顔を合わせていた。

腕を組み、目を薄く見開いているのはこの館の主である道化神ロキ、そして彼女に対して地面に正座して頭を下げる、いわゆる土下座をしているのは武神タケミカツチである。

その後ろでは数人の冒険者たちが同じように土下座をロキ達に向けていた。

ロキ達、と言うのも今現在、ロキの後ろには数人の幹部とベルの姿

があった。

そう、彼らこそがダンジョンの中でベルにミノタウロスをなすりつけた冒険者達本人と、その主神であったのである。

ダンジョン内での出来事を良心に耐えかねた団員がタケミカツチに報告した事で、タケミカツチが激怒して関与した団員を連れてロキの元を訪れてこのような事になっている。

相変わらずの義理深さだと心の中で嘆息するロキだったが、その目は一人の男の冒険者へと向けられていた。

「あんたらの気持ちは分かったわ。それについてはウチの子の気持ち次第や。・・・で？そこにおける自分は頭も下げんところちジーツと見とるけどなににきたんや？」

「・・・俺は、自分の判断が間違っているとは思っていない」

「ほー？」

「・・・ツ！桜花！」

タケミカツチに桜花と呼ばれる冒険者は腕を組んだままそう言うてのけた。

そんな彼に対する「ロキ・ファミリア」の面子の視線は鋭くなっていく。

気圧され、少し後ろに下がったがそんな視線を受けてなお態度を変えないのは度胸があると言えるだろうか。

「・・・俺は見知らない奴と仲間なら仲間の命を取る」

睨みつけるように「ロキ・ファミリア」の面子相手にそう言い切った。

確かに自分の知り合いの命を優先したり大切に思ったりする事は間違いとは言えないだろう。

だが・・・

「それは今、この状況でウチらに言う事か？」

空気が凍った。

その場にいる全員が察した、この神は激怒していると。

小さな身体から発せられるプレッシャーはやはり神のものか。

大きく、重い。

「何を勘違いしとんかしらんけど、ウチらが何も言わんのはベルが気にしてないって何回も言ってきたからや。あの人たちは悪くないってな。それをなんや？頭下げること出来んのか自分は」

「か、神様・・・ほんとに僕は別に・・・」

「黙っとけ、兎野郎」

「べ、ベートさん・・・」

そうベルを乱暴な言葉で止めたベート。

あの豊穰の女主人での事件以来、若干ベルはベートを苦手としていた。

ベルと同じようにLvの低い団員には雑魚と罵りの言葉をぶつける場面を何度か見ていることもあり、強さ至上主義という考えが見え透けるベートの行動をよく思っていないなかつたという事もある。

だがしかしどうだろうか、そんな弱者を虐げるような素振りを見せているベートも今この瞬間はその端正な顔に怒りを貼り付けている。

「自分の仲間や？ウチらの家族殺しかけといてようそんなこと言えるな？あ？」

「・・・」

「あんまウチらのこと舐めとんちゃうぞ。もうええわ、帰れ」

「・・・お前達は先に帰っている。私は少し残る」

そう冷たく言い放つロキ。

帰り際、当事者達がもう一度ベルに対して謝っている場面が見られたが、結局桜花と呼ばれた冒険者は最後まで謝ることは無かった。

「ロキ・ファミリア」の面々も同時に帰され、残ったのはベルと二人の神のみ。

そして、その場に残った男神は「タケミカツチ・ファミリア」の団員達が帰った後に再びベル個人に対して頭を下げた。

「謝って済まされるものではないとは解っているが、本当に済まなかった！」

「だ、大丈夫なので頭をあげてください！」

「いいや、謝罪はちゃんと受け取っとけ。下手したら死んでたかもしれんのやぞ。全く・・・命張った結果があんな態度なんやって考える

と腹の一つも立つやろ」

「い、いえ。ほんとにそこまで気にしてないですけど……」

「はあ……流石はベルってところか？タケ、この子はこう言っただけでウチらは許さへんからな」

「ああ……桜花には、またしつかり言っておく」

「じゃあベル、先に帰っといってくれるか？」

「分かりました！」

そうしてベルも館の中へと戻り、二人の神だけが場に残された。

「タケ、あの桜花つちゆう奴、ちゃんと今回の件の重大さについて教えたらなあかんで」

「ああ、ここに来る前に言い含めておいたんだが……まさかあのような態度をとると思っていなかった。気分を害してしまつて済まない」

「ベルがあそこまでうちら止めにかからなかったらファミリア潰しも視野に入ってた……とかは理解出来てないんやろな、まだまだ青いな……」

「ベル君、だったか。真つ直ぐでいい子だな。私が言うのもなんだが甘すぎると思うが……」

「全くその通りやわ！さて、ほんじゃウチも戻るわ。また東方の美味しい酒、よろしくな！」

「ああ、また今度持つていこう。では私も失礼する」

こうした会話が二人の間で交わされていたことは誰も知らない。

ファミリア潰し、いわゆる『戦争遊戯』の存在を仄めかした時にタケミカツチが冷や汗をかいていたことは言うまでもないだろう。

そして、時間は進みその日の夜。

「さて、ほんじゃアイズさんとベルのランクアップを祝つて……乾杯

！」

『乾杯!!』

ロキの音頭と共に宴は始まった。

場所は当然のように豊穡の女主人。いつもは様々なファミリアの冒険者達が入り混じっているこの店も今日は「ロキ・ファミリア」の貸切で遠慮なく注文をしている様子が窺えた。

ベルとアイズのお祝いの宴、と言ってもそれをずっと意識している者はほとんどいない。

皆好き好きに食事をし、酒を飲み、あわよくば恋でも……つまり、なんでもありなのである。

がやがやと騒がしい店の中で主役であるはずのベルは少し端の方で胡座をかきながら食事を摂っていた。

無理もない、基本的にここに来る時はいつも一人である。その際はシルと話していたりすることが多いのだが流石に今日に限っては仕事で忙しそうにしていた。

要するに、慣れていないのである。こういった風に多くの人と食事を摂ることはほとんど無い。朝は早すぎてあまり人も居ず、昼はダンジョン内で軽く食事、夜は一人で店に来ることがしばしば。

その際に同じ「ファミリア」の団員と仲良くなったりもしたが、それでも数人である。

(……もしかして、相当孤立してるんじゃない?)

こういった宴など大勢で食事をしたりすることが初めてである上、元来ガイガイと話しかけに行くタイプでもないベルは若干の焦りを募らせながら相変わらず美味しい食事とお酒を誤魔化すように味わっていた。

そんなベルに歩み寄った人物が一人。

「……皆と混じらないの?」

「アイズさん……。いえ、その、何となく慣れないというか……。見ているのは好きなんですけど……」

「私もあんまり得意じゃない……。隣、座ってもいい?」

「は、はい!どうぞ!」

そう言つて隣に正座で腰を下ろした。関係はないが相変わらず姿勢は綺麗だった。

先程までロキにセクハラをされたりティオナにもみくちやにされているのをこっそり見ていたベルとしては、得意じゃないというアイズの言葉は意外だった。

「そうだ、遅くなつたけど、ランクアップおめでとう」

「あ、ありがとうございます！アイズさんこそ、おめでとうございます！……Lv. 6なんて、凄いですね」

「ううん、まだまだだよ。それに……ここまで上がるのにいっぱい時間がかかっちゃつたから」

そうアイズは言つたが、決してそんなことは無い。

Lv. 6の冒険者とは現在のオラリオの頂点、人数も少ない。

アイズが到達するためにかかった時間も圧倒的に少なく、また若い。まだ少女と呼ばれる年齢なのを考えると異常な成長速度、強さだろう。

そして何よりベルが残念に思っている事がある。それは、せつかく詰まつたと思つた差が同時に離されてしまったことである。

しかも、レベルは勿論上になればなるほど上がりにくくなってくることを考えるとむしろ開いたと考えてもいいだろう。

『強くなつたら振り向いてくれるかもしれない』、というロキの言葉も相対的に見れば何も変わっていない現状である。

もつと頑張らないと、と心の中で決心しているベルだった。

……無論、周りの冒険者にはアイズのLv. 6到達よりもベルの記録更新の方が異常に映っているのは言うまでもないだろう。

そうしてしばらくたわいな話をしていると、アイズの視線がベルの手に注がれていることに気付く。

「……どうかしましたか？」

「ん、何飲んでるのになつて」

「これですか？ミアさんによると、オラリオじゃ無いところから輸入されてきた遠いところのお酒らしいです」

小さめのカップの中に入っている液体を揺らしながらそう答える。

ついこないだまではミアに勧められた慣れてない人向けの弱いお酒を飲んでいたのだが、最近になって色々なものに手を出して結果的に今はこのお酒に落ち着いている。

琥珀色の透明度が高いもので、綺麗な見た目に加えてアルコールも地味に高い。

普通の人なら慣れ始めには遠慮したいレベルのお酒だが、ベルは普通に飲み、なおかつ美味しい、気に入ったと言ってミアを含めた豊穣の女主人の店員を驚かせたものだった。

余談ではあるが、ベルは今まで酔っ払ったことは無い。

「・・・美味しい?」

「はいー甘さと若干の苦さが混じったこの味がなんとも・・・」

「少し、飲んでみたい。・・・貰っていい?」

「はい、どうぞ・・・」

嬉々として酒の美味しさを語るベルに羨ましくなったのかそう言ったアイズ。

運良く使われていないコップが近くに置いてあったのを見つけてお酒を注いで渡す。

新しいコップに注ぐところに恥じらいが見える、微笑ましいと言われるその様子だったが少し離れたところから絶望混じりの声が飛んでくる。

「べ、ベル!止め!飲ませたらアカン!」

「え?」

アイズが逃げ、女の団員にちよつかいをかけていたロキ。

そろそろベルにも絡み出そうと立ち上がり、非難めいた視線を受けながらもベルを見つけた所で酒に手をつけるアイズに気付いたのである。

しかし、時すでに遅し。

アイズの喉がどこか艶めかしく動き、ベルの注いだ酒は既にコップの中から無くなってしまっていた。

「・・・?」

先程までのお祭り騒ぎはどこへやら、緊張と静寂に包まれた酒場に

何事かと周りを見渡すとなんとフィンまでもが冷や汗をたらし、警戒した顔を向けている。

自分とアイズを囲うように輪がだんだん広がっていき、空白地帯が出来ていた。

「ふみゅ……」

そんなベルにとっては謎の雰囲気に包まれる中、気の抜けるような声がすぐ隣から聞こえた。

振り向いてみると、顔を少し赤くしたアイズがふらふらと頭を揺らしながらこちらを見ていた。

それを見たロキ達の顔に貼り付いた絶望が深くなったように見えた事から、この状況の原因はアイズにあるという事に気付く。

足を崩し、四つん這いの体制で隣にいたベルの方へと近づいて来る。

「ア、アイズさん？どうかしましたかっ!？」

ベルの言葉の最後が思い切つきり裏返し、動揺したようなものになった。

原因はもちろんアイズなのだが、とつた行動があまりに衝撃的だったのだろう。

「……」

多くの団員達が見守る中、ベルを嗅ぎ続けるアイズ。

驚きで両手を後ろについて若干反っているベルの胸元に顔を近づけて無言で鼻を動かし続ける。

(あ……いい匂い……)

目の前にあるアイズの髪から流れてくる香りに幸せな気分、もとい現実逃避をしているベルだった。

思考を放棄したベルと、そのベルに顔をうずめるアイズ。

周りの団員達からすると、非常に意味がわからない状況となった。

そんな中行動を起こした馬鹿が一人。

「なんやアイズたん、酒癖治ったんかぐへへ……ベルじゃなくてウチの匂いも嗅いでくれてええんやでえ〜?」

そうおっさんの様な言動でにじり寄ってくるロキ。



酒癖とは何か、全く分かっていなかったベルだが直後に片鱗を見ることになった。

「・・・【エアリアル】」

「スベスベお肌にもちもちグフツ！」

ベルの胸元から風が巻き上がり、ドゴツ！と何かが壁にぶち当たる音がした。

放心していたベルも思わず振り返る。

壁から生えているのは朱色の髪。

「見れば酔っているのは分かるだろうに・・・回収しろ。アイズを刺激しないようにな」

自身も酔っていたためか判断が楽観的になっていた自らの主神のため息を吐きながらリヴェリアがそう命じているのを聞いて少し現実に戻る。

「あの・・・神様、大丈夫なんですか？」

「ん？ああ、大丈夫だろう。前はもつと酷かったからな。」

「前・・・っていうのはアイズさんが？」

「ああ・・・あれは正直酷かったな、跨ってロキの鳩尾を何度も殴つて・・・」

リヴェリアですら顔を青ざめている事が更にベルの恐怖心を募つた。

自分は大丈夫なのかと震えながらまだ胸元にかかる重みに目を向けてみると、先程主神を魔法で吹き飛ばすという暴挙に出た影は微塵もあらず。すやすやと寝息を立てていた。

「えつと・・・これは・・・？」

「前そんなことがあったからアイズに酒を飲ませるのは禁じていたんだが・・・。ふむ、今日これから何もなければベルがいる時は許可するでしょうか。もちろんその時はベルが面倒を見るようにな」

「へっ!?!」

「今の様子だとアイズを刺激しない限り暴れることはないだろう。ああ、ベルに限ってそんなことをしないとは思いが酔わせて手を出すなど以ての外だぞ?」

「そ、そんなことしませんって!」

「ふふ、分かっているさ。出来るだけ控えるようにはさせといてくれ」  
「りよ、了解です!」

そう言つてロキの処理に向かうリヴェリア。

何も無いことが分かったのか周りも段々騒がしさを取り戻していき、アイズのことを気にせず宴へと戻っていく。

「があああつ!」

「アンタら!そこのアホ狼抑えときな!また店が潰れちまう!」

「は、はいい!」

「すみませんベートさん!失礼します!」

「離せてめえら!あいつは許せねえ!」

そんな叫び声が少し離れたところから上がっていた。

そんな恨みのこもった声にも気付かずに胸元で寝息をたてるアイズにただただどうすればいいか悩むばかり。

蕩けるような顔で眠っているのを目の前で見せられ、純粋なベルは顔を赤くするばかり。

もちろんそんな状態で食事が取れるはずもなく、宴が終わるまでの数時間、ベルは眠るアイズを胸元に置いたまま過ごすことになる。

初めは照れてあたふたとしていたが、終わる頃にはどこか嬉しそうにしていたのは気の所為では無かつただろう。

## パーティー

『デナトウス  
神会』

普段下界に降りている神が天界へと集まり行われる話し合い、もとい軽い食事会のようなものである。

全員ではないにせよ、多くの神が集まり決め事をする際に開かれる。

そして偶然定期的に開かれている神会の数日前にランクアップしたベルの二つ名もまた、ここで決められようとしていた。

「じゃあ、この子の二つ名『卍黒騎士卍』で決定でいいな！」

「二二意義なし！」

そして、この場所ではある意味センスの溢れる痛々しい二つ名が決められることもしばしば。

自分の眷属にその二つ名をつけられることを止められなかった神はその場で頂垂れることとなり、もはやそれは恒例の光景となっていた。

「じゃあ次……おつ！噂のロキの所の最速記録保持者くんじゃないか！では皆、案を出してくれ！」

「じゃあ……」

そうして次々と発言が飛び交うが、その中にふざけたものはない。

ロキに限らずではあるが、規模の大きい「ファミリア」の眷属に対しては露骨に変な名前をつけるものは少ない。これもまた恒例の光景であった。

もちろん全てに当てはまるわけではないが、ロキの場合はほとんどがまともな二つ名がつけられていた。

そして、ベルの二つ名について議論が始まってから十数分

「じゃあ、これで決定でいいな！ロキもこれで問題ないか？」

「うむ！皆、うちの子にええのつけてくれてありがとうな！」

ここで確認を入れるあたりやはり恐れているのが出ているが、それを責めるものはいなかった。



そして神会が行われている時、ベルは前から約束していた「ファミリア」内のLv. 2パーティーに混じりダンジョンへと向かっていた。

メンバーはベルを合わせて五人。男性三人に女性一人のメンバーに混じって現在いるのは十二階層。

上層と中層の境目であり、深く、濃い霧が発生していて五メルほど離れるとお互いの姿が認識し辛くなるほどであった。

「それにしても、ベルはすごいよな〜！こんな短期間でランクアップなんてよ！」

そんな中、まだ視界が安定している場所でのパーティーは小休憩を取っていた。

それでも見えずらいため、二組に別れて警戒しながら昼食を摂る。

同じ組に分けられた二人と会話を交わしながら食べる食事は、いつも一人で食べている時と比べて楽しいと感じた。

元々、パーティーを組もうと言われたきっかけも豊穣の女主人で食事を摂っていた時にベルの目立つ容姿を覚えていた目の前のテンションの高い男一人名をノーツと言う一に声をかけられた事だった。

「全くだな。俺らも頑張っただけだがその頃にはパーティー組んで一桁の階層でひーひー言っていたぞ」

そして渋い声でそう言ったのはノーツの隣にいるレグス。

二人共Lv. 2になって二年目のベテランであり、ダンジョン内での豆知識などは聞いていても勉強になる。

ノーツはその性格によらず死角からの一撃離脱を主とした戦い方で、レグスは大柄な体と高い耐久を使い敵を引きつけるいわゆる盾職。

もう一人の男が大剣で敵を薙ぎ倒すメインアタッカー、女が魔法での支援回復というバランスの良い構成だった。

連携の取れたパーティーに混じって見てみると、仲間の存在は大きいということが良くわかった。間違った道を進もうとすれば注意してくれるし、戦闘中も支援が飛んでくるのはありがたかった。

これはエイナもパーティーを組めというはずだと納得していた。

「はは・・・ありがとうございます！でも、ノーツさん達と一緒に潜つてると今まで知らなかったことばかりで新鮮です！」

「まあ、俺らもダンジョンに入り出して長いからなあー、期待のルーキー様にそう言って頂けるたあ光栄だ！」

その後少し会話した後見張りを交代してあとの二人が休憩に入る。少ないところを選んではいえ寄ってくるモンスターと戦いながら、再び感心エルしたような視線を一緒に二人は向けてきた。

「やはりすごいな。とてもLv. 2になりたてとは思えない」

その言葉の通り、ベルの動きはそのパーティーの中でも抜きん出ていた。

普通の状態でも相当であるが、魔法を使い光をまとっている時のスピードは彼らの目では追うのはなんとかできても非常に苦労するものだった。

今までベルは自分よりも高いLvの人ーアイズが主であるーとしか組んだことがないため、同じLv帯の動きを見たことがなかった。

そのため自分の動きがいかに異常かをあまり理解していなかったのだが、普通の人に見られればどう思われるのかというのをレグスは代弁していた。

「・・・そんなことないですよ、さつきこけたし」

そんな言葉にベルはむくれながらそう言った。

それを見たノーツは思い出すように笑いながらベルを励ましにか  
かる。

「はははーまだ気にしてんのか？あんなんLv. 2になった時の恒例  
行事みたいなものだから気にすんなって！」

冒険者はLvが上がると身体能力が跳ね上がるのは広く知られて  
いる。が、そんな急に身体能力が変化すれば当然思っているように動  
かないという事がある。

Lv. 3以降からはみんな気をつけるようになるのだがそんなこ  
とを知る由もない

そして違わずその被害に遭ったベル。

元々速い敏捷を生かして戦っているベルは顕著にその影響が現れ、  
加速した瞬間、自分の動きに頭が対応しきれずにつんのめってこけ  
た。

その勢いのまま壁にぶつかり、いきなり支援担当の女から傷を治す  
魔法を使ってもらうことになってしまったのだった。

しかもそれがノーツとレグス以外の二人とのファーストコンタク  
トであり、その清々しいまでのこけっぷりに回復されている時も少し  
笑われていたのが記憶に新しい。

「はは、むしろ話しかけやすくなったから助かったよ。期待のルー  
キーって言うから緊張してたのにいきなりぶっ飛んで・・・くく」

「あんまり笑ってあげると可愛そうなのです、ぶぶぶ」

「おお、休憩は終わったか？じゃあ十三層に出発するか！」

「ディーンさんもサシャさんも笑わないでください！」

涙目でそう突っ込むベル。

ディーンの言う通り、はじめはお互いに緊張してろくに話せていな  
かった二人とベルだったがその出来事をきっかけに軽口を言い合え  
るような仲にまで発展していた。

そんなこともありながら、持ち物の中から火精霊サラマンダーウールの護符を取り出し  
羽織る。

これは、ヘルハウンドと呼ばれる狼型のモンスター対策である。

口から炎を吹き出し、多くの冒険者達を焼き殺してきたそのモンスターに付けられた異名は放火魔<sup>バスカウイル</sup>。

その吐き出される炎に対応出来ない冒険者は多いため、皮肉なことに情報は多く知ることは容易かった。

ただ、火精霊の護符は少し高くベルの財布に打撃を与えたのは言うまでもないだろう。

そして、十二階層の階段を降りきったところでノーツが周りを警戒しながらも笑顔でベルに向かって振り返る。

「さあ、ここから中層だ！今まで以上に気を引き締めていくぞー！」

初の中層挑戦であるベルの緊張を解そうとしてくれているのか、軽い口調でそう言った。

無意識に力んでいた身体の力を適度に抜き、それを見て再び笑ったノーツに続くように十三階層への階段を降りていくのだった。



「そーいや、Lv. 2になったなら二つ名がつくんだろ？もう決まってるのか？」

「いえ、今日神様が決めに言ってくれてるらしいです・・・っと！」

その後、ベルも予習をしてきていたことやノーツ達の経験のお陰もあり何の問題もなく十五階層へと辿り着いた五人。

「はあっ！」

レグスと同じように前へ出てモンスターを切る。

ミノタウロスとの戦いで学んだ天井や壁を使つての三次元機動。

これに関してはまだ魔法を使っていないと出来ないため戦闘中は常に魔法を発動することになる。

強化種ミノタウロスの魔石を売却して得たヴァリスで購入した新しい白銀のナイフ。

ミスリルと呼ばれる魔法の精神力の伝導率が高い素材で作られたそれは、付与　魔法と非常に相性が良かった。

前と比べても切れ味が良く、頑丈でそう軽く折れるものではない。魔法を刀身へと乗せれば剣自体が淡く光を纏うようにもなった。

余談にはなるがミノタウロス戦以降、ベルが魔法を使って物質を具現化できたことは無い。

いくらその形を想像してみても手元に集まってくるだけであの時のように剣として使う事は出来ずじまいであった。

「ベル、後ろ・・・」

その声よりも先に背後から迫ってきていたヘルハウンドに振り返りざま腰を落とした低い一撃。

飛びかかろうと空中にいたヘルハウンドは無防備な腹部を裂かれて魔石を残し、消えていった。

パーティーメンバーのカバーにも入る余裕を持ちながらモンスターを倒しているとベルはふと違和感を感じた。

(・・・精神力、減ってる?)

中層に入る前は魔法は基本的に使っていないなかったので分からなかったが、今現在かなりの時間使用していてもなんとなく感じる事が出来るようになってきた精神力の減りというものをあまり感じなかったのだ。

まるで、使ったそばから回復していくような・・・

(・・・【聖癒】か!)

少し考えてその結論へとたどり着く。

ミノタウロス以前より変わった点といえばそこしかない。

・・・そんなことを考えているベルだが、ロキが同じ系統かと予想していた【精癒】とはそこまで大きな効果を持たない。

戦闘中、精神力が使用したそばから回復していくという効果ではあるがその回復量はわずかで、長時間戦い続けることでその恩恵が出てくるといふものであり今のベルのように顕著に実感できるものではない。

この後帰ってロキに報告することになるが、その時に告げられる。



【聖癒】は【精癒】の上位互換である、と――

「お疲れ様、みんな」

十五階層も中盤に差し掛かった頃、ディーンがそう口を開いた。

「確かに疲れたのです。もうそろそろ帰りたいのです」

「そうだな、そろそろ皆のポーチもいっぱいではないか？」

珍しいことに、ノーツ率いるこのパーティーにはサポーターがいない。

サポーターとは、狩りで得たドロップアイテムや魔石を戦っている冒険者の代わりにが運ぶ役割の者のことだが、冒険者からはあまりいい印象を得られていない。

戦わずに金を得る寄生。

そんな風に思われていることも多い職業である。

ではノーツ達もそうなのかとなるが、いうわけではなく、ただ単純に【ロキ・ファミア】の中にサポーター専門の冒険者が少ないということである。

もちろんいいわけではないが、その者たちは冒険者としても高い能力を持っていて、基本的にもっとLvの高いパーティーと一緒に行動することになる。

そう言った理由で基本的には野良のサポーターを雇うのが下の者の常識となっている。

しかし、今回に関してはベルという興味を持たれすぎる存在が加入している。

なんらかの思惑を持って近づかれるのを恐れてロキが注意してほしいとノーツ達に直接言ったため、落ち着くまでは本人達の持てる範囲という事で決定された。

「じゃあ、一先ず帰るとするか！ 帰りも気を緩めるなよ」

そうリーダーのノーツが指示し、ここでダンジョン探索を切り上げることになった。

「そういえばさっきの戦闘中、どうやって後ろからの攻撃に気づけたの？」

注意が無駄に終わったことよりもずっと気になっていたことを  
デインはベルに尋ねる。

あの時、ヘルハウンドの姿は確実に見えていなかったはずだが、ベルはしっかりと反応した。

「ん〜……。足音、と気配ですかね？」

「け、気配か……。すごいね」

なんでもないようにそう言つてのけたベルに軽く頬を引き攣らせる。

感心するように見えるレグスや呆れているノーツの視線に晒されながら――本人は気付いていない――戻ろうと踵を返したところで、重厚な足音が聞こえてきた。

「おいおい……。最後の最後にこいつかよ……。」

「むむ、めんどくさい」

眠たそうな声でそう言っているサシャも、目だけは真剣に現れた敵の姿を捉えている。

L.v. 2 相当のモンスターの中で最強と言われるモンスター。

「ヴオオオオオア！」

そう、ミノタウロスが現れたのだった。

元々、ミノタウロスは群れで現れるモンスターである。

その常識に違わず、五匹程の群れで現れたミノタウロスのうちの一匹が開幕から『咆哮<sup>ハウル</sup>』を放ち、ノーツ達の動きが固まる。

それを見てニヤリと笑う他のミノタウロス達。

自らよりも脆く、矮小な存在と嘲笑う。

ノーツ達も決して弱いわけでも、ミノタウロスに慣れていないわけでもない。

ただ『咆哮』というものはそう簡単に防げるものではないのである。人間の恐怖心を引き出してくるそれを克服するには相手に恐れな  
い強い精神力が必要なのだ。

そんな中、一筋の光が群れの真ん中を通り去った。

続けて一匹の身体が裂かれ、何が起こったかすら分からぬまま黒い粒子となり消えていった。

「え……今、何が……」

そう呟いたのは誰だったか。

このパーティーの中に、ミノタウロスの『咆哮』にこんなに早く抗えるものはいなかった。

そうなると答えは一つ。

光の先を辿ればそこには今日パーティーに参加したばかりの少年の姿が。

わずかに見える横顔に恐れの色はない。

静寂に包まれる中、仲間が殺されたことに苛立ったように残りの四匹がベルに殺到する。

「……っ！不味い！ベルを助ける！」

一番初めに復帰したノーツがそうパーティー全員に呼びかけたが、振り返った先の光景に圧倒されて足が止まってしまおう。

突撃してくるミノタウロス達を正面からいなし、一際大きくナイフが光ったかと思うと再び一匹が身体を粒子に変える。

風を裂くように振るわれる拳をもとせす紙一重の距離で回避を繰り返す。

多対個という不利な状況でありながらも余裕すら見える戦いぶりであつた。

どんどんと倒れていく仲間を見て焦るミノタウロス。

対してそんな隙すらも見逃さずに攻め入るベル。

天井、壁、時には股下をもくぐり抜けて攻め続ける。

これまでの攻略で慣れた身体能力の変化。

圧倒的とも言える速度でミノタウロスに刃を向けてから数分、そこに残ったのはミノタウロスの落とした角と魔石のみであつた。

「ふう……。あっ！す、すいません！勝手に行動して！」

警戒を終えて振り返ったベルはやってしまったと思つた。

ロキにも言われていたのだ、しっかりパーティーとして行動しろと。

今のは完全に一人での行動であつたことを理解した上での謝罪だったが、それを受けたノーツ達は違う意味で微妙な顔をしていたの

だった。

「ミノタウロスをこんなにあっさり・・・ベル、実はL.V. 3でしたとかじゃないよな？」

「ち、違いますよー！」

「いや、L.V. 3でもなかなか難しいのではないか？うむ、清々しいくらいに規格外さだ」

ノーツももちろん本気で言っているわけではない。

「ん、なんで『咆哮』効かなかったのです？」

そう疑問に思ったサシャに対して推測を口にしたのは、ディーノだった。

「あ、そういえば。ベルのランクアップの時の相手って・・・」

「・・・なるほどなのです」

そう、ベルが相手になっていたのは強化種強化種のミノタウロス。

確かにミノタウロスの群れ自体も凄まじい脅威であり、並みの冒険者パーティーなら苦戦を強いられ、下手をすれば全滅すら考えられる。

それでも、ベルとしてはあのミノタウロスと比べると・・・となつてしまうのである。

「朝から思ってたが、さすがだな・・・つと！とりあえず戻るか！助かったぜ、ベル」

「俺たちだけだったら厳しい戦いになっていただろうな、前のように」「あの時は災難だったよねえ、ノーツが一撃もらった時はどうなるかと思つたよ」

以前にもミノタウロスと遭遇したことがあるノーツ達の思い出話を聞きながら上へと上がっていく。

初めてのパーティーでの攻略。

学べることも多く、ノーツ達はみんな良い人たちである。

談笑しながらの帰り道。

いつもは率先して話しているノーツが真剣な表情で何かを考えているのに、ベルは気付けないでいたのだった。

## 限界の差

「あいよ、30万ヴァリスだ」

「……」

ギルド本部、魔石の換金所にてそんな声が響いた。

驚愕する五人、理由は少し違うが皆目の前に置かれた袋を食い入るように見ていた。

魔石が入っていた大きめの袋を五つ握りしめていたノーツ

「お、おう。ありがとなー」

換金員の早くしろという視線を受けてリーダーであるノーツがまるで危険物を扱うかのように受け取る。

換金してくれたギルド職員に礼を言うも若干詰まっていたのは仕方無いことだろうか。

受け取ったのちギルドからそそくさと退散し、現在黄昏の館のノーツの部屋にて分配が行われようとしている。

「……」

「……なあ、これ」

「うむ……」

再び顔を見合わせるノーツ達。

ベルはパーティーを組むことによつてここまで変わるのかと驚愕していたが、これを五人で割れば一人当たり6万ヴァリスと少し。

これまでで一番稼いだ日が5万ヴァリスほどなのを考えると正直あまり変わっていないのには気づけていない。

ちなみに、Lv.1冒険者五人のパーティーで一日に稼げるのは25000ヴァリスほどであるのを考えるとふざけるなど言いたくない冒険者は大勢いるだろう。

そして、ノーツ達の驚愕はまた違うところへと向けられていた。

「とりあえず分けようか。はい、ベルはこれね」

そう言つてディーンに渡された袋は明らかに他のメンバーに配られたものよりも中身は多かった。

他のメンバーが一人5万ヴァリスなのに対してベルの持つ袋に

入っているのは10万ヴアリスにもものぼる。

そのおかしい配分に文句を言わない四人に異を唱えたのは他でもないベルだった。

「あの一僕だけ多すぎるんですけど・・・」

「うーん・・・確かに僕たちはどんな仕事をしようが人数で割ることはしてるんだけどね、いつもはサポーターさんにも手伝ってもらって20万ヴアリスってところかな?」

「ああ、それも多くてだがな」

「だけど今回はサポーターもいないのに最高の収入が入った、しかもそれを四人で割ってるから今までで一番の稼ぎなんだよ!だから、ベルに残りを貰ってほしいんだ」

実際サシヤなどは大金が入ったお金に頬ずりなどしていてノーツに引かれていた。

他のメンバーも心なしか嬉しそうな顔をしているのが目に入った。が、そう言われてもベルは納得することができなかった。

「で、でも・・・僕一人でもこんなに稼げなかったと思うんです・・・」  
「んー、じゃあ僕たちからのランクアップのお祝いってことで受け取ってもらえないかな?」

そう言われてしまうと断りづらい。

ニコニコと人当たりの良さそうな顔でそうのたまうティーンはベルの性格を理解した上で狙って言っていると言える。

「そんなに渋るなら・・・あー俺らに夕食奢ってくれよ!」

返そうと伸ばしていた腕を引っ込めようとしているベルに気づけなかったのか、ノーツがその声をあげた。

無論向けられるのは白い目。

完全に空気を読み違えたノーツはその視線に動揺するしかなかったのだった。

「ノーツ・・・色々台無しだよ・・・」

「空気読めなのです」

「今のは擁護できんな」

「あ、あはは・・・」

それぞれの意見が飛び交って、その流れのままいつもノート達に通っている酒場へと行くことになった。

お金は結局ベルが払うことになったのだが、その請求のせいで他の人よりも稼げたお金が少なかったことになったと記しておく。

余談ではあるが、その大半はサシヤが占めていた。

(食べたもの、どこに入るってるんだろう・・・)

どちらかという小柄なサシヤを眺めつつ、新しい人体の不思議に直面したベルであった。

▽      ▽      ▽

「ベル、ちよつといいか」

その日の夜、黄昏の館の一角にベルは呼び出された。

もちろん喧嘩を売られたわけではなく用事がある、とノートに言われたためである。

これからロキの部屋へ『ステイタス』の更新に行こうかと考えていたベルだったが後にしようとして予定を変更し、そこまで賑わってはいない場所へと連れてこられたのだった。

「ベル、今日はありがとな。久々にこんなに稼げたし、楽しかったぜ！」

「いえいえ！僕こそ色々教えてもらえて・・・パーティー組むのも初めてだったので楽しかったです！」

笑顔満点でそう言い続けるベルに、ノーツは気まずそうな顔をして頭をかいた。

自分がこれから言うことがこの少年にどんな衝撃を与えてしまうのか・・・、と躊躇した上で再び話し出した。

「ベル、悪いが明日からは俺らとは組まないようにしてくれ」

「・・・えっ?」

驚愕をその顔に貼り付けるベル。

何かしてしまっただろうか。

慣れない集団戦に足を引っ張ったこと、ミノタウロスに一人で突撃したこと、挙げれば確かにキリがない。

それでも、極力乱さないようにはしたつもりであるし、そのために必死で観察し、合わせようともしていた。

これ以上ないほど混乱し、泣きそうな顔になっているベルを見てあわててノーツが付け足す。

「わ、悪いー言い方がまずかったな。別にベルがいて邪魔だったとかそんな訳じゃねえんだ。むしろ戦力的にはいてくれた方が安心できるレベルだ」

じゃあどうして・・・と内心で考えるベルの答えをノーツはすぐに話した。

「でも、ベルは強すぎるんだ。悔しいが、戦闘力だけで考えると俺達の誰よりもな。と言うより、L.V. 2の中でも上の方に食い込めるはずだ」

群れで現れた五匹のミノタウロス。

それをソロで殲滅できる冒険者がそうそういるであろうか。

しかも、ランクアップしたて、それどころか冒険者になって二週間の少年がそれを成し遂げてしまったのである。

才能とは時に残酷である。

持つものと持たざる者、いくら時間をかけても、どれだけ努力しても、人によって限界は変わる。

現に数年冒険者をしているノーツ達にも既に追い付き、追い越してしまつたベルがいるように。

「今日みたいにベルの強さに甘えてちゃ、俺らも成長できないってのもある。腐つてもリーダーだからな、ここはきちんとしておきたいんだ」

楽をするために強い者と組むのと、学ぶために強い者と組むのは本質的に異なる。

自分たちの利益のために、こんなところに止まらせておくべきではない。

才能のある少年、ベルはこれからも成長し続ける。



それを分かっているからこそ、ノーツはベルと組めないと言ったのだった。

「なに、別に今後ずっと会わないって訳じゃねえんだ。俺らも追いつけるよう頑張つとくから、またダンジョン行って、帰りに酒でも一緒に飲もうぜ！そんな時は俺らの奢りだ」

頭をグリグリと撫でながらノーツは軽く笑いそう言った。

拒んだ理由の裏に隠された意味にベルが気付けたかどうかは分からない。

それでも、自分の為を思つて言つてくれていることはしっかりとベルに伝わっていた。

悲しさはある。

それでも、そのノーツの言葉を無下にするわけには行かない。

少し湿った瞳を向け、今言うべき言葉を口にした。

「今日一日、ありがとうございます……っ」

その際、声が震えていたのを聞いたノーツはこんなに強くてもまだまだ子供なんだな、と苦笑いしながら当たり前前のことを思うのだった。

▽  
▽  
▽

「神様、失礼します」

その後、元の予定通りロキの部屋へと向かった。

『ステイタス』の更新と、ランクアップした感想、さらに【聖癒】の効果等をロキと話している時にふと、ロキがベルの僅かな異変に気付いた。

「てことで【精癒】の上位互換になる訳やな……まあ、流石に消費を上回る訳ちやうやろから限界は見極めるようにな……んでベル、今

日なんか悪いことでもあったんか？」

まさか見抜かれるとは思っていなかったもので、内心で驚く。

しかし、長年人と、あるいは神と接してきたロキにとつては見え透けていたのである。

才はあるといえベルはまだ14歳。

心を読むという点においてロキには到底敵わなかった。

ぼつりぼつりと今日のパーティーでの出来事を話し始める。

知らないことをいっぱい学べたこと。ミノタウロスに対して一人で飛び込んでしまったこと。酒場で儲けたお金が消し飛んだこと。

そして、先程パーティーへのこれ以上の加入を断られたこと。

(・・・ほんま、ノーツ達でよかつたわ。もつとこつぴどく断るような奴やったらベルはもつと凹んでたやろうな・・・)

目の前の若干暗い少年を見てそう内心で安堵の息を吐く。

普通なら、その圧倒的な才能、強さに僻んでもおかしくなかっただろう。

自分たちが数年かかったことを、たった二週間程度で追いつかれてしまったのだから。

それを間に受けてなお、ベルにそう諭せたのはノーツ達が大人だったからだろう。

(まあ、ベルの性格のお陰でもあるんやろうけどな)

そつとベルを胸に抱き寄せて頭を撫でる。

柄では無いのは分かっている。が、妙に庇護欲をそそつたのであった。

「神様・・・」

「ん？」

「い、痛いです・・・」

「誰がまな板じゃボケ！」

「違うんです服のボタンがあああ！」

怒り狂ってさらにぐりぐりと抱き寄せるがそれはベルにとって拷問でしかなく額にゴリゴリとボタンがくい込んでいくのだった。

何とも締まらない終わり方であった。



明朝、城壁の上にて。

キキキキンツ、と高速で刃が打ち合わされる。

一般人が見れば、ただ美しい金髪の少女が剣を振るっているようにしか見えないだろう。

ただし、その少女の手元もぶれて見えないという補足はつくが。

何かに当たっている音は聞こえるが、それを視認することは叶わない。

そんな中、少女が一つ大きく剣を振り降ろせばその何かに直撃して白髪の少年が吹き飛ばされながら現れる。

激しく息を切らしている少年。

対して全く息を乱さない少女。

両者の力の差は明確であった。

一歩も動くことなく捌き続けたアイズは剣を下ろし、休憩にしようか、とベルに言った。

これがベルがL v. 2に、アイズがL v. 6になってから初めての朝の特訓となった(前日は調整をするためとアイズが辞退した)のだからお互いに今までとは違う強さに少なからず驚いていた。

水を飲み、一息ついたところでアイズがベルに問う。

「そう言えば、二つ名は？」

「え・・・あー・・・はい、決まりました」

いまいち歯切れの悪い返事をするベルに首を傾げる。

他の「ファミリア」ならまだしも、「ロキ・ファミリア」団員に変な二つ名が付けられるとは考えにくい。

ふとアイズの頭の中に「超凡夫ハイ・ノービス」と呼ばれる男の姿が思い浮かんだ

があれは別、と頭の隅に追いやる。

「どんなのになったの？」

「・・・えっと」

じー・・・と、未だに言い渋るベルに視線を向け続けるアイズ。

正直なところ、知ろうと思えばすぐに拡散されて勝手に耳に入ってくるのだが何故か本人から聞きたいと思った。

必死に顔を逸らしていたベルだが、やがて観念したようにぼつりと声に出した。

「・・・【ホワイト・ファング白い光牙】、です」

・・・どうだろうか、一般的に聞いたとしてもどちらかと言えばかっこいいと言えるのではないか。

オラリオに来て数年、アイズは様々な冒険者の酷い——鳥肌の立つような——二つ名を聞いてきたが、そこまで変だとは思わなかった。

それが、ベルにつけられたもので無かったとしたら、という但し書きは付くが。

ベルの顔をもう一度見る。

(・・・【兎の前歯】?)

ふと頭に浮かんだ言葉は、奇しくもロキが二つ名を決定する時に内心で大爆笑しながら思い浮かべていた物と同じだった。

「・・・アイズさん？」

言い渋っていた事といい、自分にあまり(だいぶ)似合っていない物だという自覚はあるのか先ほどとは逆に無表情で顔を逸らし始めたアイズをジトつと目で追いかけるベル。

始めの頃はともかく、最近になつては無表情を見る方のことが稀なベルは不自然なその行動に良からぬことを考えているのだろうか予想を付けて見続ける。

そんな不毛な争いは、アイズが急に真面目な顔になつて訓練の再開を告げるまで続いたのだった。

そう軽く考えているが、アイズはずっと無表情とは行かないにして、感情が顕著に顔に現れるのはベルと話している時だけであるとい

うことは本人は知らないままであった。

## 新たな道

「おい、【ホワイト・フテング白い光牙】だ」

「あの最速記録保持者って噂のか？・・・思ってたのとなんか違うな」  
ベルが街中を歩くとこれまでのものと加え、そんな声が聞こえるようになった。

その度に隣で歩く人物が無表情になり、それを半眼で見ればサツと顔を逸らす。そんなやり取りがダンジョン入口に来るまでに何度も交わされていた。

そんな二人のやりとりを見て数人が首を傾げていた。

上記の通り、ベルとアイズは一緒にダンジョンへと足を運んでいたのだが、もう誰も何も言わないどころかそれが普通と知っている者ま  
でいる。

視線がちらほらと向けられる中、二人はそのまま奥へと進んでいく。

朝の訓練の後、今日もパーティーを組むのかとアイズに聞かれたことがこの状況の発端だった。

昨日言われた通り、ノーツ達とはもう組めないなのでその質問には否と答えたのだが、その後、丁度いいからダンジョンと一緒に潜ろうということになったのである。

その際、珍しく人の顔色を読んだアイズローベルの落ち込んだ顔が分かり易かったとも言える。ローベルはパーティーを組まない理由を聞かなかった。

そして驚異的なスピードで下へと降りた二人は、ベルの今まで潜ったことある一番下の層である十五階層・・・ではなく十六階層へと降りていた。

もちろんサラマンダーウール火精霊の護符は装備済みで、赤いローブがベルの身体を覆っていた。

それに対してアイズはいつもの装備のままである。

「アイズさんは火精霊の護符はいらないんですか？」

「大丈夫だから行っていいよ」

困惑しながらも頷き、モンスターの群れの中へと駆け出すベルを見ながら詠唱うたを紡ぐ。

「目覚めよ」  
テンベスト

ベルが危惧したように、この階層のモンスターは敵ではないとは言え、ヘルハウンドの吐く炎は脅威であるのは間違いないのだがそれも相性が良かった。

「エアリアル」

その言葉で魔法が起動し、アイズの周りに暴風が吹き荒れる。

無論、全力で精神力マインドを解放している訳では無いが、それでも強力な風が纏われた。

今更だが、二人でダンジョンに潜る際、余程のことがない限りアイズは手出ししないようにしている。

アイズにとって剣を一振りすれば数匹は倒せる程度の存在でしかないが、だからといってアイズがすべて倒してしまっただけはなんの意味もない。

ロキからもあまり干渉しないようにと釘をさされているため、極力傍観に徹するのであった。

そんな理由から少し下がったところにいるアイズに狙いをつけて火を噴こうとするヘルハウンドも、ベルが目敏く見つけて屠っていく。

そんな中、ベルが見逃したヘルハウンドからのブレスがアイズに命中する。が、すぐに風が煙を飛ばし、アイズは無傷のままだった。

そう、炎に対してアイズの全身を風が全身を覆うような魔法は天敵となり得たのである。

避けるそぶりを見せなかったことに若干戸惑っていたベルだったが、

無事を確認するとすぐにモンスターの処理へと向かう。

「輝け」  
クラルテ、「ホーリー」！

同じように光を纏い、さらに加速する。

素の状態でも翻弄されていたモンスター達はあつけなくやられたが、それでも殲滅には十数分の時間を要したのだった。

「はあ・・・はあ・・・」

「大丈夫？」

「単体なら大丈夫なんですけど、数が多くて・・・んくっ」

水を飲みながら魔石を回収する。

パーティーを組んでいた昨日は負担が分散されていたのであまり実感はなかったが、上層に比べて圧倒的にモンスターの数が多い。

それも、一気に来るのではなく断続的に、一定以上のモンスターと戦わなければいけないということは肉体的にも精神的にも疲労させられる。

一息つき、幸い体力的にもまだ余裕はあり、精神力も【聖癒】のおかげで残量は十分。

そう判断した二人は次の階層の階段を探すべく、歩み始める。

「十七階層って、ゴライアスが生まれるところですよね？」

「うん。でも今は多分いないままだと思う」

約二週間前の【ロキ・ファミリア】の遠征。

その際に討伐された階層主であるゴライアスのインターヴァルは同じく二週間。

アイズがまだと言ったように正確にはもう少ししないと湧かないため、階段を降り、十七階層最深部まで辿り着いた時に二人の目に入ったのはとてつもなく広い一つの部屋と、その奥にある次の階段だけであった。

「これが・・・嘆きの大壁・・・」

十Mメートルはあるだろうか。

大壁の名を冠する通り、視界いっぱいに写るそれは、自然では考えられないほど異質だった。

この壁からゴライアスが生まれると言う。どれほどの大きさになるのだろうか。

先を促すアイズに続いて広いルームを横断し、階段を降りるとそこには打って変わった光景が目に入ってきた。

「光？」

目の前に写る美しい自然。



少し奥に見える街。

そして天井から刺す光に、顔を見上げてみて思わず感嘆の息を漏らす。

天井はもちろんある。ダンジョンを降りてきたのだから当然のことだろう。

これまでと違うのは、天井が水晶で覆われていてそれが光を発しているという点だった。

「綺麗だよ。私も、初めて来た時はそんな感じだった」

隣にいるアイズが口をぽかんと開けて立ち尽くすベルを見て少し笑いながらそう口に出す。

口を閉じ、少し恥じらいながら歩みを再開する。

そうしてしばらく進んだ先にあつたのはリヴィラの街と呼ばれる、ダンジョン内に存在する冒険者が集う街だった。

「・・・ポーションが5000ヴァリス!」

「おっ、兄ちゃんいい目してんな。このポーション、実はダンジョン内で見つかった激レアなやつでな・・・って、【剣姫】!」

「行くよ、ベル」

初めて見る光景やダンジョン内にある街。

いくら知識を持っていたとはいえ実際見てみるとやはり何か違うものがあるのか、きよろきよろと辺りを見回していた。

その様子を見て、法外な値段でお上りに見えるベルを引っ掛けようとしていた商人は、そばにいたアイズに遅れてきづき、目を丸くしていた。

慌ててにこやかに手を揉み始める商人を無視するアイズに連れられ、その場を去った。

▽  
▽  
▽

そして、ベルの手を引いて街を進みながらアイズは忠告する。

「ダンジョン内にある安全地帯セーフティだからこの物は凄く高い。でも、質とかは上と大差ないか劣ってる物ばかりだから、騙されちゃダメだ

よ」

十八階層より下に潜って、危機に瀕した冒険者達が帰ってくる中継地点にもなるこのリヴィラの街では、どんな法外な値段でも命を失うよりはマシ。と、購入する冒険者も少なからずいる。

ここにはそんな商売をする商人や、先程のような詐欺師紛いの商人が蔓延っている。

「はっ、はひっ！」

「？」

そう真面目な忠告をしたアイズに返ってきたのは、そんな意味不明な声であった。

疑問に思ったアイズが横を見れば、そこには繋がれた手を意識して真っ赤、かつガチガチになっているベルがいた。

そこでアイズは今の自分たちの状況を認識する。

街中。二人で手を繋ぎ、商店街を歩く。

「おい……あのガキ誰だ？」

「【剣姫】もしかり恋人とかいたんだな……」

オラリオの街でベルとアイズを見たことのない者もここにはいるため、初めて見る組み合わせに驚愕する者が多数。

そして、そんな者達の言葉がしつかりとアイズの耳にも入った。

「……ごめんね、嫌だった？」

「いえいえ全くそんなことありませんですっ！」

明らかに言葉がおかしくなっているベルに思わず笑いがこみ上げる。

そんな会話を続けながら魔法を試すため、トリヴィラの街から少し離れたところへ歩みを進める。精神<sup>マインドダウン</sup>疲弊の危険性が少しでもあるため、できるだけ安全なところという理由から十八階層でする事になったのである。

(……意識しちゃってるのも、僕だけなんだろうな)

ベルを見てくすりと笑う、そんな余裕のある態度を見せたアイズに

ベルは内心で少し落ち込む。

しかし、ベルの顔がしばらくしても少し赤いものと同じように、アイズの耳も少し、ほんの少し赤く染まっている。

そんな少女の変化にベルは気付いていなかったが、目的地に着くまでの間、二人の手は繋がれたままであった。

▽  
▽  
▽

「何か用かい、ロキ」

同時刻、黄昏の館の一角でロキとフィンが顔を合わせていた。

「いや、すまん急な急に呼び出して！ちよつと考えて欲しい案件があるんや。ベルを、『遠征』に連れて行けへんかと思つてな」

急な主神からの提案。いや、要求に思わず眉を寄せるフィン。

「・・・遠征に？確かにベルはLv. 2になつたけど、流石に早過ぎるんじゃないかな。前衛ならせめてLv. 3になつてもらわないと」

「いや、それがやねんけどな・・・」

そこで聞かされた昨日のパーティーでの顛末はフィンをも驚かせるに値したらしく、少し目を見開いているのがうかがえた。

ベルが既にミノタウロスを複数相手取ることができていると言う点。

Lv. 2の中でもベテランと言えるノーツ達に言われたことを口キから聞かされて、再び思考する。

「・・・そう、か。そうだね、少なくともその実力があるなら遠征に付随する資格はあるね。・・・ベルは今どこに？」

「アイズさんとリヴィラ行くつて言つてたなあ」

「ふむ・・・じゃあ、帰つてきてから話すことにしよう。その件、承つたよ」

「ほんまか！助かるわ、いつつもありがとうな！」

そんな会話が自分の預かり知らぬところで交わされていたとは、現



「……いや、まだ試してないです」

ちらりと背にある呪剣を見る。

付与すれば毎回のように精神力が吹き飛んだこれに付与するのをベルは少し恐れていた。

精神疲弊は死に繋がると口を酸っぱく、これでもかというほど酸っぱく言われているベルからすれば、あまり付与したくないというのも頷けるだろう。

そういった理由を告げるとアイズは大丈夫、と今度は頷きを返した。

「倒れてもここならモンスターはそうそう来ないから。もし、誰か来ても守ってあげる」

守ってもらう、の部分で少し苦い顔をしたベルだったがすぐに顔を引き締める。

確かにそれが理由でこの階層を選んだのだった。

想い人の前でみっともなく倒れるのが嫌だった、というのもあったが、覚悟を決めて呪剣を抜く。

「クラルテ輝け」、「ホーリー」

渦巻く光が巻き起こり、辺りを白く照らす。

一旦息を整え、いつもナイフにそうしているように呪剣に魔法を載せる。

「……っー」

驚異的な速度で精神力が減っていくのが分かる。

それでも、Lv. 1の時と比べればまだ耐えることができた。

剣先を上げ、誰もいないであろう森に向ける。

剣を振ろうと構えるベルに呼応するように呪剣は輝きを放つていく。

「はあっ……!?!」

そして振り抜きの瞬間、光は臨界点を迎えてひととき大きく輝き――その灰色の刀身が、メッキが剥がれるように白く染まった。

それと同時にベルに残っていた精神力は文字通り消し飛び、意識は混濁する間もなく一気に落ちた。

そんな中、アイズは動くことが出来なかった。

目で追うのは斬撃の軌跡を辿るように飛んだ光。

その攻撃が遥か上、十五Mは越える天井から生える水晶を削り取ったのだから。

遠くで水晶が地面に落下するよりと前にバタリ、とベルが倒れる音が鳴り、慌てて無事を確認するために駆け寄る。

「・・・精神疲弊、だよね」

心臓に耳を当てるとすっかり聞こえる鼓動に安堵し、再び水晶の方に目を向ける。

幸いその方向に人はいる気配はないため、怪我人はいないだろう。

ちやつかりと膝の上に頭を乗せ、頭を撫でてベルの目覚めを待つのだった。

そして、ベルの横に寝かされている呪剣は、何事も無かったかのよう  
うに灰色の刀身へと戻っていた。

## 準備

(・・・ここは?)

目の前に広がる広々とした草原。  
どこまでも続く地平線にしばし目を奪われる。

(・・・のどか、だけど、どこ?)

このような光景はベルの記憶の中には存在しない。  
物心つく前なら有り得るかもしれないが、生憎ベルは幼少の頃から  
祖父とあの村で育つたと聞いている。

それでも、どこか懐かしいと思える光景だった。

「—————」

急に、後ろから呼ばれた気がした。

振り返ろうとした時、スツと目に写る光景が遠ざかってゆく————

▽  
▽  
▽

「ん・・・」

意識が戻る。

なにか懐かしい物を見ていた気がするが、思い出せない。

そんな記憶の混濁に首を捻る間も無く、心地よい後頭部の温もりと  
柔らかさ、それに加えて撫でられていることから大体の自身の状況を  
察した。

「大丈夫?」

目を開けるとやはり、写ったのは心配そうにこちらを覗く金の瞳。

「は、はい! すいません、迷惑かけちゃって・・・」

上体を起こしてそう謝るベルにアイズは気にしないでとでも言う  
ように首を振った。

・・・ちなみに、膝枕をしている方もされている方も、もはや始め

のように特殊なことをしているという感覚は無くなっていたのだ。慣れとは恐ろしい。

手元に落ちていている呪剣。モンスターのいない十八階層に倒れる前の状況を思い出すべし。

やはり、また呪剣に付与をすることは出来なかったと悟った。

(こんな精神力<sup>マインド</sup>吸われる武器なんて、誰が使ってたんだろう・・・) 遠くから持ち込まれたと言っていたこともあり、もしかするとオリオ以外にもダンジョンがあつてそこで見つかったものなのかもしれない。が、そう思わずにはいられなかった。

体に異常がないか確認していると、前よりも復帰が早かったとアイズに言われる。

これも【聖癒】のお陰かと思い、発展アビリティの有用さに軽く戦慄する。

「その・・・どうなつたんですか?」

「あそこ、見て」

指の先を見れば、かなり大きく削り取られた天井の水晶が目映つた。

良く目を凝らしてみると、何かに切られたように真一文字に傷が付いているのが確認できた。

尖つた水晶も所々平らになつている。

「ベルがやつたんだよ」

「・・・え?」

そう言われるが、ベルはそんな風に剣を振つたつもりはない。というよりも、あそこまで届く攻撃手段を未だ持ち合わせていないというのが正しいだろうか。それとも正しかった、と言うべきなのかは分からない。

じわじわと減る精神力に怯えながらもなんとか剣を振るつた瞬間、その結果を見る前に意識が落ちてしまったのだ。

再び手元の呪剣に目を向ける。

気付けばアイズも同じように呪剣を見ていた。

「・・・この剣、なんなんですかね」



「・・・なんだろうね？」

二人して微妙な雰囲気になる中、ふとアイズが思い出したかのように声を上げた。

「・・・そういえば、たまにオラリオの外から来る付エンチャント与の鑑定も出来るすごい人がいるけど。また、聞きに行ってみる？」

「ぜ、是非行きたいです！」

剣としても、魔法を乗せた時に得られる効果としても凄まじく強いのは確かだが、やはり自分の剣のこと。知れるなら知っておきたい。残念なことに、年に数度くらいしか来ないらしく会うことが出来るのはまだしばらく先になりそうではあるが、それでも楽しみなベルであった。

「・・・ベル、私もその剣持ってみていい？」

おずおずと、といった様子 of アイズ。

実際、呪剣を受け取った時から興味深々で、呪剣を持ちたいとは言っていた。

「ここなら倒れても危険はないし、もしかしたら大丈夫かもしれないよ」

いつぞやの本の時のように身を乗り出して詰め寄られて、思わずたじろいでしまう。

強くなること以外に興味が無かったとロキは言っていたが、自分の好きなものに対しては凄まじい熱意を發揮するらしい、とベルは内心で思う。

ちなみに、最近でも二人はベルの部屋で一緒に読書に耽っている。その後、アイズの説得と言う名の言葉攻めによって、自分は大丈夫だったならアイズなら大丈夫。という謎の結論に至り、呪剣を渡す事を許可してしまうのだった。

流石に勝手に人の武器に触ることは躊躇われたのか、抜き身のまま置いてあった呪剣を一旦鞘に仕舞って手渡す。

すると、驚いた事が起こった。

「・・・少し、精神力が吸われてるような感じはあるけど大丈夫、かな？」

そう、普通に持ててしまったのである。

ずっと精神力が減っていく状況を普通と呼べるかは非常に疑問ではあるが、ベルが言われたように急激に無くなっていく事は無さそうであった。

今のところベルと違う点は、持っただけで精神力を吸われているということである。

「吹き荒れる」

しかし、ここでアイズは迂闊にも調子に乗ってしまった。

剣を鞘から抜き、魔法を詠唱する。

「エアリアル」、……………

しかし、本来なら巻き起こる暴風、それが今はそよ風すら起こっていない。

それに疑問を持つベル。しかし、思っていたよりも事態は深刻だったようだ。

「……アイズさん？」

「……………」

固まったまま動かないアイズ。

そんな中突然、ふらりとアイズが体制を崩して背中から倒れそうになるのを慌てて支える。

倒れてきた勢いで左の太腿の上にアイズの頭が乗ることになっているが、これまでそんな姿を見てこなかったせいか酷く焦ってそれを意識できていない。

呼吸は安定していることを確認すると、倒れた理由に至った。

(精神疲弊……………、やっぱり呪剣のせいだね)

アイズに当たらないように慎重に剣を直し、自身の右側に寝かせておく。

そして、この剣は二度と他の人に持たせないようにしようと心に誓った。

さて、人間誰しも落ち着けば自分の状況を再認識するものである。いつもはされている膝枕、それを今度は自分がしているということに気付くにはそう時間はかからなかった。

規則正しく上下する緩やかな曲線を描く胸部。  
薄いピンク色の形の良い唇。

改めて見ると一つ一つが芸術品のように美しい、顔を赤くしながらベルはそう思った。

いつもは自分がされているように金色の髪を梳くように指を通してば、何のつかえもなく流れていく。

(アイズさんも、こんな気持ちなのかな)

撫でられていると心地良いのは経験上知っていたが、撫でる方もなかなか幸せな気持ちになれると知る。

無音の世界、かすかに聞こえるアイズの寝息を聴きながら時間が過ぎるのを待つのだった。

▽      ▽      ▽

「ベル、少しいいかな」

「？」

その後目覚めたアイズに謝られながら地上へと戻り、『ステイタス』の更新を終えたベルにそう声がかかった。

こうやって黄昏の館内で声をかけられるのは昨日に引き続き二回目である。

あまりいい思い出ではないのでそろそろと振り返れば、フィンがニコニコとこちらを見ていた。

「今度の遠征、ベルにも参加してもらおうからそのつもりで頼むよ」

「はっ、はい！・・・え？」

「次の遠征は丁度三週間後だから、準備しといてくれるかな。何か分らないことがあれば僕とかリヴェリアとかに聞けばいい」

「あ、あのっ」

とんとんと進んで行く話に思わず待ったをかける。

流れで返事をしてしまったが、一つ大きな疑問があった。

「遠征に参加できるのって、Lv. 3からじゃなかったんですか・・・うん、基本的にはそうだよ。でもロキに聞いたんだ、なんでもミノタ

ウロスの群れを一人で倒したらしいじゃないか。それだけ強ければ、大丈夫だと判断させてもらった」

そんなに評価してもらえているとは思っていなかったのか、嬉しさと、戸惑いと。そんな感情が顔に顕著に現れるベルを見てフィンは苦笑いを浮かべる。

「どうする？ やめておくかい？」

「い、いえー！ お願いしますー！」

そうして、ベルの遠征入りが決定したのだった。

そういえば、と付け加えるようにフィンは口を開いた。

「メンバーは途中で絞るかもしれないけど一応深層まで行くから、そのつもりでいてね」

「・・・!？」

かなり焦ったベルであった。

▽  
▽  
▽

「それで、私のところへ来たわけか」

「は、はい・・・まだ全然知らないの・・・」

今、ベルの前には長身の美女が一人。

綺麗に整頓された部屋の中、ベルはリヴェリアに深層までについて教えを請おうとしていた。

最近、中層に入ったばかりのベルは下層以下についてまだほとんど知らない。

リヴェリアも暇な訳では無い上に、自身もダンジョンへと行くためそこまで時間が無かったのである。

しかし、リヴェリアには一つ疑問があった。

「何故、アイズがいる？」

「・・・付き添い？」

「それが必要かは私には理解できないが・・・まあいい。だが、ここに来たからにはしっかり覚えていつてもらうぞ」

「・・・」

こくりと頷くアイズ。

この前まではダンジョンに潜り、強くなる事にしか興味が無いといった態度であったのに今はこの通りである。

どこにどんな場所があり、どんなことに気をつけなければいけないのか。

リヴェリアには及ばないにしろ、アイズはもう既に知っている。

ベルがわからなさそうにしていると横から教える。そんな今までは考えられなかったような様子も見られた。

休憩時間、基本的には休憩せずに今聞いたことをもう一度振り返るベルの頭をリヴェリアの手が覆った。

「何が・・・と言われるかもしれないが、ありがとう。ベル」

「？」

言葉の通りに何が？という顔をするベルに笑みを漏らす。

その疑問を受け流し、リヴェリアは頭を撫でる。

その優しい手つきに思わず目を細めるベル。

「むう……………」

かすかに聞こえたそんな声の発信源を見てみれば、頬を膨らまして恨めしそうに撫でる手を見つめるアイズの姿があった。

「ふふっ……………」

「……………」

「??」

思わず声を出して笑ったりリヴェリアにそれぞれの反応を返しながら、休憩の終わりを時限式の魔道具が告げて、再び講義が始まる。

(本当に、ここまで変わるものなのだな)

アイズが見せた嫉妬の感情。

娘のように想っているアイズのそんな変化に再び顔を綻ばせ、夜は更けていく。

そして、フィンが示した三週間はあっという間に過ぎた。

## 初遠征

時刻は正午、黄昏の館前にて

「さて、各々準備はいいね？じゃあ、出発だ」

ー少し前までは、この光景を外で見る側だったなと内心で思う。周りを見渡せば、まだ参加すること許されていない他の団員たちや、訳あって参加出来ない居残り組の見送りを受ける。

その視線の中に羨望以外の負の感情があつたかは別として、そんな状況は少し落ち着かなかつた。

「どうしたの？」

妙にそわそわしているのを見抜かれたのか、真横に立つアイズに心配そうに声をかけられる。

いつもはフィンやリヴェリアなど幹部組と固まっているはずだったが、今日は当然のようにベルの隣に立っている。

僅かではあるが周りの団員から驚いたような視線が飛んできたが、今声をかけられた瞬間から一箇所から殺意のような物が飛んできているのを感じてベルは身体を震わせる。

「いえ・・・少し、緊張して」

殺気の出どころを探すためきよろきよろと当たりを見回しながらそう返す。勿論、緊張しているという言葉に嘘はないがそれ以上のもを感じた。

そして見つける。リヴェリアの近くの当たりから負のオーラが漂い、怨嗟の音が聞こえてきているのを。

ひいつ、と情けない声を出してしまったのは仕方の無いことだろう。

そんな様子を見て勘違いしたのか、微笑んで頭を撫でるアイズ。

「緊張しなくても大丈夫。初めてでも、皆がいるから」

今のは、少し違うんです・・・と、内心で思っている間に出発式は素早く終わり、他の団員に見送られながら出発する。

今回、遠征に参加している団員は百人をゆうに越える。

そんな集団が街の中を歩いているとなればとても目立つ。

住人や同業者たちの視線を集めながらダンジョンの奥へと、まだベルが見ぬ中層以下へと潜るべく歩みを進めていったのだった。

▽      ▽      ▽

「さて、今日はここまでにしようか。全員、野営の準備を！」

フィンのよく通る声が響き、サポーターから受け取ったテントを各々好きな場所で張り始める。

一日目の夜、辿り着いた十八階層で一度休息を取ることが決まった。

現在ベルが潜っている最深階層はなんと二十三階層。

それを日帰りで潜っていると考えると少し遅く感じたベルがアイズに尋ねてみれば、人が多いから、と考えれば当然の答えが帰ってきた。

様々な職の団員が入り交じるこの遠征では、一番遅い人に合わせる他ない。

とは言っても、厳しい選考を抜けてきた者達なので著しく進む速度が落ちることは無かった。

それでもここで休息を取るには理由がある。

五日かけて臨む深層への侵攻は、層を降りる事に危険性は上がり休める所が少なくなってくる。

安全地帯セーフティポイント以外の場所ではもちろんモンスターも湧くし、休みたいときに休めるとは限らない。

苛烈になっていくダンジョン攻略。行き帰り合わせて十日に渡る遠征では個々の強さはもちろん、団員の体調管理も大切である。

そういった点からまだ浅い十八階層での一時の休息が与えられた。

「・・・美味しくないな」

「これでも美味しい方なんだけど、もっと美味しいもの食べたいよね」

キャンプとして焚き木が数カ所に焚いてあるうちの一つ。

強烈な味と栄養だけが取り柄の携帯食を一人でチビチビと食べて

いると、珍しい人物から声をかけられた。

「テイオナ、さん？」

「覚えててくれたんだ！遠征はどう？」

覚えているも何もテイオナのことを知らない人はそれこそオラリオに來たての人間ぐらいだろう。

ヒリユテ姉妹、二人揃って「ロキ・ファミリア」の幹部であることは多くの人を驚かせ、また名を覚えるきっかけとなっている。

「こんな人数で動くの初めてなので・・・新鮮と言うか、やっぱり慣れないです」

「そうだよね、自分のペースで進めないとイライラしちゃったりとかは私はあつたな」

これまで数度会話をする機会があつたとはいえ、幹部である彼女がこうしてベルと話していることはかなり稀である。

驚くベルとは対照的に、懐かしむようにそう語っていたテイオナは一転、顔をにやけさせた。

「私、ずっと気になつてたことがあるんだ」

「はい？」

「ずい、とベルに身体を寄せて逃さないとも言うようにベルの腕を胸元に抱え込むようにホールドする。」

悲しいかな、腕に伝わってくる感触は薄かった。

「テイ、テイオナさん？」

「どうやってアイズがあんなにデレるようになるのかな、って！」  
近くで見ると形の良い唇を耳元に寄せられて思わず緊張するベルにそう囁く。

このときベルは気づいていないが、周りで同様に食事をしていたり、体を休めるべく数人で共用のテントの中に入っていた者たちの関心はテイオナがそう言った瞬間に二人の方へと向けられていた。

「いやいや！デレるなんてそんなことないですよ！」

「そうかなあ？でも最近よく二人で一緒にいるよね？」

こくりこくり、ベルの死角で頷きを返す団員たち。

実際この三週間、ベルとアイズは行動を共にしていることが多かつ



た。

もとよりその境遇にそぐわぬほどに会話をしていることもあったが、最近ベルが直接アイズやリヴェリアに請うた故にその二人と会う機会が多くなったのである。

つまり、アイズとばかり一緒にいたわけではない。とベルはティオナに伝えたのだが、あまり効果をなさなかった。

それでも言うべきか、これまでのアイズを知っていた者達にとっては考えられなかったアイズのベルへの入れ込み具合だったのである。

そうしてしばらく本人の自覚のない問答を続けていると、話題の中心となっている人物が登場した。

「お、アイズ！ちよつと聞きたいことが「あああああ!!」むぐつ・・・」

同じような質問をするのかと顔を真っ赤にして止めに入るベル。

ここで考えてみて欲しい。いくらベルと一緒に居るとはいえ、アイズ自身のレベルに合った攻略ももちろんしている。

その時お互いに幹部である彼女らが会話をしていないという可能性は考えづらい。

つまり、からかわれているのである。

それが狙いだとも知らずに必死に止めに入る様子は、意図せず周りの団員達の一時の癒しになっていた。

「ベル・・・本とか持ってきてたり、する?」

「あ、一応持ってきてますよ!えつと・・・これでしたよね」

そう言つて近くの鞆の中から本を一冊取り出す。

表紙に剣を掲げる男が描かれたそれはアイズが遠征前まで読んでいたものである。

アイズはベルの部屋で本を読むことが多い為、読んでいる本もそのままベルの部屋に置いてくる。

そのため今このような会話をするに至ったのである。

「ん、ありがとう。ベルは今日はどうする?」

「はい!ちよつとリヴェリアさんに深層のことをもう少し教えてもら

おうと思つて・・・」

フィンに三週間前に遠征への参加を告げられて以来、先程も言つていたようにリヴェリアにダンジョンについての講義を受けていたがなんせダンジョンは深い。

それに加えてダンジョンは下へ進むごとに広くなつてくる。

上層を短い期間で熟知している域まで持つて行けたことからベルの記憶力は優れていることが窺えるが、それでもあまりにも広いダンジョンに勉強が追いついていなかったのである。

「わかつた、じゃあ一人で読んでくるね。また明日」

「はい、おやすみなさい」

手を振り、名残惜しそうにしながらもアイズは自らのテントへと戻つて行つた。

それを尻目にテイオナは思考する。

(じゃあ一人で？あのアイズが二人でが当然のように・・・へく)

実際もう当然のように二人で居ることがあるということは、未だ知られていない。

リヴェリアのところへ行くといい残し、ベルはその場を後にした。

▽      ▽      ▽

二日目の半ばになった頃、中層も終わりに近づく二十三階層。

かろうじてベルも見たことのある光景が目の前に映る。

「正面、来るよ。戦士は前線維持！」

フィンの号令で盾持ちの重戦士が前へ出てモンスターの気を引き、それに合わせて魔道士が後方でそれぞれの魔法の詠唱を始める。

だんだん強くなってくるモンスターに連携を組んで対処をするようになってしたのは少し前。

大人数での戦闘を初めて見るベルにとっては新鮮だったが、悲しいことにベルは待機する組であつた。

普段のベルの戦い方の基本となつてくるのは一撃離脱。ヒットアンドアウェイ

ベルとて決して耐久が低いわけでもなく、普通に打ち合うこともで

きる。

が、黒いコートとダブルナイフに呪剣、回避を主体とした戦い方を  
するベルは現在の戦闘にあまり向いているとは言えなかったのであ  
る。

(なんだか、守ってもらってばかりで申し訳なくなるな・・・)

人のいいと言うべきか、そんなことを内心で考えているベル。

この遠征では団員全員が戦うようになるように指揮官一つまり  
フィンが適材適所になるように休憩と戦闘を見極めるのでそんな考  
えを持っている人は少ない。

もちろん、適材適所と言ってもずっと前に出ている者もいる。

「ぬうんー」

大盾を使いモンスターの吐いたブレスを止めるガレス。

盾越しとは言え直撃して居るのに全く堪えた様子は見られない。

彼にとってこの程度のモンスターは脅威になり得ないのであろう。

それを信頼し仲間の限界を見極めれるフィンの技量は経験と努力  
あつてこそなのだろう。

「きゃあー」

「もつと仲間を信じろ、必ず守ってくれる」

そんな中、後方からそんな会話がかすかにベルの耳に入った。

そうして進むこと数十分。

ついに中層も終わり、『新世界』と呼ばれる下層に足を踏み入れるこ  
ととなる。

「う・・・わあ・・・!」

目の前に映るのはどこまでも落ちる大瀑布。

どこから流れてきてどこに流れて行くのか、未だに謎とされている  
その滝は階層を越え流れ続けてる。

ここには小さめの川も流れているが、それらは最終的に全て一つに  
まとまるように流れるとされている。

圧倒的なその光景に口が開いたままになる。

「ベルは驚いてばかりだね」

そう言うのはベルと同じように軽戦士として扱われて重戦士と魔術師に挟まれて待機していたアイズ。

このやり取りも二回目である、お互い目を合わせた後小さく笑う。二十五階層に広がるこの光景は美しくもあり、また危険でもある。階層を貫く滝、もちろんわかるように落ちれば下の階層に行くことは可能である。

しかし、下層で水の中に入るとは死の危険がつきまとう。と言うよりも殆どの者は生き残ることはできない。

圧倒的な水量から成る水圧は落下し終えた時、その者の四肢をバラバラにしてしまうのである。

それだけでなくもちろん水棲モンスターもいるので、川に入るのも厳禁である。

それは下層に来る際、リヴェリアに耳にタコができるほど聞かされた注意事項であった。

「朝も言ったけど、今日はここで一旦交代で休憩を取ろうと思う」  
二十五階層の少しひらけた場所でそうフィンは告げた。

「休憩は六時間。事前に決めたグループ内で警戒する者とに分かれてくれ、時間はしっかり見ておくように」

そうしてそれぞれのグループに分かれはじめる。  
そんな中ベルはと言うと・・・

「何で私がこんな男と・・・」  
「はは・・・」

何故か毛嫌いされているエルフの少女。

エルフは異性と触れ合うことを極端に嫌うとはいえベルだけ異常に嫌われているのは

もともとアイズからの提案で二人で組むことになっていたのだが、それを聞きつけたのか自分も混ざると言われたのである。

そして、

「こら、レフィーヤ。家族にそんなことを言うんじゃない」

年頃の男女が三人では何かとまずいと感じたのか保護者のようなものとしてリヴェリアが参加した。

二人ならいいのかと問いたくなるがそこはもう今更だろう。

結果的にベルのいるグループは女三人男一人のハーレムのような形になったが、内情はそんなに甘い物ではなかった。

「ベル、本読も」

足を伸ばし、膝をポンポンと叩きながらそう促すアイズにこちらを凄まじい形相で睨むレフィーヤ。

さすがにその睨みが何に対するものなのかはわかったベルはやんわりと断りを入れて明日以降に備えて交代で睡眠を取る。

五日かけて五十階層の安全地帯までたどり着く旅路はどんどん過酷なものとなってゆく。

▽      ▽      ▽

「アーーーーズっ!」

「?」

「最近あの新人君とよく一緒に居るけど……どんな関係なの?」

遠征より数日前のダンジョン攻略中、背中に抱きつくティオナにそう尋ねられたアイズはしばし思考する。

どんな関係かと聞かれると……わからない。

他の人よりもよく話すのは間違い無いだろう。

あの尋常では無い成長速度が気になった、と言うこともあるが……なにか自分でもよくわからない思いが胸中を巡っていた。

ふと、昨日の夜にベルの部屋にお邪魔してベルを膝の上に乗せて本を読んでいたことが頭をよぎる。

「ん……なんだろうね?」

その時を思い出して思わず笑みが漏れる。

そんな自分を見てティオナがポカンとしていたが、何故なのかはわからなかった。

## 無力感と、昏き望み

ギンツーーー

何かに弾かれたような鈍い音が喧騒に混じり消えていった。

その直後、後ろから魔法が放たれ敵は絶命する。

「あ、ありがとうございます！」

「まともに打ち合えないなら後方に！前衛もつと詰めて！」

遠征4日目、場所は49階層。

ここまで順調に歩みを進める「ロキ・ファミリア」の遠征隊だったがその中でベルは対処ができないことに焦りを感じていた。

初めに限界が見え始めたのは3日目に辿り着いた『ホワイトパレス白宮殿』と呼ばれるエリア。

37階層から42階層までにかけて連なるその迷宮地区はそれまでと比べて規模が遥かに大きくなる。

それまでは武器の性能、魔法の補助のお陰で自分の最新到達階層よりの階層でも戦えていた。

しかし、もちろん階を下るごとにモンスターは力を増していく。

自分よりもレベルが高く、ステータスも優れるモンスターが次々と現れてベルを圧倒していく。

この付近の階層まで来ると打ち合うと言うよりも必死に受け流すのが精一杯であった。

仕方ないと言ってしまえばそれまでであろう。

実際、一般的な冒険者からすれば「なんでそこまで戦えるんだ？」とも言われるような動機はしているのである。

ただし、Lv.2として見ればという但し書きは付くが。

無力感に苛まれる。

先程言われた言葉がぐるりぐるりと頭を巡る。

はつきりとは明言していないものの明らかな戦力外通告。

それを理解していながらも認めたくないと思う程度にはベルは子供だった。

(まだ、いける！)

そう、指示を無視して再び前へと駆け出した。  
焦りを捨てきれぬまま、盾を構えて気を引く団員達の間をかいくぐってモンスターへと切り込んで行く。

ローしかし、その一撃が届くことは無かった。  
世界が回り、視界は赤く染まる。

全身が焼けるように痛む。

体を動かそうとしても、指先すら動かない。

なんとか目を動かして見れば自分の足がおかしな向きへと曲がり、腕に関しては肉が削げ、白い骨がむき出しになっている。

あまりにも酷い自分の状態に恐怖が巻き起こる。

そんな中、呼吸は段々と浅くなりロー何かに引っ張られる感覚を最後に、その意識は暗闇へと沈んだ。

▽      ▽      ▽

「ベル！」

吹き飛ばされ、倒れたベルに駆け寄り後方へと下がる。

幸いと言うべきか、モンスターは他の団員達の対処でベルに追撃を仕掛ける気は無いようである。

急いで容態を確認すると、酷い怪我だった。

躊躇いなく最上位の魔法薬エリクサーを使う。

気絶しているために飲ませることは困難を極めたがなんとか成功し、みるみるうちに体が修復されていく。

「アイズ！前に戻れ！」

その事にほっとする間もないままベルを預け、すぐに前線へと戻る。

次の階層が安全階層セーフティポイント。

皆の気が緩んだ時にそれは突然訪れたのだった。

壁が裂け、モンスターが産み落とされる。

それなら何の変哲もないダンジョン内での出来事で終わったのだが、その量が尋常ではなかった。

急いで対処にあたり、戦線が安定してきた所でのベルの被弾だったのである。

オラリオ二強ファミリアの名に恥じぬ団員たちの戦いと自身の復帰が早かったこともあり、すぐに状況は落ち着いた。

「軽く負傷者の手当を！50階層は目の前だ、すぐに出発するよ」

フィンの号令で団員がすぐに行動を開始する。

「悪いな・・・」

「気にすんなって」

無事な者が歩けない程の負傷者の肩を持ち、謝罪を笑って受け流しながら歩みを進めている様子が見られる。

こういった所にも団結力は現れるのだろう。

そんな中、意識のないものは力のある団員に担がれて移動する事になる。

そしてベルもそのうちの一人として50階層へと到達することになったのである。

▽  
▽  
▽

5日目、深夜。

激しい連戦を抜け、セーフティーポイント50階層に辿り着くなりぱたりぱたりと数人の団員たちが倒れていった。

起きろおおお、と両手を持って引き摺るように野営地まで運んで行かれる様子は先程まで勇猛に戦っていた戦士とは思えない。

そんなコントのようなやり取りを見て、遠征隊に笑いが広がっていった。

弛緩した空気のままキャンプを炊き、食事を取って眠りにつく。

数人は見張りがいるが、警戒は怠っていないものの談笑しながら気持ちを持ちをリラックスさせている。

この50階層に来るまで、命を落とした者はいない。

過去にはもちろんそうだったことも幾度となくあったが、それらの経験を生かして組まれたパーティーの立ち回りや遠征の計画のお陰



で最近は少なくなっている。

しかし、負傷する者はやはり少なからず出るわけであって……

「……ベルは、大丈夫?」

負傷者が寝かされる複数のテントの一つ。

ベルがいるテントの前で二人の人物が会話を交わしていた。

「やあ、来ると思ったよ。アイズ」

腕を組み、テントの柱にもたれかかるようにしてたたずむフィン。

いつものように人の良い笑みを浮かべてはいるが、その目にはどこか冷酷とも取れる光が宿っている。

「ひとまずベルの容体だけど、アイズが使ったエリクサーのおかげで後遺症もなく回復しそうだよ」

背後のテントをちらりと見ながらそうフィンは言う。

そのことにほっと胸を撫で下ろしているアイズを見て、思わずと言った様子でフィンは苦笑を返す。

「あのエリクサー、いくらくらいだっけ?」

「……600万ヴアリスぐらい?」

「……やっぱりそうだね、それを他人に迷いなく使えるのはアイズくらいだよ」

そう言うが、他人になら使うことは無かったのだろうことはフィンも理解している。

そこで言葉を切り、一層視線を鋭くしたフィンは告げた。

「だけど、少なくとも遠征中はそんな自分勝手なことを許すことは出来ない。戦線離脱など以ての外だ」

その顔に浮かぶのは静かな怒り。

滅多に見せないその圧力にアイズですら思わずたじろぐ。

ここでピクリとなにかに気付いたような素振りを見せたフィンだが、話を続ける。

「助けたことを否定するつもりは無いよ、それは良くやってくれたとも思う。それでも、アイズが抜けた時に戦線の維持がしにくいのは分かっているはずだ」

それにこくりと頷きを返す。

アイズは既にLv. 6。

元からその魔法との相性も相まって主火力となっていた彼女自身、自分と同等の働きが出来る者が限りなくいないに近いことは理解している。

「だったら、あの時ベルを助けるのは他の人に任せるべきだった。機転を聞かせてみんなが動いてくれたおかげで何ともなかったけど、一歩間違えれば甚大な被害が出ていたよ」

柱から背を離し、横を過ぎ去っていくフィン。

「少なくともこういう時くらいはあまり干渉しないように。僕達だって、深層ではそんなに余裕があるわけでもないしね」

それだけだよ、と言い残してフィンは自身のテントへと戻っていった。

フィンに言われてはいたが、一応無事な姿を確認するべく入口から中を覗き込めば、端の方に月光に照らされる白髪が覗いていた。

暗さの影響か顔は見えなかったが、かけてある布が規則的に上下していることにひとまずアイズは安心する。

フィンの言葉を思い出し、それ以上何かをするわけでもなくその場を離れ、少し離れている自身のテントに戻って行く。

ーーーーギリッ

「？」

背後からなにか聞こえたような気もしたが、なにか変化があるわけでもなかったため、気にせず休息を取るべく足を進める。

そして誰もいなくなったテント前。

ぼふっ、と何か柔らかいものを叩くような音がした。

「う、うう……」

微かに咽び泣きが聞こえる。

(僕は、なんて弱いんだ……)

目が覚めたのは少し前。

丁度、自分勝手だとフィンがアイズを責めた時である。

エリクサーの値段が耳に入らなかったのは幸運と言えるだろうか。調子に乗り、慢心し、飛び出した結果がこのざまだった。

それだけではない、団員全てを結果的に危険に晒してしまったという事実が告げられた時、団体で動くという事の難しさを叩きつけられた気分であった。

何よりも慕う人物に何度も、何度も助けられているというこの状況。

酷く、自分が惨めに思えた。

英雄になりたい、多くの人を守りたいと願いながらもそれには致命的にまで足りていないものを改めて自覚する。

(強さが・・・力が、足りない)

伏せていた顔を上げ、月光に照らされたその深紅の瞳にはどこか昏い光が宿っていた。

それは、まるで少し前のアイズのような瞳であった。

## 小さな騒動

時間は経ち、遠征後2週間が過ぎようとしている頃。

死者もなく遠征は終わり、無事に帰ったのも束の間、一人の少年には変化が見られるようになった。

ダンジョン内部、30階層。

(・・・もつと、力を)

ナイフに付いた血を払うように横へと薙ぐ。

遠征時、戦闘をする機会が少なかった大瀑布の流れるこのエリア。ベルの力量と照らし合わせてみても、明らかに安全とは言えない階層である。相当な無茶をしているであろう事は、その風貌からも窺えた。

黒いコートは所々に引き裂かれたような跡が。鞆にしまったナイフも、刃こぼれが目立つようになっていた。

極めつけには、いつもは白いその髪も返り血を浴び、赤く染まっている。

すれ違う他の冒険者たちが思わず二度見するような変貌ぶりであつた。

唯一と言うべきか、背に背負う呪剣だけは鈍く鋭い輝きを残したままであつた。

「GYAAAAA!!」

自分の頭上から急に聞こえた叫び声に即座に呪剣を引き抜き、逸らすように前に掲げる。

それでも衝撃を受け流しきれず、後ろへ倒れそうになる。

ー頭をよぎるのは遠征での出来事。

抵抗もできぬままに壁へと打ち付けられ、一撃で沈んだその記憶。

「・・・ツーあああー!」

全力で後ろに足出して踏みとどまり、身体を独楽のように回して滞空しているハーピーの胴へと呪剣を滑らせる。

それだけで声もなく灰へと還るハーピー。

(これじゃ、ダメだ・・・)

呪剣を一度眺め、再び鞘へしまう。

これが自分の力とは言えないのをベルはよくわかっている。

武器が強くても、自分が弱ければ意味が無い。

募る焦りと無力感に苛まれる。

ハーピーの魔石を回収し終わったベルは、膨れ上がったポーチを見てため息を一つ。

「・・・帰ろう」

一瞬よぎった魔石を放置して進み続けるという選択肢を首を振り却下し、踵を返す。

(もつと・・・敵を倒すための力を・・・)

遠征5日目。

各々休息をとり、最高とは言わずともいいコンディションで迎えた51階層以降の攻略。

遠征自体の最終目標である56階層へ向かうために再編成された遠征隊の中にベルは選ばれていなかった。

怪我から回復していたのにも関わらず、である。

その意味もわからぬほどベルは腑抜けているわけではなかった。

50階層で1日待機した後、帰ってきた遠征隊と共に地上へと上がった翌日からすぐにベルはダンジョンへと向かい、その日は帰らなかった。

翌日の昼ごろに帰るとすぐにロキのもとへ向かい、「ステイタス」の更新を終わらせて夜まで眠り、再びダンジョンへと駆け出す。

目が覚めたとき、これまでのように本を読みに来ていたアイズが寝ている真横にいて一悶着あったのはお約束である。

そんな日々が続き、遠征後アイズと会ったのはその一度きりであった。

だから、久々に聞いた声がどこか新鮮に思えた。

「ベル・・・？」

「……アイズ、さん？」

その変わった容貌故か、疑問形で尋ねてくるアイズが目の前にいた。

遠征時にも見た装備に自分より遥か下の階層で戦っていた事が察せられ、自分との距離に少し気が沈む。

自分と同じように1人で歩み寄ってくるアイズは、ベルであると確認し若干ほっとしたような表情をしながらこちらへと歩み寄ってくる。

「私は今帰るところなんだけど、一緒に帰る？」

「……はい、僕もそうしようと思ってたところなので」

丁度自身もそうしていようとしたこともあり、拒否することも無く素直に頷き2人で帰路につくのだった。

無論、アイズの誘いに対して拒否するという選択肢はベルの中には存在していなかったことは言うまでもないだろう。

▽      ▽      ▽

「うわっ……」

自分の部屋へ帰り、鏡を見て思わずそんな声が口から出た。

道理で街中で奇妙なものを見る目で見られたり小さく悲鳴が聞こえたりする訳だと納得する。

装備を解除し、着替えやや桶などの入浴の用意をして部屋を後にした。

黄昏の館には、団員が自由に使える大浴場が存在する。

建設された当時、タケミカツチに東国の「オンセン」なるものを教わったばかりのロキがその伝えられたものを参考に大人数で入れる浴場を作ったのだった。

夜になれば帰ってきた団員たちが疲れを癒す浴場も、太陽が真上に登る前のこの時間帯には人もおらず、貸し切りのような状態になっていた。

「ああ……」

人によつて好みが分かれるこの浴場だが、ベルは髪と身体をしつかり洗い終えてから湯船に浸かり、情けない声を出していた。

身体全体が湯に沈み、少し溢れた分が微かな水音を立てながら流れてゆく。

その温もりに身体の僅かな緊張もほぐれて行くような気がした。

(……ん？誰か来たのかな、こんな変な時間なのに)

脱衣場と風呂場とを仕切る扉。

硝子に凹凸をつけるようにして反対側がぼんやりとしか見えないという特殊な細工がされているその部分に、人影が写りこんでいた。それを良く見てベルは硬直する。

上半身にもタオルが巻かれ、微かに見える男にはない膨らみ。

極めつけには硝子越しでもわかる綺麗な金髪。

ガラリと音を立てて開かれた扉の奥、髪と同じ金色の瞳とがつつり目が合った。

「……ベル？」

「は、はい」

「……、女湯だよ？」

「……いや、えっ？」

急いで記憶を掘り起こす。

この浴場は、男女で造りが異なる。

そのため、数日ないし数週間おきに入れ替えがあるのはベルもこれまでの生活で知っていた。

だからこそ余計に気を配っていたし、入る時もしっかり男湯と書いてある入口に入ったのを覚えている。

そんな思考が回る中、目の端に写る肌色に気を取られてしまうのは仕方の無いことだろう。

冒険者という職に就いているにもかかわらず透き通るように白い肌。

何を考えているのか普通に中へと入り、こちらに背を向け身体を洗い始めると、その髪を分けた時に艶めかしいなじがどうしても目に

付いた。

「す、すいません！すぐ出ます！」

変に言い訳をすることを放棄し……この場合はあまりの緊張に逃げ出したいという気持ちが強かったが、すぐに風呂から上がろうと腰を浮かせた。

何よりアイズの言い分が正しいとすれば、可能性が低いとは言えほかの人が入ってきた時に大惨事になってしまう。

「待ってて」

湯に浸かる時はもちろんタオルも何も付けていないために、慌てて近くに置いていたタオルを掴んで大事な所を隠しながらそそくさと退散しようとするそう声をかけられた。

「……はい？」

「どうせ誰もいないし、一緒に入ろうよ」

「でも、流石にそれはまずいような気がするんですけど……」

「ダメ……？」

身体を少し後ろに向けて悲しそうに視線を向けられる。

濡れた髪にその視線、破壊力は凄まじい。

更に、身体を洗うためにタオルをとっていてもう少しこちらに振り向けば双丘の先が……

「分かりました！すいません！」

「……なんで謝るの？」

土下座の体制で視線を強制的に下に固定する。

見たいという男としての欲求と理性との争いに軍配が上がったのは後者だったようである。

そのせいか、返答と現在の心境を何も考えずに口に出して意味不明な返答になっていたが。

落ち着かないながらも湯船へと戻り、再び至福の温もりに顔を緩める。

女性のお風呂は長いなあとベルが感じるようになった頃、丁度アイズも湯船へと入ってきた。

明らかにタオルを巻いていない事が目の端からの情報で察せられ、



首がちぎれるほどに逆方向に振り向きながらなんとかタオルを巻いてもらった。

(・・・普通、逆じゃない?)

そう内心で思ったのは仕方の無いことだろう。

マナーの悪い行為だとは自覚しているが、ベルも既に身体の変化を隠すためにタオルを巻いている。

男として認識されるのは先のことになりそうである。

そう内心でため息をつくのだった。

「最近ずっとダンジョンに潜りっぱなしだけど、何かあったの?」

そんなアイズのさりげない一言に、やましい事は何も無いというのに少し心臓が跳ねた。

「・・・強くなりたいから、です」

力が欲しい。

何度も繰り返してきたその言葉、あの出来事以来その想いはさらに強くなった。

その為は無茶な攻略もしたし、今日までのように三日間潜り続けたりもした。

「・・・そっか、そうだよね」

アイズも、ベルが無茶な攻略をしている事は知っている。

ベルの部屋で一人で本を読むことも最近は増えていた。

そんなベルの回答に懐かしむように頷いているのが印象的だった。でもね、とアイズは口を開く。

「ずっとダンジョンにしていることだけが、強くなる道じゃないと思うよ」

「・・・どういう事ですか?」

地上で誰かと鍛錬をすることであろうか。

確かにアイズとの打ち合いはベルの力となり、何度も命を救ってき

た。だが、アイズから帰ってきたのは違った答えであった。

「楽しいと思うことがあれば、気持ちも楽になって・・・良い気がする?」

コテンと首をかしげながらそう言われて、思わずベルは笑ってし

まった。

なんとも要領を得ない回答である。

これはベルは知らない話であったが、ベルが入団してからのアイズは根を詰めて攻略をしていた頃に比べて成長が早い。

ステイタスという形で目に見え、他ならぬロキがそう感じていた。

「楽しい、ですか・・・」

「うん。だから、私が言えた事じゃないけどあんまり無茶しすぎるのも良くないと思う」

ベルとて、今の生活が褒められたものでは無いことは分かっている。

強くなりたいたいという想いとせめぎ合いが内心で続き、難しい顔をしていると頭に優しく手が乗せられた。

「私も、ベルがそんなにボロボロになるのは見たくないよ」

仲間、家族としてであつてもそう言われることは、ベルにとって嬉しいことだった。

その後気まずくない沈黙が続き、ふとベルは気になったことは尋ねてみた。

「アイズさんの、楽しいって思えた事って何なんですか？」

「んー・・・」

その問いに一瞬悩む素振りを見せ、ちらりとベルの方を向き、

「・・・内緒」

と、はにかんでそう言った。

その頬が少し染まっていたのは、湯に浸かっているからなのか。

少なくとも今の時点ではベルにはわからないままだったが、その純粹な笑みに思わずベルの顔も熱くなる、

真つ赤に染まったベルを見て、アイズは少し慌てた様子を見せた。

「ごめんね、長風呂させちゃって。そろそろ出よっか」

「は、はいー」

二人で立ち上がり、一緒に脱衣所へ行こうとした時に問題に気付く。

同じ場所で着替えるのはまずいだらうと。

元から入っていたベルを氣遣ったのか、先にベルが着替えることで話が落ち着いた。

アイズは湯船へと戻り、ベルは上がろうとドアに振り返った時、再びガラス越しに人影が映った。

逃げる、隠れる、どの行動も間に合わなかった。

無慈悲にガラリと扉は開き、そこに現れたのはもちろん女性。

「ぎゃあああああ!!」

「・・・ベル？何故ここにいる」

叫び声をあげたのは山吹色の髪を持つ少女。

いつもベルに殺気を振りまくレフィーヤである。

それとは対照的に落ち着いた態度を崩さないリヴェリア。

訝しむようにベルを眺めるがそれは無理もない、何せここは今は女湯なのだから。

「す、すいません!!」

再び土下座へと体制を移行する。幸いと言うべきか、腰にタオルを巻いていたために最悪の事態は避けられていた。

だが、スタイルに天と地ほどの差があるとは言え、二人とも見た目麗しい女性である。

アイズの時といい、ここまで理性を保てたことは世の中の男が聞けば賞賛が上がるだろう。

最も、それを一瞬でも拝んだ事に対しての怒号の方が大きいであることは間違いない。

「なんでここにいますか！変態！社会のゴミー！」

「落ち着けレフィーヤ。ベル、とりあえず説明を・・・アイズ？」

容赦ない暴言を吐かれるが、ベルはそれを甘んじて受け入れる。

しかし事はまた良くも悪くも進むようで、こちらへアイズが歩いてきていた。

「ごめん、私が許したの」

（・・・いや、その言い方はちょっと不味く無いですか!?)

確かに、（間違っって入っていたベルが上がるうとするのを止めて一緒に入るのを）許したのは間違いないが、そこだけ抜き取ってしまう

とベルが女湯に入るのを許可したようになってしまう。

そこでベルの正面から感じ慣れた殺気が爆発する。

ダメだとわかりつつも震えながら顔を上げれば無表情にベルを見下ろすレフイーヤの顔があった。

綺麗だなあと場違いなことを考えながらしばらく見つめ合っていると、レフイーヤの口が開かれた。

「解き放つ一条の矢、聖木の・・・いたっ」

「止めんか、こんなところで魔法を使うな」

思わず逃げるために中腰になりかけていたベルだが、リヴェリアのおかげでひとまず危険は去った。

しかし、新たな危機が訪れようとしていた。

今しがた魔法の詠唱を行った際、魔法の発射の都合上両手を身体の前で重ねている。

タオルから手を離れた状態で軽くでも衝撃が与えられたせいでハラリとタオルが滑り落ちた。

「きやああああ!!」

二度目の悲鳴が響き渡り、同時にベルの視界が暗くなった。

それと同時に背中側が自分以外の温もりに包まれる。

「見ちゃダメ」

し暗くなつたのは後ろからアイズに目を塞がれているからであり、そのファインセーブのおかげでベルの目には何も映らなかった。

だが、またここでも事件が起こった。

「あつ、アイズさん、その・・・」

「？」

むにゆりと背中に押し付けられた柔らかいものに思わず声が裏返る。

しかも、アイズが巻いているタオルは先程まで湯に浸かっていた。

それはびったりと身体に張り付いているということで、柔らかい中にどこか固いものが、と気付いたところでベルは限界を迎えた。

「すいませんでしたああああああ!!」

と、大声で叫びながら全速力で扉の奥へ向かって逃げ出した。

そんな初々しい少年を見て、リヴェリアは大きなため息をつく。

ベルの様子を見てみると、アイズとこんな状況で二人きりになったことで少しは心境に変化が出たのだろう。幾分か顔色も良くなり声に活力が戻っていた。

先程のアイズの言葉も若干語弊があつたのだろう。

「だが、それとこれとは話が別だ。後で説教だぞ、ロキ」

虚空に投げかけられたかと思われたその言葉は、しっかりと隠れていた神の耳に届いたのであった。

「アイズさん！男はみんなケダモノなんですよ！こんなところで二人きりになるなんて危ないです！」

「・・・？ベルは危なくないよ？」

「そういうことじゃなくて・・・、ー！ー！」

ベルが飛び出した扉を睨んだ後、アイズに熱弁を振るうレフイーヤ。

余談ではあるが、エルフという種族自体が心を許し男性以外を嫌う風習があるが、レフイーヤのベルに対する態度はそれだけではないことは察せられるだろう。

そんな二人の延々と噛み合わない問答に、再びため息をつくのだった。